
真・恋姫†無双 ～転生して兄貴やっています～

ダルマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 ～転生して兄貴やってます～

【Nコード】

N1384U

【作者名】

ダルマ

【あらすじ】

自称神様（笑）の書類ミスで殺されてしまった主人公。 第二の人生として恋姫無双の世界で面白可笑しく生きていく事を決意。 シリアス？なにそれ美味しいの？

プロローグ的な何か（前書き）

自称神様（笑）の書類ミスで殺されてしまった主人公。 第二の人生として恋姫無双の世界で面白可笑しく生きていく事を決意。
シリアス？なにそれ美味しいの？

プロローグ的な何か

「ほんつとーに、申し訳ありません!!!」
開幕速攻土下座・・・まあそんな事されても

「俺死んじやっただんですよねえ・・・」

「はい・・・」

俺の目の前で泣き目で土下座しているのは、自称神様（笑）らしい。
ちなみに、何でこんな事になってるのかと言うと

俺帰宅 コンビニに行く 正面からトラック \ (^o^) /
っていうテンプレの様な死に方らしい。死んだなら死んだで仕方ないんだけど・・・

「書類ミスで死んだっていうのが、またなんとも言えない訳で」

「うう・・・」

そう、俺はこの自称神様（苦笑）の書類ミスでという、呆れ果てる理由で死んでしまったらしい。書類チェックは仕事の基本だぜ？
自称神様（呆）

「で、俺はこれからどうすれば良いんで？」

普通に考えれば天国か地獄のどっちかに行く羽目になるんだが・・・
あ、親よりの先に死んだから賽ノ河原で石詰め作業ですか？・・・

・・・鬱だ死のうorz

あ、もう死んでるんだっけか。どちらにせよ鬱だorz

「それが、まだ寿命の来てない人を天国とかに送ると・・・」

天国>書類が増えるんで、お引き取り願います。

地獄>ああ！？寿命がまだきてない！！？仕事が増えんだろ！！！

「と、両方から総スカンをくらってしまっんです。主に私が」

「お前がかよwww じゃああれか、俺は神様にでもなればいいのか？」

俺は新世界の神になる！ とりあえず獣耳と尻尾を標準装備の世界でも作ろうかね。

「いえ取りあえず、他の世界で生きて貰って、そこで死んだら送らせて頂くという形を取りたいんですが・・・実はもう行く世界が決まっています・・・」

犬と猫、狐・・・ああ虎尻尾もいいな。人魚とかハーピーもいいかも・・・って

「え、俺被害者なのに選択権無いの？」

「他の担当の者が『えーい面倒だ！適当にどっかぶち込んでおけ！

！ あ、書類

！？んなもん後だ後！！』という感じでやってしまい・・・」

「神様って結構アバウトなんだな……。じゃあ俺はどこに行く事になったんだ？」

「手を抜いて生きていかないと、結構辛いんですよ。貴方に行ってもらう世界は、>真・恋姫+無双<という作品の世界なんです。……ご存知で？」

ああ〜恋姫か。無印・真・萌迄全部やったなあ。しかも真か。

「あれ、もしかして俺戦に巻きこれたりする？」

「三国志ですからねえ……。ですがご心配なく！ 今なら転生した貴方の肉体を面白おかしく魔改造する事が可能です！」

「チート乙WWW」

「まあ行って貰って、速攻で死んだら流石に何も言えないので……」

そりゃそうだ

「で、何が良いですか？ 武力・知力・魅力MAXな、エロゲ主人公も真つ青な能力ですか！？」

「俺TUEEEは誰もが夢見る事だと信じたいが、まあ武力だけでいいや。そっぴや俺すぐ行かなくちゃならん？」

「武力のみつと・・・（一応魅力もあげますが、フヒヒ）そんな事も無いですが、どうしてです？」

「とりあえず軍略物読み漁りたいんだが」

てかここ本あんのか？ 遅くなったけど、周り全部白い壁みたいのだし。

「？知力MAXにすれば、そんな必要ありませんよ？」

「元から頭に有るより、自分から頭に取り込んだ方が色んな見方が出来るもんでね」

「成程成程。ではそこに色々置いておきますので、満足したら呼んでくださいね」

「あいよ・・・んじゃ読み漁りますか」

空腹の心配も無し、眠気の手配も無し。読書には持って来いだな。

・
・
・
・
・
約半年後

「あ~~~~、大体頭に入ったかな。普通に面白かったな・・・」

時間間隔も無いから、どん位だったのかまったく分からんな。・・・
こと

「終わったぞー、自称神様（笑）」

「（笑）って言わないで下さいよ……。もう良いんですか？」

「寝ずに読んでたからな。十分十分」

「じゃあ連絡しておく事がいくつかありますので、聞いて下さい」

そんな感じで始まった報告

- ・ 一刀はいない。
- ・ 送られるのは黄巾の乱が始まる20年前
- ・ 赤ん坊からのリスタート（身体が赤ん坊で、心はそのままってどんな拷問？）
- ・ 後は基本自由

「まさか一刀がないとは……。そんな設定で大丈夫か？」

「えっと……。大丈夫だ、問題無い……。でしたっけ？ これでハレムも目指せますね！」

とりあえず目の前の自称神様（笑）にアイアンクローをかましておく。女の子がそんな卑猥な握り拳を作るんじゃない。

「いっただだだだだだだ！！ な、何をするんですか！」

「あんな握り拳をするからだ」

「そう言えばあれってどんな意味なんですか？」

成程、教えられただけで意味は知らないのか。

「うう痛かった・・・あ、そうだ！武器って何が良いですか？」

「え、自分で選べんの？」

「当然です！ と言っても、後で都合良く渡すだけです」

そりゃそうだ、子供が武器持ってたなら普通に怪しまれるしな。

「んじゃ・・・と・・・を頼む」

「・・・はい、承りました！ それでは向こうのドアに入ると、始まりますので、頑張ってください」

言うや否や、俺の後ろに木のドアが現れた。 なんとまあ神様つてのは・・・

「そんじゃ〜第二の人生、楽しくいってみますか」

そう言いながら俺は、ドアの有る方へと進んでいったが・・・

カパッ

「ひよ？」

足元に穴、吸い込まれる俺、笑う自称神様（笑）。

「どんな時でもサプライズは付き物ですからね〜」

「いらんサプライズじゃーーーーー……!!!!」

まあこうして俺の第二の人生は始まった訳だ。取りあえず、今度アイツに会ったらまたアイアンクローかましちやる。

プロローグ的な何か（後書き）

どうも初めまして、ダルマです。

初めて小説という物を作り、結構はしゃいでおります。

処女作で、誤字脱字や不快に思われる様な点もあるとは思いますが、生温かい目で見守ってやって下さい……；、

ちなみにダルマは狐耳が好き、あのピンと立っている感じが何とも・
・。。

感想等ありましたら、是非是非お願いいたします。

主人公爆誕（笑）（前書き）

この小説は主のノリと勢いによって作られています。

その為、不快に感じるような表現も含まれていたりします。

それと、所々原作ブレイクが発生しています。

それでもいいよ！ という方は、どうぞご覧下さい。

主人公爆誕（笑）

穴に落ちた後、俺が目をあけるとそこには・・・

「まーくん！まーくん！ ほらほら、可愛い男の子だよ！」

「分かった、分かったから足を持って逆さ吊りにするな」

頭の緩そうな母親と、深いため息をつく父親が逆さまにいた。

両親と親戚達の話からすると、ここは江夏にある小さな村という事らしい。

ちなみに俺の名前は、性が李 名は通 字は文達 真名は柊。

正史の李通は確か、曹操に忠義を尽くした侠気の将・・・だったかな？

「バブウ（にしても・・・）」

俺の親父とお袋は昔、軍にいて結構高い位にいたが、上に立っていた奴等の腐り具合に呆れ果てて軍を辞めたという事を聞いた。

お袋の頭が緩くなり始めたのはこの村でノンビリ暮らし始めてからだそうだ。

あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！前からこんな感じかと思ったら、昔は鬼とまでいわれていたらしい。平和ボケとか、記憶喪失とか、そんな（ry

「しかし、君が結婚どころか子供まで産むとは・・・昔を知ってる奴がいたら、啞然とするだろうな」

「あら、私だって女よ？好きな人とは一緒にいたいし、子供だって欲しいわよ」

はいはい、惚気惚気。もうお腹一杯ですよ。

まあそんな感じでスクスクと育った訳だ。そんな俺は今10歳になった。

え？間省き過ぎだった？特にやる事も無かったから割愛させてもらったよ。

強いて言うなら、産まれたから半年で歩き始めた事か。

親父は啞然としてたが、お袋は

「凄い凄い！まーくん、まーくん、この子将来きつと強い子に育つよ！」

いつも通りのパープー母だった。

俺達は平和に暮らしてた。もしかしたら戦なんて起きないんじゃないかと思う程に平和だった。

しかし世の中というものは、そんな平和を台無しにするのが好きみたいだ。

「兄貴、ここですよ！ 最近噂になってる村つてのは！」

噂というのは食糧に関する事だ。前の世界の知識がある俺は、それを遺憾なく発揮し、この村の食糧事情は大きく変化したと言える。それは本人達の知らない所で広まっていき、結果、こいつらを呼び寄せる餌にもなってしまったという訳だ。

「ほ、確かに良い村みてえだな・・・おーしてめえら！ 遠慮は要らねえ、奪って奪って奪い尽くしてやれ！！！」

村に乗り込んでくる賊達。普通の村だったらこのまま蹂躪され、なすすべもなく死んで行くのだが・・・

「・・・面白い事してくれるわね、貴様ら」

「これで何度目か・・・お前達は学ぶという事を知らないようね？」

「いいじゃないか、暇潰し位にはなってくれる訳だし」

そう、この村には三人の鬼がいる。一人目はお袋の樊靈^{はんれい}。二人目がその友人美徳^{びとく}さん。三人目も友人の黄蘭^{こうらん}さん。お袋以外の二人も一児の母であり、まあなんだ・・・綺麗で強いです。

「はっ、わざわざ犯されに来てくれたのか!？」

「・・・貴様のような下種に私の体はやらんよ。私は髪の毛一本から、血の一滴まで全てまーくんの物だ!!！」

はいはい、惚気惚気。

で、こちら私のお袋様になります。性格が違ってます？ 戦いになると、昔に戻るって親父が言ってた。

「ハアツ！」

お袋は両刃の剣を振るい、賊共の首を刎ねていく。その動きには無駄が無く、まるで舞いを踊ってるかのように賊を切り伏せていく。

「よつと・・・確かに暇潰しにはなるけど、あんまり骨が無いのも味気ないものよ？」

剣をかわしながら、巨大なヨーヨーみたいな武器を振り回す美徳さん。それに巻き込まれ吹き飛んでいく賊達。

「賊共相手にそれは酷ってもんだよ。そーれ、飛んでけーー!!！」

鉄球を飛ばしながら軽口を叩いてるのは黄蘭さん。　おお、賊がどんどんミンチになっていく・・・。

「な、なめんじゃねえええ!!!！」

そう言つて一人の賊がお袋に斬りかかるが・・・

「なめて何か無いわよ。まあ貴様らなんて、なめていようがいまいが同じだけど」

相手が剣を振り下ろすより早く、お袋は首を飛ばした。

俺は初めの頃、目の前で人が死ぬ度に吐いていた。でも、そうしなければ自分達が生きていけない。

殺したくないから殺さない。それで自分の友人達が死んでしまえば、笑い話にもなりはしない。だったら守る為に剣を振るえというのは親父の言葉。

賊の殆どが死に、終わったかと思った時。

「きゃあああああああ！」

そんな時間聞き覚えのある声が、悲鳴となってあたりに響いた。

「そこの三人動くんじゃねえ！ こいつがどうなってもいいのか！」

賊の一人が一人の女の子を人質にとっていた。そしてその女の子とは

「流琉！！」

美徳さんの一人娘、典韋ちゃんだった。

「動くな！動くんじゃねえぞ・・・畜生よくもやってくれやがったな・・・」

お前らから来たんだろと思いつつ、落ちていた剣を拾い、相手の死角に移動する。

「おい！こいつを助けてほしかったら、食糧を渡せ！それから・・・てめえだ、そこの女」

「・・・なんだ」

賊が指名したのはお袋だった。(李通移動中)

「よくも俺の仲間を殺してくれたな・・・しかも、俺の弟まで・・・」

「・・・・・・・・」

お袋は答えない。ここでどう答えようと相手は聞かないだろうし、更に怒らせれば典章ちゃんが危なくなる。

「そつだな・・・よし。脱げ」

は？

「そこで脱げって言ってんだよ！！さつさとしゃがれ！！」

この賊は性根まで腐りきった奴のようだ。 美德さんは今にも泣きそうな顔になり、黄蘭さんは歯を食いしばりながら賊を睨みつけていた。

「樊靈・・・」

「・・・・・・・・大丈夫」

そう言ってお袋は自分の服を手をかけ、賊はそれを食い入るように見る。

典章ちゃんの首から剣が離れる・・・チャンス！！

「フッ！！」

一息で死角から賊の元に駆ける。狙うは剣を持つ手。

「ハアツ!!」

賊の腕から血が飛び散り、成功した事が分かる。賊が痛みあまり離してしまった典韋ちゃんを抱え、お袋達の元に走る。

「「流琉!!」」

美德さんは娘を抱きしめ、友人の許緒ちゃんが無事を喜ぶ。さて・

「柊……」

お袋様が俺を見る。声は怒ってないが、目が怒っている!!!!!!
止めて!李通の精神力は0よ!!!

「後で話があります……」

俺にとって最も聞きたくない言葉を呟いた後、お袋様は賊の元に行き、その首を刎ねた。

俺今日生き延びれるかな……

「さて、柀？」

どうも皆様、李通で御座います。私只今テリブルピンチで御座います。目の前には先程、賊相手に掠り傷一つ負っていないお袋様・美德さん・黄蘭さんが正座している俺を見下ろしています。

やばやばい、下半身のダムが決壊しそうwwwwww

「なんであんな無茶な事をしたの？」

「そ、それは・・・典韋ちゃんが危なかったかからと・・・」

「とっ？」

マズイマズイマズイマズイ！！ここで選択肢をミスったら確実に終わる！この小説が！！

（あんまりメタ発言しない方が良いですよ？）

（だまれ！自称神様（笑））

（自称じゃないです！！）

くそ、こんな自称にかまってる暇が無い！よ、よしこは。

「お袋があんな事されてたから・・・」

＼（＾０＾）／

何口走ってんだ俺は！！なに、マザコン！？マザコンですか！！！？

「・・・・・・・・」

顔を赤くするお袋。終わった！第一部・・・完！！

「・・・・・・・・・・・・・・・・ひ~~~~く~~~~ん!!!!!!」

「なああああ!!!?」

「もう！もう！嬉しい事言ってくれちゃってえ！いつの間にこんな男になってたのかなあ！」

良かった。選択肢は正解だったようだ。
ええい、ひつつくな鬱陶しい！

主人公爆誕（笑）（後書き）

もう少し村の話が続きます。

流琉と季衣のお母様を登場させてみました。

李通に関してですが、あんまり正史にのっとった行動は起こさせません。

主にそこまでの文章構成能力が無いからです・・・orz

感想等ありましたら、よろしくお願いします。

私が泣いて喜びますので^^

娘さん達と真名交換（前書き）

この小説には、オリキャラや原作ブレイク等が含まれております。
そういった物に耐性の無い方、不快に感じる方はブラウザの戻るを
クリックして下さい。

それでもいいよ！という方は、どうぞ楽しんで見て行って下さい。

早く！早く村を出たいそんな今日この頃！！

娘さん達と真名交換

ひつついて来たお袋を引き剥がし、一段落しようとした時、美徳さんと典章ちゃんが俺の所に来た。

「李通君、今日は娘を助けて貰い、本当にありがとう・・・」

少し涙目でお礼を言う美徳さんからは、あの時どれだけ娘を心配したのが分かる。しかも、その為に自分の友人が辱められようとしていたのだから尚更だ。

「いえ、むしろ謝らせて下さい。自分の軽率な行動で、典章ちゃんが更に危ない目にあうような事をしてしまったんですから」

そう。もしあの時俺が、賊の腕を斬る事が出来なかったら、誤って典章ちゃんを傷つけてしまったら・・・。今となっては只の過去であり助ける事も出来たが、もしかしたらそんな未来もあったのかもしれないのだ。

「だけど、そのお陰で美徳の娘は助かったんだ。良くやったよ、李通」

「うんうん！あん時の李通さんかつこ良かったよ！」

黄蘭さんは俺の背中をバシバシと叩き、許緒ちゃんは抱きついてくる。てか黄蘭さん、痛い痛い！背中が痛い！！

(しかし、今となっちゃあよく剣なんて振れたよなあ俺)

(あ、じゃあ説明しときますか?)

(でたな、暇な自称神様(笑)め)

(もういいですよそれで・・・(泣) 説明と言うのが、あの時お願ひされた武力MAXのチートなんですけどね)

(そうそう。ただ力が最強になるのかなあって思ってたんだけど、違うのか?)

(それが・・・その能力で書類を作って先輩に提出したんですが・・・)

先輩>「ああ!なんだこの不明瞭な能力は!よし。今ここで、お前がこの能力の詳細を決める!さあとつと決めろ、こっちは仕事が残ってたんだ!」

(とまあこんな感じになりました、私が決めた内容と言うのがですね・・・)

・武器を使うと筋力だけでなく、視力や反射神経、感覚等もMAXになる。

・武器を最適に使う事が出来る。
・身体は普通の人より丈夫。

(こんな感じでして・・・)

(何というチート・・・まあそれで今回は助かった訳か。よし、今日からお前は自称神様(笑)から、自称神様に変更だ)

嬉しい様な嬉しくない様な・・・何て事を言っている自称神様。

「あ、あのー！」

「ん？」

自称神様との会話を終え、気がつく俺の前には典章ちゃんがいた。

「き、今日は助けてくれて、あ・・・ありがとうございますー！」

そう言うと、ペコリと頭を下げてお辞儀をしてくる。そんな典章ちゃんを俺は・・・

「無事の様で何よりだよ」ナデナデ

微笑みながら頭を撫でる事にした。ああ、髪の毛さらさら〜。

「・・・・・・・・／／／／」

「あー！流琉ずるーい！ねえ李通さん、ボクもボクも！」

アツハツハ、何この可愛い生き物WWW

「許緒ちゃんは何もしてないだろうに・・・まあいいか」ナデナデ

「えへへ〜／／／」

くすぐったそうにしながら、嬉しそうな顔をする許緒ちゃん。その後ろでは母親、sがそれを見ながら笑っていた。

ええい、こつ恥ずかしい！

「そういえばひーくん。流琉ちゃんや季衣ちゃんの事、まだ真名で呼んでないの？」

昼食も食べ終わり、まったりとした時間を過ごしていると、お袋がそんな事を聞いてきた。いや、呼ぶも何も許されてませんからね？

「そう・・・ですね。うん。じゃあ李通さん、私の事はこれから流琉って呼んで下さい」

「ボクもいいよ。季衣って呼んでね！」

「えっと・・・いいのか、そんなあっさりと？」

「実はだねえ、季衣も流琉も本当は真名で呼んでもらいたかったのさ」

「でもそんな事を言う良い機会も無く、今の今まで引っ張ってきたってわけ」

なる。で、今回のがその良い機会とやらになった訳か。

「それじゃあ改めて、性は李 名は通 字は文達、真名は柊だ。これからよろしくな、流琉、季衣」

・・・ん、反応が無い？ 何これ、新手のいじめ？ 泣く

よ？すぐ泣くよ？絶対泣くよ？ほら、泣くよ……グスン……。

「えつとですね……よ、良かったら……なんですが……」

顔を赤くしながらしながらモジモジする流琉ちゃん。ああ、小動物的可愛さってこういう事を言っただろうねえ。

「ねえねえ、柊さんの事、これから兄ちゃんって呼んでいい？」

勇気を振り絞っている流琉を尻目に、猪突猛進系天然少女二号の季衣がとんでもない事を言ってくる。

「ちよ、ちよつと！季衣！？」

「んにゃ？ どうしたの、流琉？」

「どうしたのって、柊さんに失礼でしょ？そ、その……兄様って呼びたいなんて……」

「えー。だって流琉も前から呼びたいって言ってたじゃん」

「そ、それはそうだけど……」

季衣的には、年上の頼りになる男性がいる。兄ちゃんがいればこんな感じなんだろうなあ思っている位だろうなあ。流琉に関しては分からんが。

そしてその後ろでは、それを微笑ましく見ている母親'sの姿。何か赤飯がどうとかって言ってる。

「構わんよ、どんな風に呼んでも。流琉も季衣も、小さい頃から面倒見てるから、妹みたいなもんだしな」

お袋の友人の娘だから、必然的に俺との交流もあった訳で。

リア充？ ハツハツハ、俺今三国志の人間だから、平成の言葉は分かんねえwww

「ホント！？じゃあこれからよろしくね、兄ちゃん！」

再びくつついてくる季衣。お袋もくつつきたそうだけど、美德さんと黄蘭さんに止められてる。二人ともナイスです。

「じゃ、じゃあ・・・よろしくお願いしますね兄様」

流琉はくつついてきてはくれないらしい。ちと残念な今日この頃。

「それにしても、あの程度の賊に遅れを取るなんて、そろそろ流琉も本格的に鍛え上げようかしら」

「そうだねえ・・・。どうする季衣？あんたも一緒にやるかい？」

「はい！」「」

二人とも以前から修行のような事はしていたのだが、まだ子供と言う事もあって敵しいのはやっていなかったが、今回の事件で、自分の身を守るだけの武は身につけておいた方が良いとの事で、二人とも特訓をする事となった。

「とりあえずは武器だけ・・・季衣は使いたい武器はあるかい？」

黄蘭さんがそう言つと、季衣は少し考えてから、

「いつつも傍で見てきたから、ボク、お母さんの武器が使いたい！」

「岩打武反魔をかい？ ハハハ、いい度胸だ。みつちり鍛えてやるから、覚悟するんだよ？」

「流琉はどうする？」

「私も母様の武器で戦いたいです。・・・ダメ、ですか？」

「そんな事無いよ。頑張るんだよ、流琉」

親から娘へ引き継がれていく武器。本当は、自分達から、使うか？と言つ筈が、娘達から使いたいと言つて来てくれた。その二人を見て、美徳も黄蘭も、心の中で嬉しく思っていた。

「ひーくんには、お母さんの武器は渡せないのよね」・・・

「・・・もし渡したら、俺が親父に殺されるよ・・・」

そう。お袋の使っている剣は、親父の持っている剣と一緒に作られた夫婦剣なんだ。それを俺が使つて言つたら・・・考えたくもない。

「それじゃあ丁度、村に商人が来てるから、そこで見せて貰いましょう」

ああ都合良く渡すつてこういう事か。ホントに都合いいな。

娘さん達と真名交換（後書き）

実は主人公はナデポを持っていたんだ！！

> r y

次回で主人公の武器が判明します。

ええい、戦は！戦はまだか！！

はい多分後2回ほどで話が変わると思いますので、お楽しみに^^

柊に逃げ場なし（前書き）

今回で柊の武器が判明します。まあ、そこまで変な武器では無い・・・
・と思います。

本作品には原作ブレイクやオリキャラなどが登場します。
それでもイイヨという方は、どうぞご覧ください。

柁に逃げ場なし

村に滞在している商人と言うからそこまで期待してはいなかったのだが、品そろえも良く、色んな物を扱っていた。

「いらっしやい。なにが要り用ですか？」

「武器とか有りますか？」

「武器……ですか？ 少々お待ちを」

そう言うと商人は、荷馬車の中から様々な武器を取りだししてきた。剣・槍・矛・槌……ホントに様々だ。

「やっぱどれもこれも量産品だなあ。なああんだ、もっと凄いのは無いのかい？」

「有りますけど……これなんです、名を双剣《蒼天・晴嵐》と言います。昔よく晴れた日に嵐が起きて、その後コレが見つかったと言う、まあ眉唾な物ですけどね」

「ちなみにお幾らほど？」

「これはお売りする事は出来ないんですよ。その見つけたというのがうちの先祖でして、以来、家宝となってるんですよ。」

ようやく自分の店を持てるという事で、自分の父親から譲り受けたというのがこの双剣と言う事だ。

「他には無いんですか？」

「……あれを武器と言っているのかは分かりませんが、一応有るには有るんですが……ちょっとこちらに来て下さい」

商人の言うまま、俺達は荷馬車の後ろに連れて行かれた。そしてそこで見た物と言うのが……

大きさ約2M余りの巨大な《剣》のようなものである……

「さっきの双剣を渡された時に、ついでにこれも持って行けと言われましてね。持てる奴もいないんで、今となっちゃあ只の鉄の塊ですよ」

そう、それは剣というにはあまりにも大きすぎた。大きく、ぶ厚く、重く、そして大雑把すぎた。それはまさに鉄塊だった。

(まあ俺が頼んだ武器なだけどね、これも)

「これで宜しかったら、差し上げますが……」

「どれちよつと……」

黄蘭さんが試しに持ち上げてみようとするが

「グ……ググ……！！　プハア！だ、駄目だ駄目だ。全然持ち上がらん」

この中では今の所、一番の力を持つ黄蘭さんでさえ持ち上げる事は出来なかった。さて、じゃあ試してみますか。

「ん〜。残念だけど、ひーくんの武器はまた今度で・・・」

お袋がそう言っつて荷馬車から離れようとした時

「よっ・・・と」

俺はその鉄塊のような剣を持ち上げていた。

「」「」「」「」「」「」「」「」

うん。まあ皆ポカーンとするわな。俺自身結構驚いてるから。

「え、ちょ・・・ひ、ひーくん!!?」

慌てふためく我がお袋。流琉と季衣に至っては、まだ口を開けて呆然としている。

「・・・なあ坊主。それ振る事できるか?」

商人のおっちゃんに言われた通り、一通り振ってみる。

「よっ ほっ はっ! よいしょ!」

振っているというよりは、剣に振り回されているという感じだ。まあ10歳の子供が2Mの剣を振り回せばこうなりますわな。

商人はちよつと待ってると言っつと、その手に先程の双剣を持って帰ってきた。

「次は、こいつを振ってみてくれ」

刀身が深い蒼で出来た剣が蒼天、夕焼けの様な刀身をした剣が晴嵐である。

俺は右手に蒼天、左手に晴嵐を持つとお袋の戦い方を思い出しながら剣を振る。無駄が無く、あの舞いを踊っているような感じのする戦い方を。

こちらも一通り振った後、俺の二本の剣の柄の部分を含ませ、更に振りまわした。

「な!？」

商人は驚いていた。なぜなら、家宝について自分の知らなかった事を目の前の子供がやったのだ。

「ど、どうでしょう・・・」

「・・・坊主、名前は何て言うんだ？」

「性は李 名は通 字は文達です」

商人は何度か深呼吸をした後、俺に対して

「李通。良かったら、あのでっかい剣とその双剣、貰ってくれねえか?」

「え!?!でもこれ家宝って・・・」

「どうせ売る事も出来ないで、埃を被るのがオチだからな。だったら、ちゃんと使える奴に渡した方が武器も本望ってやつさ」

結局その二つを貰い（実際は、流石にタダでもらうという訳にもいかず、食糧との物々交換）、家に帰宅した。

「良かったね兄ちゃん、良い武器見つかった」

「でも凄かったです。あんなおつきな剣を振った事ですけど、双剣を使った時の兄様・・・その・・・カッコ良かったですし・・・」

「？ 最後が聞こえなかったんだが、何て言ったんだ、流琉？」

「な、なんでもありません！」

（・・・） なんで今俺怒られたんだろ？

「柊」

ゾクウツ！！！！！

（この声、この感覚！！まさか！？）

その正体を確認する為、後ろを振り向くとそこには。

「ちょっと表に出ましようか」

お袋が、お袋様が変わっていた。

るか！と、思った時。

「クツ・・・な・・・嘗めるなあ！！！」

お袋様は両刃の剣で、俺と俺の双剣ごと無理やり斬り伏せようとする。当然俺は防御するしか無く

ガスッ！

鳩尾に拳をくらい、その瞬間、俺の意識はフェードアウトしながら暗闇に沈んでいった。

「まったく。樊霊が本気になったら、李通がかなう訳無いだろうが」「いやいや。そこは樊霊を本気に追い込んだ李通君を褒めるべきだろう」

「だって。まさかひーくんが、あれほど出来るなんて思わなくて」「思い思いの感想を述べている母親。s。一方その頃娘。s + 1はといつと

「てりゃああああ！！！！」

「はああああああ！！！！」

「うおらああ！！！！」

表で自分の武器を持って戦っていた。季衣は岩打武反魔を、流琉は伝磁葉々を持って。柊はあの巨大な剣を持って二人と戦っている。

「へえ。季衣の奴、中々どうしてさまになってるじゃないか」

「その点で言えば流琉もね。多少荒削りな部分は有るけど、今後が楽しみと言えばそうね」

「ハアアアア・・・っしゃおらあ!!」

二人が同時に攻撃してきた時、柊は剣をバットの様に振り、季衣と流琉の武器を跳ね返した。

「うわあ!？」

「きゃっ!」

投げた時以上の速度で戻ってきた武器を受け止める事が出来ず、二人とも武器と一緒に吹き飛ばされていった。

「ハアハア・・・あゝ、疲れた・・・」

武器を置き、その場で大の字になって倒れる柊。そして、そんな所に近づいてくるのは娘、s・・・ではなく

「お疲れ様、ひーくん」

お袋の樊霊だった。

「なあお袋・・・何でこんな事やったんだ？ お袋とならまだしも、

季衣や流琉とやる意味がどこに……」

「その事も色々を含めて……ひーくん、君、旅に出なさい」

……どうやらうちのお袋の頭の中は、常人とは違う構造になっているらしい。多分脳みその代わりに、杏仁豆腐が入ってるんだろう。そんなお袋が言うには、俺には素質はあっても、やはり経験が足りないそうだ。で、旅に出る事でその経験を培ってこいと事らしい。なあお袋、お袋ひょっとして俺の事が嫌いなのか？

「そんな事無いわよ。昔から言うじゃない、虎穴に入らずんば何とやらって」

多分、獅子の子落としだと思いたい。

「そして、君が旅に出ているその間、当面の二人の目標となって貰う為に戦って貰う事になったんだ」

ああ……なんだ、つまり。

「俺にはもう、逃げ道は残されていないと？」

「「「「そういう事」「」」」」

この後流琉と季衣に、俺が旅に出ると言う事を伝えた所。

「兄ちゃんが居なくなっちゃうのは寂しいけど・・・ボク、帰ってきた兄ちゃんが驚く位に強くなって見せるからね!!」

「近頃は賊が多くなってるって聞いてます。兄様なら心配無いとは思いますが・・・それでも、十分に気をつけて下さいね?」

何故納得する・・・いやまあ、お約束だとは思いますがね。

とりあえずは、食糧とかの準備かな。後は何本か短刀も持っていくか。ああそうだ、地図もあれば助かるな・・・って

「なんだかんだで、俺も乗り気なんじゃねえか」

確かに色々心配な事はあるが、それよりも楽しみが大きいのは俺が今子供だからなのか、元来の性分なのかは分からんが。

(人生楽しんだ奴が勝ちってな)

この先の人生に、思いを馳せる今日の天気はどこまでも高く、深い蒼天だった。

柘に逃げ場なし（後書き）

さて、ようやく村編が終了・・・と思いきや、後一回だけ村編が続きます。

あの巨大な剣の一文で気付いた人もいるでしょう。イメージ的にはベルルクのあの剣です。流石に大砲までは付けませんけどねwww
作者的にはシリアスも好きなのですが、やっぱりギャグとコメディと甘々な話が大好きなんです。ハッピーエンドが一番なんです^^

さて、ここまで読んで頂きありがとうございます。

ご意見や感想等が有りましたら、是非是非お願いいたします。

柊帰還！（前書き）

テンプレ・お約束等言い方は色々ありますが、これだけは言わせて下さい。

文才無くてすみません（泣）

柁帰還！

月日は流れて

「はぁ……………」

俺……………柁は20歳になりました。

え、また時間飛び過ぎだつて？ そう言わんでくれ。流石に10年分の話を作つたら、20話でも収まりきらんからな。

（メタ発言禁止です）

（なァ自称神様。俺がこの世界に生まれて20年経つたつて事は、そろそろ黄巾の乱が始まるんだよな？）

（ですね。というか、目の前に居るのがその片鱗じゃないですか）

「それはそうなんだけどな……………」

そう。今俺は、近くの村の長老に頼まれて賊退治をしている真つ最中。初めの頃は引きずりながら持っていた巨大な剣 竜殺し も、今じゃ背中にしよつて歩いているから、身体もかなり成長した訳で。

「っ！！ちくしょおおおおおおお！！！！」

賊が10人程纏めてかかつて来る。普通の奴は死ぬ。少し出来る奴は、傷を負いながらも勝つ。達人ならば冷静に対処して勝つ。そして俺は……………

「しっ！」

一息で賊10人を肉塊へと変える。10歳で旅に出て初めに学んだ事のは、躊躇わない事だった。

旅に出てからすぐ、俺は50人ほどの賊の集団に襲われた。結論から言うと、殲滅する事は出来た。

だが人を殺した事のない俺は、ある程度傷めつければ逃げるだろうと思っていた。しかし

「おらあ！！！」

後ろからの攻撃。腕を斬り落とした賊を、もう戦えないと判断し放置した。結果、その賊は後ろから俺を襲い、殺そうとしてきた。

（人は諦めない。生きている限り、人つてのは簡単には諦めない）

だから俺は、人を殺す事に躊躇う事を止めた。戦わなくていい時は、それが一番だが、戦わなければならぬ時は戦う。それが自分と、自分の大切な人を守るのに繋がっていると、俺はそう思っている。

「10年かぁ・・・皆元気にしてるかなあ」

ホームシックという訳ではないが、知り合いが元気にしているかは当然気になる。

よって、俺が答えを出すのに時間はかからなかった。

「うん。そろそろ帰るとするか。じゃいくぞ、黒天」

俺は旅の中で見つけた愛馬、黒天にまたがり、お袋や妹分達の待つている村に帰る事にした。

関羽 side

「ハアアツ!!」

「前と比べて動きは良くなったが……まだまだ甘い!!」

ガキーン!!

振り下ろした青龍偃月刀を弾かれる。私は自分の武に、少なからず自信を持っていた。だがこの村に来てからというもの、それは只の思い上がりすぎないという事を知った。

我らが義姉妹の杯を交わした後訪れた村で、我々は少なからず驚嘆を覚えていた。

今まで訪れた村で会った人というのは、賊共に襲われ、生きる希望を失いかけている人々だった。

「凄い……」

その村に居た人々は、賊に襲われたような形跡も無く、穏やかな日々を過ごしているように見えた。それが、村に住んでいた樊靈殿、美徳殿、黄蘭殿達によって守られていると知った時、我々は更に驚

いた。そして他の村と比べて決定的に違うのは、食糧の豊富さである。普通の村であれば、この様の時代、日々の食を得るだけでもかなり難しい事なのだが……

「10年前にね、ひーくん……私の息子が、画期的な方法で農業をやり始めたの。そしたら、その年から取れる野菜とかの量が増えてね。以来、この村ではその方法をとってるの」

自分の息子さんの事を話す樊霊さんは楽しげで、でもどこか寂しい雰囲気を出していた。ああそうか……

(こんな時代だ。昨日生きていた子供が、今日生きていられる保障は……無い)

私はそれ以上聞くのを止めた。

「さて……今日の鍛錬はこの辺で良いだろう。家に帰って昼食にでもしよう」

「あうう……疲れたよ……」

「情けない声を出さないで下さい、桃香様」

「にやはは お姉ちゃん体力無さ過ぎなのだ」

我が姉劉備 元徳と、妹の張飛 益徳が楽しそうにしている、いつもの様な光景。だが、いつものというのは脆く、少しの事で壊れてしまう物だという事を、私は失念していた。

樊靈殿の家に着き、家の中に入ると見知らぬ男が樊靈殿の夫、麻里まさと殿の剣を手にしているのが目に入った。あれは、樊靈殿の持っている剣と一対となっている夫婦剣だと、前にお二人が恥ずかしそう（惚気が八割）に話して下さったのを覚えている。目の前の男は、その大切な剣を盗みに入っているのだ！！

「貴様、そこで何をしている！！」

私が牽制の意味も兼ねて、男に対して声を出す。腰に差している二本の剣は業物の様だが、男からは何の気も感じられない。おそらくあの剣も盗んだか、奪った物なのだろう。

「このまま消えると言うならばよし。だが、その剣を持っていくというならば、それ相応の覚悟は出来ているだろうな？」

関羽 side out

久方ぶりに家に帰ってきたが、お袋も親父も居ない。近所の人達から聞くと、親父は近くの村まで出かけ、お袋は少し前からここに泊っている客人と、鍛錬をしているとの事。……客人大丈夫だろうか？

俺は竜殺しを奥の部屋に置き、双剣を腰に差したままで懐かしい我が家を見て回った。家具の配置は少し変わっているが、それ以外は俺が旅に出た時のままで、まるで俺だけが歳を取っている様な錯覚を起こすほどに。

ふと一つの剣が目に入る。

「親父・・・剣置いていつて大丈夫なのか？」

親父の持つ、お袋との夫婦剣。俺はそれを手にとり昔を思い出す。

(いつもこの夫婦剣の話になると、お袋も親父も惚気出して・・・まあそれだけ好き合っていたという事だろうけどな。他にも「貴様、そこで何をしている!!」・・・はい?)

声があった方を向くと、そこには綺麗な黒髪をサイドポニーに纏めた関羽雲長が立っていた。

「このまま消えると言うならばよし。だが、その剣を持っていくというならば、それ相応の覚悟は出来ているだろうな？」

「いや俺は「やめて!それはまーくんと大切な物なの!」・・・はい?」

お袋・・・なぜ説明させてくれない。まさか俺だと気づいていない!?

ありえないな。あのお袋に限ってそれはまず無い。現に今のお袋の目、すんげえ楽しそうだもん。

(さてどうしたものか・・・説明はさせて貰えない。このままだと戦う羽目になる。・・・あぁつまりお袋は、俺にここで戦えと? 柘すぐさまお袋にアイコンタクト・・・返信がきた)

(頑張つて)

ト畜生!!! 10年経ってもお袋の頭は杏仁豆腐のままだ!!!

「答えぬとは、覚悟は出来ているとみなす。外に出る。桃香様の家臣が一人、関雲長が相手をしてやる！」

とりあえず家の中で戦う訳にもいかず、夫婦剣をその場に置いて外に出る。

「一太刀で終わらせてやる。この村に賊は似合わん」

そう言つて俺に上段切りを仕掛ける関羽。まあなんだ、関雲長。

「相手との力量差も分からんのに、無闇に仕掛けるなよ馬鹿もんが」
振り下ろされる偃月刀を蒼天でいなし、関羽の懐に入る。驚愕の色に染まる瞳。慌てて防御をしようとするが、

「遅え！ そのまま寝てろ！」

鳩尾に正拳突きを放ち、意識を奪う。関羽の手から落ちる偃月刀を持ち、倒れかかる身体を優しく抱き止める。

(10年も旅に出りゃあ嫌でも経験がつくからな、お陰であの時より強くなつたけど。)

あの人は本当に悪い人なんだろうか。それが最初に私の中に出てきた疑問。だってあの人は、愛紗ちゃんが声をかけるまで夫婦剣をとっても優しい目でみていたから。

「答えぬとは、覚悟は出来ているとみなす。外に出る。桃香様の家臣が一人、関雲長が相手をしてやる！」

愛紗ちゃんがそう言うと、男の人はその剣を壊れ物を扱う様にそつとその場に置いた。

（持って外に出ていかない……って事はこの人は剣が目当てじゃ無い？）

考えても考えても答えは出ず、愛紗ちゃんが男の人に斬りかかる。樊靈さんに鍛えられた愛紗ちゃんの偃月刀は、以前よりずっと速く、力強いものだった。でも……

ギャリン！

男の人はその偃月刀を簡単にいなし、一瞬で愛紗ちゃんの懐に入った。あつという間に愛紗ちゃんは気絶して、男の人は倒れかかる身体を優しく抱き止め、私達の元に来た。

（やっぱりこの人は悪い人じゃない）

それが私、劉備 玄德が出した答え。

劉備 side out

「本当に申し訳なかった！」

そう言つて関羽は俺に頭を下げてくる。自分達の世話をしてくれた人物の息子を盗人呼ばわりし、一步間違えば殺してしまう所だったので、当然と言えば当然である。

「顔をあげてくれ関羽さん。ていうか、貴方が謝る必要はありませんよ。元々の元凶はうちのお袋な訳ですし。」

「だってえ、息子の成長が気になるのは、親として当然でしょう？」

「時と場所を考えてくれ。危うく胴体と首が、永遠にさよならする所だった」

「でもホントに強かったですよね、えつと……」

「ああ、そういや自己紹介がまだだったな。性は李 名は通 字は文達だ。10年ほど前から旅に出ていて、今日帰ってきたところなんだ」

「私は劉備 元徳と言います 樊靈さんには、色々とお世話になりっぱなしで……」

「鈴々は、張飛つて言うのだ！ でもお兄ちゃん、ホントに強いのだ」

「私は関羽 雲長。先程は本当にすまなかった」

はい存じ上げております。

「それで、旅はどうだったのひーくん？」

お袋がそんな事を聞いてくるので、俺は色んな事を話す事になった。村に雇われて、賊を退治した事。黒天との出会い。賊相手に後れをとる官軍。賊に襲われて人が居なくなつた村。食糧が尽きて、サバイバル生活を送っていた事。そんな中で、特に気になったのが

「そういえば最近、黄色の布をつけた賊を目にするようになってきたな」

黄巾党の出現。この大陸に大きな戦乱を引き起こすきっかけとなった戦を作った、大きな賊の集団。

「そう……ですか。桃香様」

「うん。樊霊さん、私達は前に言った通り、今日この村を出て行くと思います」

「……この大陸に平和をもたらす為、だつたかしら」

「はい。私達は、この大陸で困っている人達を助けてあげたい。皆が手を取り合つて笑っていけるようにしたいんです」

「私にそれを引き止める理由は無いわ。自分に出来る事を、精一杯やりなさい、劉備ちゃん」

「はい！……それで何ですけど」

何故こつちを見る劉備ちゃん。いやまあ何を言うのかは大体分かるけどな。

「李通さん、私達の仲間になってくれませんか？」

「ムリダナ（・x・）」

「え？」

「……理由を聞かせていただいても？」

劉備の後ろにいる関羽から鋭い視線が送られてくる。いや、俺にも一応拒否権とかあるからね？だから、そんな目で睨まんでくれ。ダメが決壊するから！

「俺はこの大陸を見て回りたいんだ。これから大きな戦が始まる。それに気付いてる奴は、どういう風に動くのかが知りたい」

「……我々は知るに値しないと？」

「三人がどう動くのかは、大体想像できるからな」

「お兄ちゃんは、鈴々達がどうするのか、分かるのか？」

「……まず幽州の公孫賛の所に向かって、黄巾党を討伐しながら力をつける。その後独立し、兵力を上げながら、更に力をつけていく……ってとこかな」

話終わると、劉備と関羽は驚き、張飛はよく分かっている感じがなかった。まあ、今の時期だったら大体こんなところだろうな。

「確かに・・・我々にはそれが一番のようすな」

「じゃあ白連ちゃんの所に行って、お手伝いをしながら力をつけていこう」

「鈴々は難しいことはよく分かんないから、お姉ちゃんに任せるのだ！」

三人は村をでて幽州の公孫？の決まり、食料と金子を分けて見送りをした。

「でも良かったの、ひーくん？ あの劉備って子、中々の子だと思っただけ」

「確かにね。でも、まだ甘い所もあるし、なにより現実が見えていない。まあそれはこれから次第だけだね」

また会うのは張角討伐の時か、はたまた反董卓連合の時か。楽しみだねえ。

「あれ、そういえばお袋。流琉や季衣はどこ行っただ？」

「二人はねー、少し前に陳留の曹操って人が来て、そこに仕えるっで行っちゃったわよ」

原作も史実もぶつ飛ばして、仕えたか。にしても、俺を待っててくれたりしなかつたんだなあ・・・兄ちゃんはちと寂しいよ・・・

「ちなみに二人とも、「兄ちゃんと会えないのは寂しいけど、強い人がいる所に行つて、兄ちゃんと会った時、驚かせるんだ!」つて言つてたわよ」

二人とも・・・兄ちゃんは嬉しいよ。次会えるのを、楽しみにしてるからな!

「さて、ひーくんが帰つてきた事だし、今日は御馳走にしましょうか」

「わほーい、ようやくまとまな飯が食べ」その前に「・・・ひよ?」

あの・・・息子は元気ですよ? ええ、確認なんかしなくても元気ですから、ねえ・・・

「どれだけ腕を上げたか見てあげます。かかつてきなさい、柎」

お袋様は止めてーーーーー!!!!!!

劉備 side

樊靈さんと李通さんに見送られて、私達は白蓮ちゃんがいる遼西へと向かった。でも私の中には、一つだけ分からない事があった。

「ねえ愛紗ちゃん。なんで李通さんは、白蓮ちゃんの所に行けって言ったんだろ？」

「え？ それは・・・この辺りでは、一番力を持っているからではないでしょうか」

「うん。でも李通さんの言い方だと、何だか私と白蓮ちゃんが前から知り合いだって分かっているような感じだったから・・・」

「お姉ちゃんの考え過ぎじゃないのか？」

「ううーん、やっぱりそうなのかなあ・・・」

私の中の疑問は消える事無く、モヤモヤしたまま私の中に残っていた。

劉備 side out

「ダメお袋様！ そんなの絶対に無理！！」

「男の子は度胸、なんでも試してみなさい」

お袋様（双剣）VS 柊（素手）

柊の今日はまだ始まったばかりだ！！

柊帰還！（後書き）

なんとか間に合った・・・

劉備の性格を少し変えて、軽く鋭くさせてみました。でも基本ポワポワなので、気づくだけです。解決する事は殆ど出来ません。今回は糖分が足りなかったなあ・・・。

課題が・・・課題が溜まってる・・・。誰か私に時間を下さい・・・。

（9/21）元徳 玄徳に修正しました

一騎駆け（前書き）

村に帰ってきた柊。しかし妹分の季衣と流琉は、既に曹操の元へ旅立った後。

柊の向かう道は！？

一騎駆け

「それで？ひーくんはまた旅に出かけるの？」

お袋との鍛錬の後、俺はお袋の作った遅めの昼食を食べ終え、今後について話し合う事にした。

「だねえ。この村はお袋達が居れば大丈夫そうだし、俺もまだ見えない所があるからね。行き先はまだ決まって無いけど」

呉に行くなら荊州、魏に行くなら陳留、蜀は・・・まあまだいいな。ここで別れたのにまた行つて、仲間にくれ〜なんて可笑しすぎる。となると、呉か魏のどっちかか。魏は・・・どうしよっかな。季衣達とはもう少し後で会いたいし。となると・・・

「呉・・・いや荊州に向かつてみようかな」

「荊州？ あそこは確か・・・袁家の袁術が治めているところだったかしら。ちゃんと治めているかは、別として」

「会いたいのには袁術じゃなくて、その客将になつてる孫策って人なんだ」

そう、江東の麒麟児と呼ばれるようになった孫策伯符。今の時期だったら・・・黄巾党討伐のために、呉の将を集めてる所かな。

「む〜、ひーくんがお母さんの事を無視して、別の女の人の所に行くとうとしてる！...！」

「親父に知れたら俺が殺されるから、そういう事は言わんで下さい」

ぶつちやけキレた親父は、お袋様より怖い。まあキレる事自体、滅多に無いけどな。

「んじゃ親父、お袋、行ってきます」

「いつてらっしゃい、ひーくん」

「樊霊の事は俺に任せておけ。お前はしっかりと世界を見てこい」

「やんもー！まーくんたら、カツコいい事言っちゃってえ」

「妻（夫）を守るのは夫（妻）の役目だからな（ね）」

はいはい、久々の惚気惚気。腹いっぱい通り越して、胸やけ起こし
そうだわ。

「ブルル・・・」

慰めてくれるのはお前だけだよ、黒天・・・

「じゃあ・・・行ってきます・・・」

両親は柩の言葉に気付かない。お袋達らしいっちゃあらしいし、これ
れで良いかな。

お姉さまからの招集を受け、私達は荊州を目指す事となった。思春や明命といった優秀な将がそろつ事。なぜ袁術は、その危険性に気付かないのかしら・・・。

「けど、その袁術が愚かなお陰で姉さま達と合流できるのだから、今はその愚かさに感謝しましょう」

「御意。いくら国の王と言えど、袁術はまだ子供。考えると言う事を知らぬでしょう」

その様な者に、呉の地を奪われているとは……。いえ、奪われたのならば取り返せばいい。その為に私達は苦渋をなめ、今日まで耐えてきたのだから。

「雪蓮様と合流するまで後二日程と行ったところでしょうか。それまでは「た、大変です!」「」

慌てた様子で駆け込んできたのは、明命だった。たしか斥候を任せていたはずだけど。

「これより先五里の場所に、賊と思われる集団。こちらに気づいて速度を上げているようです!」

「数は!?!」

「およそ5000!」

5000!?!? こちらの兵は500・・・いくら呉の兵と言えど、この兵力差は・・・。

「蓮華さま。兵100を率いて、あの山を目指して下さい。遠回りにはなりますが、雪蓮様の元へ辿り着けるでしょう」

「な!?!、思春と明命はどうするの!?!」

「我々は残った兵で足止めをかけます。・・・その間に蓮華様は山へ向かい、雪蓮様の元へ!」

いくら思春と明命でも、400の兵で足止めするのは不可能。・・・私の為に命を捨てると言ってるのだ、この二人は。

「蓮華様、私達は将で、蓮華様は王です。私達将は、王をお守りするの役目なのです」

「・・・蓮華様。どうか、王としてのご決断を」

二人とも、私の為に死ぬという命をまっけている。家族としてではなく、王としての命令として。ああ・・・二人は何て優しく、そして酷いのだろうか・・・。

「・・・分かった。甘寧、周泰、二人はここに残り賊の足止めをも、申し上げます!?!」!?!」

「どうした!?!」

私は命をかける瞬間、それを遮った兵の言葉で少なからず安堵していた。これで戦況を動かせるような事が出来れば・・・！

「後方より凄まじい速さでこちらに向かって来る者あり。数は・・・一人です！」

旅人か・・・それとも私の首を狙う者か。いずれにせよ、戦況を変え一石にはならなかった。

孫権 s i d e o u t

江夏の村を出発した次の日。普通なら馬を使っても、孫策のいる南陽までは三日から四日程かかる。しかし俺の愛馬、黒天はわずか一日で二日分の距離を走ってくれた。

「お前が居てくれて、本当に助かるよ」

「ブルル・・・」

休憩をはさみ、黒天の身体を休める。俺も少し休むかな・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「?どうした、黒天？」

不意に黒天が立ちあがり、一点を見つめている。どうかしたのだからかと思うと、黒天は俺も立つ様に促す。

「とつと……一体どうした。何か気になるのか？」

「ヒヒン！」

「分かったよ。お前が気になるなら、そこに向かってみる事にしよう」

こいつは中々勘のいい馬だ。何かあると言えば、何かあるのだろう。

黒天に跨りしばらくすると、土煙と赤い旗が見えてくる。ここからの距離は……

「大体5キロといったところか。視力MAXのチートは便利だねえ、マサイも吃驚だ」

しかしあの赤い旗、この辺で出てくる赤と言えば……！孫権か！！

「まずいねえ、双方の戦力差が有り過ぎる。このままじゃあ、蹂躪されるだけか」

そう呟くと、黒天が小さく鳴いた。あいあい、分かっていますよ。

「速度を上げる、黒天！ 賊共より早く、孫権達の元にたどりつけ！」

黒天は大きく鳴き、走る速度を更に速めた。これなら……

後方から来ている者が、ようやく視認できる距離まで来た。男の様だ……

「その者止まれ！　こちらにお前と戦う意思はない！　止まれ！」

……止まらない。むしろ更に速度を上げて我らに向かってくる。

「ど、どうしましょう、思春様？」

「くそっ！　明命、奴の足止めを頼めるか？」

「わ、分かりました！」

周泰 side

思春様に言われて、男の人の足止めに向かう。こちらが危険な時に向かってくるなんて……やはり袁術の刺客？　いや、考えるのは後だ。今はこの目の前にいる……目の前にいる？

「ちっといいかい？」

「……はうあー！」

び、吃驚しました。気が付いたら目の前にいたのです。

「あそこにいる黄色い奴等は、賊で良いんだよな？」

「え？ ええ、そうですね・・・」

「・・・・・・何で私は、こんな暢気に話してるのでしょうか？」

「君達は何をしようとしてるんだ？」

「・・・この戦力差では蓮華様を・・・孫権様をお守りする事は出来ません。ですから、孫権様が逃げれるまでの時間稼ぎを・・・」

「成程。君は良い子なんだな」ナデコナデコ

「ふ、ふえええ！？／＼／＼／＼」

い、いきなり頭を撫でられました。最後に撫でて貰ったのは、村を出る時にお母さんからだったかなあ。

「さて。時間を稼ぐのはいいが

別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう？」

「え？」

そう言うは男の人は、馬を走らせ、賊の元へと向かう。呉軍の間をすり抜けて、賊の元へと向かう。

(無茶です！ あの大军の中に突撃するなんて！！)

そして男の人と賊が接触した瞬間、賊達は吹き飛んだ

「……え？」

周泰 side out

甘寧 side

後方にいたと思っていた男が、私の隊をすりぬけて前を走っていく。

(まさか、明命がやられたのか！！?)

そう思い後ろを振り返ると、明命の部隊は被害も無くただ呆然としていた。

ドオオオンッ！！

賊達の方から大きな音が聞こえ、そちらを見てみると……賊が木の葉のように飛んでいた。

「な……んだ、アレは」

私は呉に使える前、錦帆賊という賊の頭をしていた。そこで私は、自然の脅威と対峙する事もあった。しかし、どんなに策を練ろうと、どんなに船を強くしようと、自然の前では何の意味も持たなかった。

(だが、これで賊の足並みは崩れた。このまま一気に・・・！)

「甘寧隊！周泰隊！この機を逃すな、たたみ掛ける！！」

そう言つて突撃を仕掛けようとする私の前に、一頭の巨大な黒い馬が立っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

馬は鳴きもせず、ただ立っていた。それは私達に、これ以上進むなと言つてるかのように。

「なんのつもりだお前。まさか、我々の邪魔をしようと言つのか？」

馬は低く鳴き、まるで肯定しているかのように。

「待つて、思春」

「れ、蓮華様！？」

なぜこのような場所に！？しかし蓮華様は私の心配をよそに、あの黒い馬の元に向かっていた。

「・・・・・・・・無茶をなされる」

「大丈夫よ思春。この子は賢い。きっと何か理由があるのよ」

そう言つて蓮華様は馬を撫でた。馬も気持ちよさそうに目を細めていたが、顔をあげ、男の方を向いた。

「あの男に理由があるの？」

蓮華様は考えている最中、後ろから戻ってきた明命が

「あの人、凄い大きな剣を持つてたのです」

大きな剣？ 確かに良く見てみると、奴は身の丈ほどもある巨大な剣を振り回していた。

（確かに。あのまま突撃していれば、奴に斬り殺されていたかもしれん。と言う訳か）

甘寧 side out

しばらくすると賊は散り散りとなって逃げ、柊はそれを追わず、黒天の元へ帰った。途中、孫権達に何て話すかを考えながら。

一騎駆け（後書き）

一日一つ投稿ならず・・・

てか体中が痛い・・・

さて、今回は柊の力の片鱗を表してみました。もう少し戦闘パートを入れるかは、明日の作者に任せましょう。

選択の無い選択肢（前書き）

お気に入り登録200件突破・・・総合評価500突破・・・だ
と？

寝込んでいる間に、随分ととんでもない事になっていました。

お気に入り登録して下さった皆さん、評価して下さいました皆さん。皆
さんのお力で、ダルマは今日も小説を書いていられます（泣）

この事に胡坐をかかぬよう、日々精進していきますので、これから
もどうぞよろしくお願いいたします^^

選択の無い選択肢

賊を蹴散らせた後、孫権ちゃん達は先を急ぐという事で俺を移動しながら尋問していた。

「それで、貴様の名は何というのだ」

「姓は李 名は通 字は文達」

俺を尋問しているのは孫権ちゃん本人。孫権ちゃんが俺の隣で、その左後ろに甘寧さん、右後ろに周泰の配置で俺を囲んでいる。ちなみに左側からは、冷気のすら感じる視線を。右側からは、なんかこう・・・憧れの様な視線が注がれている。

「では李通。貴様はここで何をしている？」

ここは素直に、南陽に向かうと言つべきかな・・・いや、変に警戒心を持たれてもしょうがない。ただでさえ、今の俺は不審者100%な訳だし。

「旅の途中だよ。黒天が気になるって言ってな。んで、来たらあんな事に」

なつてたから、手助けに入ったって訳だ」

「胡散臭いわね・・・」

「・・・・・・・・これどっちの選択肢選んでも、警戒心を持たれる才子じゃね？」

「あ、あの！」

遣る瀬無い気持ちになっていた時、後ろから聞こえてきたのは、太陽の様な明るい声。

「李通さんは、どうやってあの力を身に付けたのですか？」

「……明命。今は尋問中だ」

その隣りからは、冬の風のように鋭く冷たい声が聞こえてきた。まあ甘寧さん以外ないわな。

ギロツ！

(ひい！！)

「はぁ……まあいいわ。私も気になってた所だし」

「では、どのような修行を行ったのですか？」

「修行は殆どしてないよ。歳が10の頃、頭が杏仁豆腐で出来たお袋に、「旅に行つて来い」と言われてね。それから10年間、賊や猛獣と戦う毎日を送ってただけさ」

今思うとかなり無茶苦茶だったよな。何度か走馬灯も見たし。

「10で旅に出ると！？」

そう言つて驚いたのは、孫権ちゃんと甘寧さん。やっぱりこっちの

世界でも異常なんだな。周泰ちゃんは……ああ、呆気にとらわれるだけか。

「あ、あなた、よく無事だったわね……」

驚き過ぎて素に戻る孫権ちゃん。言った後気付いたようで、咳払いをして誤魔化していた。

「殆どが賊相手だったし、途中で黒天と会えてからは楽なもんだつたよ」

それから俺は、様々な旅の話を三人に聞かせた。村を賊から救った話、官軍が役に立ってなかった話、噂に聞いた武人、結成された義勇軍等色々と話した。

三人とも打ち解け……甘寧さんの態度が最初より軟化してくれたので、打ち解けたとみていい……よな？ そんな感じで俺は三人と共に、孫策のいる南陽に到着した。

「お姉さま!!」

あ……確かここで孫策は突撃かましたんだっけか。そりゃ怒りもするわな。いや、孫権ちゃんの事だから心配余って怒り100倍ってところか。

「あ！そ、そつだ蓮華。そこに見かけない男が居るけど、あれは誰なの？」

孫策の奴め・・・俺を使つて逃げやがったな・・・

「・・・・・・・・ハア。彼には我々が賊に襲われた所を助けて貰ったのです。李通、来てもらえるかしら？」

さてさて、一体何を聞かれる事やら。

周楡 side

蓮華様が連れてきた男。名を李通と言い、蓮華様達が賊に襲われた所を助けたらしいが・・・

「なによ蓮華。たった一人で賊を蹴散らしたのに、貴女達は手も足も出なかったの？」

そう。一人が出来る事等知れている。だが・・・何かおかしい。思春や明命も居たというのに、たかが賊如きに後れをとるとは思えないのだが・・・。

「それが・・・・ですね、姉さま」

「蓮華様、そこからは私が」

間に入ってきたのは思春。まあ蓮華様の護衛を任せられながら、手も足も出なかった理由を話すには、適任であろうな。

「いいわ思春。報告なさい」

「はつ。我らが南陽に向かう途中、数約5000の賊の集団を発見。対してこちらは500。向こうはこちらに気付き、私と明命が足止めをし、蓮華様をお助けする手はずでしたが、後方よりこの男が接近し、我らの間をすり抜け賊と接触。その後約4000の賊を無傷で駆逐し、賊は逃亡。その後、我らと合流いたしました」

「……さて、思春は今何と言った？」

「のお思春。お主の話だと、その李通が、一人で4000の賊を蹴散らし、蓮華様を助けた。この様に聞こえるのだが？」

「信じられないお気持はよくわかります。ですが、全て事実です、祭殿」

「4000の賊を無傷で屠るか……この先、お前が敵にならん事を祈るよ」

「それはそんな時の俺にならねえと分からねえな（笑）」

ああ。本当にならない事を祈るよ。

周榆 side out

「で。単刀直入に聞くけど、貴方私達の所に来ない？」

まあこつくるよなあ。一人で4000人分の兵に値する。しかもそれが、少なく見積もってだ。

「魅力的な提案だが、今回は遠慮させてもらおうかね」

「あら、どうして？」

「!? なーるほど。こりゃ英雄と呼ばれる訳だ。声のトーンも変わって無いのに、心の奥底まで覗かれてる様な感覚だ。しかしこの感覚、どこかで感じた気が・・・そうか、お袋様だ。」

「今俺は旅の最中なんですね。もうちつとこの大陸を見て回りたいのさ」

「貴方・・・貴様は、10年間旅をしていたのではなかったのか？」

「孫権ちゃん。俺が旅した10年間と、今ではだいぶ情勢が変わってきてるのさ。前は賊も、50・・・多くて200が限度だった。それが今では、5000の束になって襲って来やがる。もしこれで統率力を持ってみる。今まであしらってきた賊が、軍になるんだぞ？」

「そんな事になれば官軍は元からだが、諸国の軍でも手に負えなくなる可能性が出てくるって事だ。」

「良く分かった。だが、我が名は孫仲謀。旅人風情に、ちゃん付けで呼ばれるいわれは無い!」

「ちゃん付けで十分だよ。そんな必死に背伸びをしている、途中でどもつたりする、お嬢ちゃんにはね」

「わ、私のどこが背伸びをしていると言うのだ!」

「強いて言うなら……孫策のようになるとしてはいる所かね」

「!？」

おゝおゝ驚いてる驚いてる。孫権ちゃん自身としては、隠してきたかったんだろうねえ。まさか自分が、姉にコンプレックスを抱えているなんて、知られたくないだろうからな。

「なあ孫権ちゃん。ハッキリと言わせてもらおうが、君は孫策にはなれん」

俺の言葉を聞いて、少し泣きそうになる孫権ちゃん。そしてその後ろからは甘寧さんが、俺を射殺さんとはかりに視線をぶつけてくる。やめて！李通のライフはもう0よ！！

「それは……私が姉さまに劣ると言いたいのか」

泣きそうなのをグツと堪え、怒気を含んだ声で話しかけてくる。しかし、なんでそういう考えしか出来んのかなあ、この子は。

「そういう意味じゃないさ。孫策と孫権ちゃんは違う。違うんだったら、孫策とは別の方法で国を盛り上げていけばいい」

「だが……かあ様や姉さまの様に、上手くやってける自信が……私には無い」

なるほど。先代たちが優秀すぎるせいで、自分を低く見てる訳か。

「自信が無いのは経験が足りないからだ。これからは、孫策のそば

で……いや、周楡の傍でその仕事ぶりを学んでいけばいいさ」

「ちょっとちょっと、なんで私じゃなくて冥琳なのよ！」

「それは簡単。孫策は、見るからに仕事をしなさそうだからだ！」

「当たっていい（る）（ますね）」

声を八モらせたのは周楡と陸遜の二人。この二人は原作でも、苦勞人だったからなあ。

「んで、たまに孫策のやり方を学べばいい。ま、敵に突撃するなんて事は、学ばんでいいけどな」

「そう……そうね。私は私の方法で呉を発展させていけない。ありがとう李通。貴方のお陰で、何だか方が軽くなった気がするわ」

「そいつは良かった。頑張れよ、孫権ちゃん」ワシヤワシヤ

「あん！もう、子供扱いしないで！」

見た目20歳ですけど、精神年齢はとうにオッサンだからな俺。

「これで次会った時背伸びしてたら、また撫でてやるからな？」

「……………背伸びしようかしら（ボソリ）」

ん？何て言ったんだ。聞こえなかったんだが。

「んふふ」。聞こえたわよ（蓮華）」

「きゃ！ちよつと姉さま!？」

「頑張りなさいよ。呉の女は、どこまでも一途でしつこいのが基本だから」

「なんの話ですか、なんの!」

なんか二人の世界に入っちゃったぽい。仕方ない、俺は周泰ちゃんを弄って遊ぶとしよう。

「はうあ!り、李通様。なんで私は撫でられてるのでしょうか!？」

「そういう運命だったからだよ」ヒョイ

「た、高いです!李通様!」

「ほーれ、高いたかーい」グルグル

「あうあう／＼／＼／」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あ、甘寧さんも混ぜられます?」

「・・・・・・・・混ぜって欲しいのか?」

ふむ。このどちらにでも取れる質問。この選択肢の正解は!

「ええ、どうぞ」

「……………（ツカツカツカ）」

そして、さあ撫でてみると言わんばかりに、頭を突き出してくる甘寧さん。ふっ、そんな事をやられて……………撫でる俺では無いわあ！！！！

ダキッ

抱きしめてみました

「な！」カアッ

一瞬で顔が真っ赤になる甘寧さん。あゝめんこいのお……………

「ちょ、調子に乗るなあ！！！！」「ドスっ！！！！」

強烈な一発ありがとっございます……………。その向こうでは陸遜と黄蓋さんが笑っていた。うん、流石にやり過ぎましたね。

選択の無い選択肢（後書き）

更新が遅れてしまい申し訳ありません。

体調を崩してしまい、頭痛と腹痛が治まりません。

こんな時だからこそ分かる、健康のありがたみですよね。

寝たら治ってくれかな・・・では、ノシ

一トラブル去って、また一トラブル（前書き）

なんとか身体も動ける様にまで回復いたしました。

一体何があつたんだ、俺の肉体？ 俺は春蘭と同じだと思つてたのに・・・

あれ、春蘭さん？ 貴方の出番はまだですよ？ な、なんで七星餓狼を
持つてるんです！？ ちよっ、まっ、やめ・・・アーーーーーー
！！！！

「トラブル去って、またトラブル

「あ、あやうく胃の中をリバーズするところだった……」

「りばあす？」

「すまん、こっちの話」

甘寧さんに鳩尾を殴られ、悶絶しながら転げ回った後から何とか回復した俺。結構身体も鍛えてたんだけどなあ。

「それで？私達と共に来ないって事は、また旅に出るんでしょ。今度はどこに行くつもり？」

「そうさなあ……それがまだ決まっとらんのだよ」

「ほ。まさかお主、行き先も無いのに旅をしていたのか？」

そう言われるとそうだな。10年前だって、ただ色々な所をふらふらしてただけだし。ふむむ……

「あ、そうだ」

「どこ行くか決めたの？」

いや、何で孫策がそんなに食いついて来るんだよ。それに……どこに行くかは俺にも分からんからなあ、これ。

「そんな所だ。んじゃ、ちっと離れててくれ」

俺がそう言っていると、皆は不思議そうな顔をしながら離れていく。うん、もう大丈夫かな。

「さてさて、どこを向くのかな・・・」パツ

スツ・・・ガラァン!!

俺は竜殺しを垂直に立てた後、手を離し、そのまま重力に任せた。俺のとった方法とは、某猫型ロボットの尋ね人ステッキの要領だ。あれと違って、尋ね人を探してはくれないが。

「まさか・・・その剣の柄が向いた方向に行く・・・なんて事は無いわよね?」

少し呆れた声でそう言ってくる孫権ちゃん。いえ、実はその通りで御座います。

「なんて事有ったりしちゃうんだな、これが」

「雪蓮といい勝負をしそうだな、お前は」

「ちょっと冥琳、それってどういう意味よ?」

「ふ。その言葉の通りさ」

「そついや皆はこれからどうするんだ?」

と聞いてみたけど、確かこの後は黄巾党の砦を攻めるんだっけか。

「近くに黄巾党の砦があるから、そこを攻めに行くわ。後は・・・まあ袁術ちゃん次第ね。私達は一応客将って形だし」

「歯痒い事この上ないのお」

「りょーかい。んじゃ、二つ程助言を。一つ目が、この乱が終わると、これより大きな戦が始まる。独立するならその後を狙った方がよい。二つ目、利用できる物は利用した方がよい。例えそれが、自分達が苦渋を嘗めさせられる事になった相手でもな」

「・・・袁術にそこまでの利用価値は無いと思うが？」

「まああつちはまだ子供だしな。俺が言ってるのは、張勳の方さ」

「そこまで言い切れる根拠は？」

根拠ねえ・・・原作知識です！何て言える筈もないし・・・

「ん〜〜。何となくだ。じゃ、俺は行かせてもらおうよ！」

「あ、待ちなさい！まだ聞きたい事が「次会った時な」・・・」

そう言っつて柘は、孫策達の元からいささか強引に出発した。

「ま、まあ気にしても仕方が無い！ 今は向いた方向に全力で走るだけさ！」

「ブルル」

「うん。大体感覚で分かるよ。走ってるんのお前じゃねえよって言うてんだろ、黒天？」

コクリ

「気分的なもんだよ。確かに走ってるのはお前だけだよ」

以前旅をした時も、こんな感じで会話？しながらだったから、そこまで寂しさを感じず続けていく事が出来たんだよなあ……つてあれ？

「前の方……誰か追われてる？ 追ってるのは賊……じゃないな。官軍だ」

前の二騎を追う形で、その後ろから20騎程が追い掛けていた。

「官軍が追い掛けてるって事は……前が賊か？ 違うな、一頭に二人が乗ってる。賊がそんな事する訳が無い」

しかし、前の内の一頭と官軍の差が徐々に縮まっていき、このままでは捕まってしまうのが目に見えていた。

「何でこう行く先々でトラブルが起こるのかねえ……。だからと言って、見過ごせる筈もないけどな！」

そして柊は、黒天の速度を速め、前の二騎を助けるべく行動を開始した。

一トラブル去って、また一トラブル（後書き）

ふと気になって、ランキングを見てみたのですが、週間と日間の方にこの小説がありました！！

見つけた時は、おおー！！と声に出して驚いていました。

そんな事も励みにしつつ、読者の皆様楽しんで頂ける小説をこれからも作っていくと思います^^

李通（無職） 仕事を見つける

??? side

「ハア・・・ハアツ・・・！」

体中が痛い。何でもつと乗馬の練習をしていなかったと、今になって後悔している。でもそんな後悔も、今は役に立たない。今一番大切な事は、後ろの追手を振り切って逃げきる事。

「詠！ もつと早く走れんか！？」

「む、無茶言わないでよ！！！」

月を抱えながら走る霞は、僕の先にいる。いつもの霞なら、あんな奴らとづくに振り切っているだろう。それが出来ないのは、僕の所為・・・。僕が二人の足を引っ張っている。

「ちいつ！月っちがいなけりゃ、あいつらぶった切ってやれんやけどなあ」

「す、すみません・・・」

「月っちの所為やあらへんよ」

もしここで僕が捕まれば、また同じ事の繰り返しになる。でも、このままじゃ・・・！！

「詠ちゃん！ 霞さん！！ あ、あれ！」

「「！！？」」

月が指差した方を向くと、遠目からでも分かる、巨大な黒い馬に乗った男が向かって来ていた。

「お困りかい？」

「な、なんやアンタ！？」

「いやねえ、向こうの方であんた達を見つけて、賊なら放っておこ
うかなあつて思ってたんだけど、何か訳有リッぽそうだったから、
とりあえず来てみた」

そう男は言った。信用していいのか、正直分らない。でも、コイ
ツは何か・・・その・・・大丈夫だって思える。何でだろう・・・？

「詠、どうするんや？」

「・・・霞に任せるわ」

そして僕は、判断を霞に任せた。そして僕は、この時の自分を褒め
t・・・叱ってやりたい。

「うしっ！じゃあ兄ちゃん。後ろのあの眼鏡っ子を、兄ちゃんの馬
に乗せてくれ」

「りょーかい！」

男は僕の隣に来て、手綱を離し、僕の身体を持ち上げ自分の後ろに乗せた。あ……背中おつきい……。

「おし。じゃあ嬢ちゃん、しっかり捕まってるよ?」

「え、ええ……」

「そんじゃあ……一気に飛ばすでえ!!」

そう言っただけは、いつもの速さで走り始めた。ああもう!そんなに早くちやこつちが追いつけないじゃない!

「んじゃこつちも飛ばすとしますか。行け、黒天!!」

グンツ

「きゃあ!!」

いきなりの急加速。こ、これはホントにちゃんと捕まってる……身体、結構ガツチリしてる。何だか……すごい安心できる。……って!!

「何を考えてるの、僕は……!!」

「え!?!、どうした?」

「なんでもないわよ!こつち見んな!」

うう……鏡見なくても分かる。僕の顔、絶対赤くなってるよ……。

しばらく走ると官軍の姿は見えなくなり、振り切れた事が分かる。神速の張遼と黒天がいつもの速さで走れば、造作もない事ではあるが。

「ここまで来れば安心だろ。全員無事かい？」

「うちは平気や。月っちも無事やしな……ちと目え回しとるけど」

「……へう」

二人はそう言って馬から降りる。そろそろ疲れも溜まってるだろうし、ここらで休憩とするか。

「んじゃこの辺で一休みとしよう。嬢ちゃん、もう大丈夫だぞ」

俺がそう言うまで賈馭は、ずっと俺の腰に手を回したままだった。

「わ、分かってるわよ……」

俺の腰から手を離すが、一向に降りてくる気配が無い。そしてそんな賈馭を心配したのか、董卓が近づく。

「詠ちゃん、どうしたの？」

「な、何でも無いのよ、月？」

そう言うも、降りようはしない賈馱。張遼は何かに気づき、ニヤニヤ笑いながら

「なんや詠、足に力が入らんのか」

「うっさい!!」

なるほど。馬に乗った事はあるだろうが、あの距離を早い馬で走ったんだ。そりゃあ足も疲れるわ。

「じゃあねえな・・・ほっ!」ヒョイ

「なあ!? お、降ろしなさい!この馬鹿!!」ジタバタジタバタ

「降ろしてんだろ。あと暴れんな、下着見えるぞ?」

「死ねえ! この変態男!!」ドゴツ!

ナイス膝蹴り・・・変態男で。

「痛えな。しかし、その歳で黒とはマセてるねえ」

「本気で死ねえ!!!!」ガスッ!!

「いつてえーーーーー!!!!!!!!」

賈馱の蹴りが、俺の脛を直撃する。いくら身体を鍛えても、こっぴつ弱点は鍛えきれんよなあ。

「え、詠ちゃん！ す、すみません。大丈夫ですか？」

「あー平気平気、李通は今日も元気です」

嘘です。滅茶苦茶痛いです。それでも、やせ我慢は男の特権と言う事で、何でも無いような顔をしておく。ここに誰も居なかったら、転げ回りたいけどな！

「ふん！ いいのよ月。そんな変態の事なんて」

「せやかて、その兄ちゃんが来てくれへんかったら、確実に捕まっとつたろっね」

「わ、分かってるわよ……。んん！ 助けてくれてありがと。僕は賈馱。董卓軍で軍師をしてるわ」

「うちは張遼。董卓軍の武将をしておって、世間では神速なんて呼ばれとる。んでこの子が……」

「今日は助けて頂き、有難う御座いました。私は董仲穎、董卓と呼んで下さい」

この子が、あの反董卓連合を組まれる切っ掛けとなった子か。確かに、暴政なんて出来そうな性格はしてそうにないな。今の少しの間でも、常に他人を気遣うような子の様だし。

「俺は李通。今は旅の途中でね、色んなところを放浪してるんだ」

さて、自己紹介も終わった事ですし……

「それじゃああつしはこれにガシィッt・・・ナゼニツカマエルンデイス、チヨウリヨウサン？」

「まあまあ、そんな焦らんでもええやんか　そつちかて、色々と聞きたい事有るんやろ？」

「いえ、特にh「あるんやろ？」・・・はい、あります」

畜生、またこれだ！選択肢がYES or はい　しかない！こんなもん選択肢じゃねえ！

「はぁ・・・。では、何でお三方は軍、しかも官軍に追われていたんですか？」

董卓軍は他の諸侯達と同じ様に、独自で黄巾賊を相手にしていると思ってたんだが。

「・・・僕らは月を人質に取られ、十常侍の手足の様に動かされてたのよ！」

賈馱の話ではこうだ。以前帝に謁見しに都へ行った時、董卓達は宴をもって歓迎されたいらしい。その次の日、董卓だけが別の場所で寝かされ、どうしたのかと問いただした所、

「董卓殿は、非常に重い病にかかっているらしい。今はまだそこまでも無いが、この様な時に倒れてはそちらも困るであろう？　そこで、帝がわざわざ宮廷医を遣わし、その治療にあたっているそうじゃ」

その時賈馱は、はめられた事に気付いたのだ。董卓軍は他の諸侯に比べ、兵数も多く、呂布や張遼と言った名立たる武将もそろっている。そこで十常侍は、自分達の身を守るため董卓を軟禁し、董卓軍を意のままに動かそうと思いついたのだ。

「うちらも初めは、あの手この手で月を助け出そうとしたんやけどな、あいつら決まって、「帝のお慈悲を無下にするつもりか?」って言うてくるんよ。もし背いたりしたら、うちらは不忠者として扱われる。そないな事になったら、軍はもうおしまいや」

「それで、だったら力づくで奪ってしまおう・・・という形になった訳か」

「運よくあいつら、他の奴には月の事話して無くてね。たとえ誘拐されたとしても、どこの誰が。何て事は言えないのよ。言ったら他の豚達への弱みになるんだからね」

何ともまあ無茶をする。でも、その位しないと助け出せなかったのも事実。そして、そんな事をするほど、上が腐ってるのも事実。

「そ〜れ〜で〜、李通はこれからどうするん?」

いつもならまた旅に出る、と言う所なんだけど、後残ってるのは魏の一つ。けど、あいつらに会うのはもう少し後にしたいかな。お楽しみは最後に・・・ってね。

「どうしようかねえ・・・いい加減どこかに仕官でもしようかね?」

「言っとくけど、うちは無能な奴を入れるほど、甘くは無いわよ?」

「せやったら、後でうちと手合わせしようや！ そないなごっつい
剣持つてるくらいやし、腕には自信あんのやろ？」

董卓軍……このまま行けば連合を組まれて、滅んでいくだけな
んだが……

「それなりにはね。 そんじゃ、御厄介になれる様に、頑張るとし
ますか！」

だからと言って、NOと言えるつまらない人間になつた覚えは無い。
折角の二度目の人生だし、もっと楽しく賑やかに生きていきましょ
うかね！

李通（無職） 仕事を見つける（後書き）

そんな訳で意外な事に董卓軍に付かせてみました！！
え？季衣と流琉はいつ出てくるんだって？

……作者も早く三人の絡みを書きたいです……砂糖と蜂
蜜とメーブルをトッピングしたパフェの様な話を書きたいです……

そんな話を書けるまで、どうかご辛抱下さい！！

李通VS張遼（前書き）

いよいよ張遼との戦いです。

そしてようやく双剣の出番です。ぶっちやけ、竜殺し一つあれば十分じゃね？と思っていたのは内緒です！！

李通VS張遼

董卓軍に参加する事を決めた李通は、董卓達と共に軍が駐留する涼州に、無事入る事が出来た。途中で賊に襲われる事もあったが、そこは張遼と李通と言ったところで、賊の両脇を走り抜けたり、進路を変えて逃げ切ったりと、戦略的撤退を繰り返していた。

「へへ。他と比べると、かなり賑わってるんじゃないか？」

旅先で訪れた街や南陽も、ここまでは賑わってはいなかっただろう。街には、子供の遊び声が響き、商人の威勢のいい声が飛び交っていた。

「周辺の賊を集中的に討伐して、月が善政をしいているって噂を流しただけよ」

ふんっ！と鼻息を鳴らす賈馱。その様子を隣で笑いながら見つめている董卓が、

「あんな事言ってますけど、詠ちゃん、いつも遅くまで起きて、あーでも無いこーでも無いって、改善案を考えてくれてるんですよ」

「な、ちよ、月!？」

「やっぱりな。そんな事をしただけで人が集まるなら、他の街も賑わってるだろうさ」

自分の努力を隠しながらも、主君の為に尽くす。そんな健気な姿を

董卓と張遼は知っているし、だからこそ、信頼もしているのだと言えよう。

「お前は優しい軍師だね、賈馱」

「お前は、人の頭を気安く撫でるなあ!!」

と言いつつも、撫でてている手を振り払おうとはしない賈馱。恥ずかしいからなのか、怒っているのからなのかは分からないが、顔を赤くして、抗議している。

「なあなあ〜。そこでじゃれあつとるのもええけど、何時になつたらうちと戦ってくれるん？」

「ああ・・・すっかり忘れてた」「誰がじゃれあつてるか!!」

ここまで来た理由は、董卓、張遼、賈馱の三人だけでなく呂布と陳宮、華雄にも、判断を下して貰う為である。

「恋もねねも、多分城にいると思うから、そっちに向かいますよ」

「詠ちゃん、華雄さんはどうしたの？」

「あいつは近くに賊がいないか、威力偵察に出てるわ」

そついやいたな、華雄。？水関で関羽に討ちとられたけど・・・どうにかして、助けてあげたいねえ。

「月殿~~~~!!御無事で何よりですぞ~~~~!!」

城に着くなり出迎えてくれたのは、賈馱よりも一回りか二周り程小さい陳宮だった。その後ろからは、子犬の様な眼をした赤髪の女の子、呂布。トテトテと歩き、陳宮と董卓を二人纏めて抱きしめてた。

「へう……」「く、苦しいですぞ、恋殿~~~~」

「月……お帰り」

ふと、呂布は警戒もしなければ、敵意も無い眼で李通を見る。強いて言うなれば、その眼に映っていたのは好奇心であった。

「……誰？」

「李通だ。董卓軍に雇って貰えるかどうか、張遼と手合わせして、決めて貰いに来た。お嬢ちゃんは？」

呂布はじつ……と李通の顔を見る。そして口を開けたかと思うと

「……恋」

「いや、それは真名だろうっ？」

「……呂布。恋」

「……真名を呼んでいい。と言う事かい？」

「……」

それに一番驚いたのは陳宮。すぐさま呂布に抱きつき、

「れ、恋殿~~~~、はやまってはなりませんぞ~~~~!!」

「……………李通、良い人」

「し、しかし恋殿~~~~……………」

「呂布ちゃんが真名を預けてくれるなら、俺も預けなくちゃな。俺の真名は柊だ。よろしくな、恋ちゃん」

俺が恋ちゃんの真名を呼んだ瞬間、陳宮は涙目で俺を睨んでき。え、これって俺が悪いの？

「たとえ恋殿が貴様を認めても、ねねは認めないのですぞ!!」

「……………ねね、め」トスン

恋ちゃんは陳宮に、拳骨とも言えない拳骨の様なものをし、陳宮を叱った。

「アハハハ　　なんやもう恋に懐かれたんか？」

「懐いたって、そんな犬猫じゃないんだから……………」

「同じよ。恋は天性の勘で、信じられるかどうか分かるみたいだし」

「うちも、李通には真名を預けてええて思ってるんやけど、うちは武人や。頭では分かっても、身体の方が納得しないと、預けたくないんや」

「要約すると、とつとと手合わせしよつぜ。って事か?」

「そう言う事や」

張遼 side

ようやっと・・・ようやっと手合わせできる!!李通を見た時から
ピーンと来てたんや。こいつは強いってなあ・・・。

「では、相手の気絶、戦闘不能、降伏で決着とするのです。両者と
も、それでいいですね?」

「構わんよ」「りょーかい」

李通の獲物は双剣。流石にあの馬鹿でつかい剣は、基本多対一の時
様の物らしい。せやけど、あの双剣もかなりの業物みたいやなあ・・・。

「では・・・始めなのです!」

「オツシャアアアア!」

開始早々、うちは一直線に駆けだした!一気に距離を詰めて、一撃
食らわしたる!!

ガキキイン!!

「!?!?」

そんな事思つとつたら、いきなり一撃きおつた。李通がうちより早く距離を詰めて、双剣で攻撃してきおつた。片手持ちやから、一撃一撃は軽いとふんどつた。せやけど!!

(なんやこれ。一撃一撃が・・・とんでもなく重い!!)

ガガガガガガガガガガッ!!!!!!!!

そんな事を思っている間も、李通の連撃は止まらない。張遼に打ちこんだ剣撃は、今や30を超える。双剣特有の手数に合わせ、一撃が両手持ちの大剣と同等なのだ。これには張遼もたまつたものではない。

「チィ!せやあ!」

強引に李通を引き剥がし、間合いを取る。一見ずっと防御にまわっていた張遼が有利に思えるが、実はその逆。張遼は重い連撃を受け続けた事で、体力は削られ、手の痺れはまだ取れないでいた。

(でも、こんな馬鹿げた攻撃続けとつたんや。李通の疲労だって、かなりのもんに・・・)

そう思つて、うちは偃月刀を構え直す。そしたら・・・

「なあ!？」

あいつはまた距離を詰めとつた。そして、さっきのは本気じゃないつて言わんばかりに、さっきよりも速い連撃をかましてきおつた。

李通VS張遼（後書き）

さてこんな戦闘シーンからも分かりますように、作者は戦闘を表現するのが、大の苦手なようです！！

もうちょっと他の作者様の作品を見て勉強する事にします・・・○

r z

さて、次回では李通が文官として活躍する！？的な話にしたいと思います。

ではノシ

通常の四倍

「驚いたわ……。まさか霞が、手も足も出ないなんて」

賈馱の知っている張遼とは、呂布程ではないが、それでもかなりの力を持つ武人である。更に呂布と違って、相手を自分のペースに引き込み、自分に有利な戦い方をする。それが張遼という武人だ。

「うう……。悔しいなあ……。なあ、自分、なんでそこまで強くなれたん？」

「そうだな……。小さい頃からよく運動して、よく食べた事（よく戦い、生きる為に貪り食べた）からかな」

そんな事を話していると、おもむろに恋ちゃんが立ち上がり、方天画戟を手に取った。

「……………恋も」

「はい？」

「……………ずるい」

恋ちゃんが言うには、張遼と手合わせしたのに、自分とはしてくれないのか？と言つ事らしい。

「悪いけど恋、そいつにはまだやって貰う事があるから、手合わせはその後でお願い」

賈馱にそう言われ、恋ちゃんしばらく考える様なそぶりを見せた後、

「……………（コクリ）」

しびしび……といった様に、首を縦に振った。

「よし。じゃああなたはこっちに来て」

そんな事を言われ、部屋の中に入った俺。そんな俺の眼前には、俺の背と同じ位の高さの書簡の山が積まれていた。その数、四。

「……………何ぞコレ？」

「見ての通り、書簡の山なのです。霞と詠が、月殿をお助けに行っている間、溜まりに溜まったのがそれなのです」

呆気にとられている俺の隣では、賈馱が深いため息をついていた。確かにこの量を見れば、ため息もつきたくなるわな。

「はぁ……。次は、アンタが文官として使えるかどうか試験させてもらうわ。試験内容は……言わなくても分かるわよね？」

「この山を無くしつつ、俺の仕事ぶりを見る、か？」

「そう言う事なのです。さぁ！ため息をついても書簡は無くならないのです！ちゃっっちゃと片付けるのです！」

そういやこういった仕事は、初めてだったな俺。どうやればいいんだ？

「とりあえず、アンタはそっちの書簡を片付けて。内容に目を通して、自分の名前を書いたり、事案への対処法とかを書いてくれればいいから」

「……………りょくか〜い」

地味に肉体と精神的にくるな、コレ。ああそうだ、手を二つ使えばいいんだよ。

「なあ賈馱。筆もう一本貰っていいか？」

「筆なら有るじゃない。まあ良いわ……………はい」

「サンクス……………どうも」

賈馱から筆を貰った李通は、書簡を二枚広げ、左手で左の書簡を、右手で右の書簡を片付け始めた。そして、書き終えた書簡を器用に丸めると、次の書簡に手を伸ばした。

「……………なにやってるの、アンタ？」

「何って……………仕事？」

「なんで両手で違う事をしながら、仕事が出来ているのかと聞いて

いるのです！しかも・・・見当違いな事を書いている訳でもないですし・・・」

「ほら、俺双剣使ってるだろ？あれのお陰で並列思考と、異種動作が出来るようになってたんだよ」

双剣を使っていて大切なのは、両手を同じ様に動かさない事だ。同じ様に動かすと、それだけで相手に隙を与える事になってしまう。故に、右手左手で違う動きをさせて、相手を攪乱、出来た隙を突く。それが双剣の基本的な戦いかたとなる。そして今回李通が張遼にやったのは、双剣のもう一つの利点である手数と、腕力による力押し。

「んじゃ、とつとと片付けますか」

昼過ぎから始めた仕事だが、太陽が落ちる頃にはその書簡の山が、今ではもう数える位の数しか残っていない。ここまで早く終わったのは、言うまでも無く李通の存在が大きい。両手を動かせるだけでなく、生前の未来の知識と、半年間寝ずに溜めこんだ本の知識のお陰で、李通は常人の四倍の速度で仕事を片付けていった。

「李通さん、お疲れ様でした」

今俺が居るのは、玉座の間。ここで俺の合否判定が下される訳だが、

「こつちからは何の問題もあらへんよ。隊長として動けるかは・・・まあまた今度として、手を合わせた武人としては、信頼できる男やと思っ」

「僕達の方からも問題無し。むしろ今すぐにも働いてほしい位よ」

「と、言う事は・・・?」

「・・・私の真名は月と言います。これからよろしくお願いします、李通さん」

「僕の真名は詠。アンタにはその・・・色々期待してるから、頑張んなさいよ!」

「ねねは音々音と言うのです。月殿と恋殿の為、その身を粉にして働くがいいのです!」

「うちの真名は霞。ホントやったらこっちに来るまでに預けときたかったんやけど、約一名が皆で一緒に交換するって聞かなくてなあ・・・」

約一名?こっちに来る時って言う事だから、月ちゃんか詠のどっちかなんだけど・・・

「ちょっと霞!僕がいつそんな事言ったのよ!」

「うちは約一名って言うただけや」

「なあ!?!?」

自分で墓穴を掘った詠。みるみるうちに顔が赤くなっていき・・・

「こっち見んな馬鹿あ!」

俺の顔に硯がクリーンヒットした。あれですか、ツン期ですか？素直になれないお年頃なんですか！？

「ただのテレ隠しなのです」

「ですよー」。

「さて・・・俺の真名は柊と言う。右も左も分からぬ者だが、よろしく頼む」

俺は顔に硯をめり込ませたまま、真名の交換を終える。

通常の四倍（後書き）

中々話が進まない・・・黄巾党編はもうそろそろ終わりにしようか
と思っております。

しかし・・・最近暑いですねえ・・・。皆さんは体調崩していませ
んか？身体には気をつけて、生活しましょう。

ではノシ

平和な董卓軍

「隊長！西地区の見回り、終了しました！」

「おう、御苦労さま。んじゃ隊舎に戻って、報告書を提出してくれ」

「はっ！」

俺は今、街の警邏隊の隊長をしている。初めから部隊を任せる訳にはいかないので、警邏隊を率いて経験を積み、との事だ。まあ・・・

「引ったくりだー！」

「どけおらあ！」

「そつちに行つたぞ！」

「任せる！・・・しゃあ！！」

警邏隊の皆がそこそこ強いお陰で、俺のする仕事が無いのが現状。楽だからいいんだけど・・・。あ、警邏隊が強い理由ってのは、恋ちゃんや霞の部隊に扱かれてるかららしい。

「隊長、こいつどうしましょう？」

「とりあえず牢屋に入れて、反省したら・・・何か仕事でも紹介し

「やれ」

「仕事を……ですか？」

「そ。盗みや強盗をする奴は、総じて金が無い。金が無いのは仕事が無いから。だったら仕事をくれてやれば、再犯をする事だつて無いだろうさ」

「了解しました。では！」

さて、そんなじゃ俺も見回りを続けるとしますか。ああそつだ、一度区画の整理でもしてみようかな。後で詠とねねに、案を纏めて提出して……

「あ、あの！」

「ん？ どうした嬢ちゃん。迷子かい？」

「ち、違いましゅ！ ふぁ……。え、えつと……。さ、先程のお考えですが、罪を犯す人というのは、何をしても犯すと思うのですが……？」

「根っからの悪人つてのはいるだろうな。でも、罪人皆死刑！ つてのは俺の性分じゃないんでね。だから一度機会を与えて、やり直す機会をあげるのさ」

このお嬢ちゃんの言う事は尤もだ。罪を犯した奴を許す。聞こえはいいけど、それにはデメリットの方が多い。許した奴がまた罪を犯したら、人を殺したら、そんな事の方がはるかに大きい。

「流石に人を殺した奴も許す、何て事はしない。けど、罪の意識がある人だったら、更生の道もあると思うんだよ。そこはどう思う、嬢ちゃん？」

そして目の前の女の子は口元に手を当て、しばらく考えていた。そして、答えが出たのか口を開いた。

「ですがそれでは、犯罪を犯しても許される。という考えが広まってしまうのでは？」

「そこはほら、俺達警邏隊が頑張ればいい訳よ。バシバシ取り締まって治安を良くすれば、犯罪を起こしにくい街って印象が出来るからな。ところで……」

「？」

「結局の所、嬢ちゃんはどうしたんだい？迷子でも無いんだろ？」

女の子は少し固まった後、顔を青くして泣きだした。……
……泣きだした！！？」

「ちょ！まってまって！！ どうしてそこで泣く！？ 俺か。俺のせいなのか！？」

「わ、わたし……えぐつ。朱里ちゃんと……雛里ちゃんと……グス……い、一緒の荷台に隠れたのに……気づいたら二人とも居なくて……寂しくて、怖くて……ふええええん！！」

え、何この子。密行したの？見た目によらず、超アクティブなんですけど。

「あゝ、よしよし、分かったからもう泣くな。可愛い顔が台無しだぞ?」

両膝をついて、女の子を安心させる為に抱きしめる。ついでに、背中もさすってあげると、いくらか落ち着いたのか、泣くのは終わったようだ。その奥さん、そんな温かい目で見んで下さい。

「ふぁ……／＼／」

「落ち着いたか?」

「は、はい。ありがとございませゆ。そ、それで、一つ聞きたい事があるのですが……ここは一体どこなのでしょう?」

「ここは涼州の月……董卓が治める街だよ。あ、俺は李通。董卓軍で文武官をしてる。」

「わ、わたしは姓は徐 名は庶 字は元直と言います!」

「……あ、あるえ〜? な、何故こげな所に徐庶がいるねん。」

「じゃ、じゃあ徐庶ちゃん。君はこれからどうするんだ?」

「朱里ちゃんと雛里ちゃんに会いたいですけど……董卓様は民に對して、とても優しい方だと聞いています。私がここに来れたのも天命。ご迷惑でなければ、わ、私を軍の末席に加えて頂けないでしょうか!」

途中までハキハキと言っていたのに、最後で噤んでしまった徐庶。

それに気付き、また顔を赤くして、かぶっている帽子で顔を隠してしまった。

「仕官の時期は過ぎてるんだが・・・まあ何とかなるだろ。じゃ行こっか、徐庶ちゃん？」

「ふわわ・・・よ、よろしくお願いしまっ！ふぁ・・・」

「で、誘拐してきた言う訳ですか」

「お前は一体何を聞いていたんだ？」

徐庶ちゃんを二人に紹介した後、速攻で出てきたのが今のねねの言葉だった。

「まあ、今の私達は圧倒的な人材不足だから、来てくれるのは助かるけど・・・」

「心配すんな詠。この子はきつと役に立ってくれるよ」

「なんでこう見境なく連れてくるのよ・・・(ボソリ)」

詠が何か言ったようだが、声が小さいせいで良く聞こえなかった。

「そういえば、今華雄が帰ってきてるのです。一応お前の事は話してありますが、後で会っておくといいのです」

「ん。了解。じゃ徐庶ちゃん、頑張つてな」

「は、はひー!」

「でやあああああ!」「はあああああ!」「……
・モグモグ」

庭に出てみると、霞と華雄が手合わせ中だった。恋ちゃんは……肉まんをパクついていた。ああ……癒されるのお。

「?……ひーらぎ」

恋ちゃんは俺に気付くと、肉まんの入った袋を持ったまま近づいてきた。多分、犬の尻尾と耳があれば大層似合うんだろうな、今の恋ちゃん。

「や、恋ちゃん」ナデリナデリ

「くくくく」

頭を撫でてあげると、眼を細めて喜んでくれた。止める理由も無いので、そのまま撫でてあげる事にした。

「そらあ!」「なっ!?!」

そんな事をやってると、二人の試合が終わったらしい。結果は張遼の勝ち。武器を飛ばされた華雄は、悔しそうにしていた。

「にやはは まだまだ甘いでえ、華雄？」

「ふん！李通とか言う男に、手も足も出なかったと聞いたが、腕の方は落ちていないようだな？」

「あれは柊がおかしいんやって・・・って、何やっとなるん、柊？」

ようやく霞と華雄は、俺に気付いたようだ。あと何をやってるのかって？ 撫でてるんですよ、恋ちゃんを！

「貴様が李通か。私の名は華雄、これからよろしく頼むぞ」

俺は恋ちゃんを撫でるのを止め、自己紹介をする事にした。少し残念そうな顔をする恋ちゃん。ちくしょう！可愛いじゃねえか！

「あいあい。あ、俺の真名は柊という。こちらこそよろしく頼むよ」

真名を交換しようと思ったのだが、華雄は困った顔をして

「真名を預けてくれるのは嬉しいが、私には真名が無いのだ。それで・・・だな」

「ああ、別に気にしなくていいよ。真名が有ろうと無かろうと、俺は華雄を信用する。遠慮せずに、真名を呼んでくれて構わんよ」

「す、すまない。では改めて、よろしく頼む、柊」

嬉しそうな顔で、俺の真名を呼ぶ華雄。やっぱりこの世界で真名が無いってのは、かなりのコンプレックスになってるのかねえ。

「うむ。では早速手合わせをするか！」

「さて、華雄。それはおかしい」

「む、何故だ？」

「いやいやいや、真名を交換する 手合わせをする。明らかに流れが変だろ！なに、ここの人達は基本血の気が多いのがデフォなの！？」

「いやまあ・・・俺の力は、霞との事で分かってるだろ？」

「それは霞だけだろう。私は貴様の力を知らん。さあ、つべこべ言わずとつと構えろ！」

「・・・・・・・・ダメ」

そんな時、間に入ったのは恋ちゃんだった。流石恋ちゃん！この無益な争いを止めてくれるんだな！

「・・・・・・・・恋が、先」

・・・・・・・・神も仏もないのか！

（あ、呼びました？）

（お前は自称神様だろうが！）

（ひ、酷いです！！）

（うおい！ てめえで最後なんだぞ！とつと始末書出しやがれ！）

（ひえ！す、すみません！先輩！）

(あ？ああアンタか。こいつが書類ミスで殺しちゃった奴てのは)

(ど、どうも。李通で御座います・・・)

(まあなんだ。俺が言うのも何だが、楽しく生きてくれや)

(もちろんです!!)

(おう、じゃ元気だな。おらあ！まだ始末書は上がらねえのか！)
(ひ〜〜ん・・・)

俺は自称神様と神様との交信を終え、この状況からどうやって抜け出そうかを模索していた。

1：このまま二人と戦う

2：霞に丸投げする

3：三十六計逃げるに如かず

「ええい、面倒だ！ 柸！お前がどちらと戦つか決める！」

「ひーらぎ・・・(ウルウル)」

ふ、残念だったな二人共。俺の答えはもう出ているのだよ。

「付き合ってられるか！逃げるが勝ちだ!!」ダッ！

「あ、こら！逃げるな！」

「・・・逃がさない」

平和な董卓軍（後書き）

さて、ここでオリキャラ徐庶の登場です。

はわわ軍師、あわわ軍師に続き、ふわわ軍師にしてみました。考え始めた時、最初に出てきたのが「たわわ軍師」でした。

いやあ流石にないかなwwwたわわと言ったら、思い浮かぶのー
っしかないwww

でも、徐庶の入り方は結構強引だったかな気がする・・・

そう言えば李通達のオリキャラの外見を説明した方がいいのでしょうか？

黄巾の乱・終幕（前書き）

あとがきの方に、李通と徐庶のプロフィールを載せておいたので、宜しければそちらも御覧ください。

では、13話目始まります。

黄巾の乱・終幕

「せ、姓は徐 名は庶 字は元直と言います！ 真名は夕里ゆりです！
こゝ、これからよろしくお願いします！」

あの後徐庶ちゃん・・・まあ夕里ちゃんは試験をクリアし、見事俺達の一員となった。真名の交換も終え、今後の方針を決めるのが今日の議題だったのだが。

「遂に黄巾党の本体が居る場所が分かったそうよ。それで、今日の議題はこれをどうするのか、と言う事になったわ」

「ようやっとか・・・数はどんなもんなんや？」

「各地に散らばっていた奴らも徐々に集まり、今は約6万と言った所なのです」

わーお・・・何か凄い規模になってるじゃねえか。

「答えなど決まっている！ 即刻出撃し、粉碎するまでだ！」

「まったく・・・脳筋はこれだから困るのです・・・」

「なんだと貴様！！」

「もしかして、朝廷がまた介入してくる・・・かもしれんか？」

「へえ、頭が回るわね柸。その通りよ。もしこの戦いで僕達が活躍

してしまえば、また朝廷の奴らが動いて、月を狙う可能性があるわ」「かといって、これを見逃せば民への信頼が損なわれるのも事実なのです」

民への信頼を損ねない程度に活動し、朝廷に口実を与えない程度に大人しくねえ……。

「なんちゅーか、まどろっこしいなあ……」

「僕達は一度月を人質にとられてる。ここは慎重に行動すべきだわ」

「民の信頼を失っては国として成り立たんのです。朝廷が動くとも限らんですし、我々も本隊討伐に参加すべきなのです」

そして分かれる意見。どっちの意見も一里あるので、判断が難しい。

「ん〜……夕里ちゃんはどう思う?」

「わ、私ですか!?!」

軽く空気と化していた夕里ちゃんに話を振る。同じく空気になってる恋ちゃんは……グッスリ寝ています。いやホント自由だね、この子。

「え、えと……私は討伐参加に賛成です。ただし、規模は少数精鋭の構成で参加……という形ですが」

「少数精鋭で?」

「はい。朝廷の人が動く事が出来ず、尚且つ民の信頼を損ねぬには、少数精鋭の部隊で本隊ではなく、それに合流しようとする部隊を叩くのがいいと思います」

初めはオタオタしていたが、自分の意見を言う時はしっかりと軍師の顔となり、自分の意見を述べていた。

「なるほど。確かに、少数の部隊で有れば朝廷も動けないですし、各個撃破すれば、本隊に流れる数を抑える事が出来るのです」

「そうすれば民の信頼も大丈夫・・・ね。中々良い案じゃない、夕里」

二人から褒められて、ふわわ・・・と言って顔を隠してしまう夕里と、ちらちらと俺の方を見てくる。あ、視線そらした。

「はいはい！　せやったらうちが行きたい！」

そして立候補する霞。それに続いて

「ならば私もだ！」

自分もと名乗り出る華雄。俺？俺はまだ隊を率いた事が無いからパス。恋ちゃんは・・・グッスリですね。もはや軍議に興味が無いらしい。

「行ってもらうのは、霞と恋、補佐として音々音に行ってもらうわ。華雄と柊は、街にいてちょうだい」

「さて詠！なぜ私はダメなのだ！」

「今回の戦は、さつき言った二つが重要になるわ。そして、その為の各個撃破には、高い機動性とそれを維持する持続力が必要なのよ」

「それは私の部隊が、二人の部隊に劣ると言っているのか！」

「違うわよ！ええと・・・何て言えばいいのかしら・・・」

怒気を孕ませ、詠を睨みつける華雄。一方詠は、何て説明したらいいのか、困っていた。

「まったく・・・三人の兵は、それぞれ特色があるんだよ。霞の兵は機動力、恋ちゃんのは殲滅力、んで華雄の兵は突撃力に優れてる。今度の戦は素早く多く賊を潰していかなくちやならない、そんな中で華雄の部隊が出撃して、何度も突撃を繰り返し、またすぐ次の戦場に移動する。そうしたらどうなると思うよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・兵達は疲れ、まともに動けなくなるだろうな」

「そう言う事。別に華雄の部隊が劣ってる訳じゃない、今回の戦場はその真価を発揮できないだけなんだよ」

華雄は俺の説明に納得できたのか、怒気を引っ込めて落ち着いたみたいだった。

「なるほどな。すまなかった詠、私の思い違いで不快にさせてしまった」

「い、いいわよ別に！僕だって、ちゃんと説明出来てなかったんだ

し……」

「それ〜に〜、留守番なんやから思う存分、柘と手合わせ出来るやんか」

「おいから霞、お前」「ふふふ……そう言えばそうだったなあ……
……畜生め……」

「留守番ついでに、あんたもそろそろ、部隊を動かせるようにしておくといいわ。補佐は……同じ新人同士って事で、夕里、アンタが付きなさい」

「ふわ！わ、わたひでしゅか！」

「そうよ。兵略も軍略も、実際に使わないと只の宝の持ち腐れなんだから。心配しなくても、偶に僕が見てあげるから」

「よ、よろしくおねがいしましゅ……」

そして軍議が終わった後、起きた恋ちゃん、俺と華雄が残る話を聞き、「……ずるい」と言うも、最後は月をお願いされて悲しそうな顔で出発していった。

【報告書：黄巾党本隊討伐に関して】

各地に散らばっていた仲間を集めた黄巾党は、その数約10万まで膨れ上がったが、その中の約半数は戦える状態ではなく、各諸侯達との連携により黄巾党の討伐は成功したのです。首領の張角・張宝・張梁の三名は義勇軍によって打ち取られた模様。その風貌は、熊の様に大きい風貌をした男であつたみたいなのです。

我が軍は本体討伐には参加せず、集まってくる賊を各個撃破する形をとり、中でも呂布將軍は、一人で約2万の軍勢を倒す等、飛將軍の名に恥じぬ戦いぶりを披露いたしましたぞ！ あ、これに關しては、一人が2万を倒すこと等、通常であればあり得ない事なので、朝廷が動く可能性も低いと思われるのです。

報告者：陳宮

「ん~~~~~・・・終わったのですー！！さあ恋殿、今日は音々と共に過ごしましょうぞー！」

「（フルフル）手合わせ・・・急ぐ」

「て、手合わせですと・・・？ああ！お待ち下さい恋殿！れーんー！ぎゅーのー！...！」

黄巾の乱・終幕（後書き）

なんと李通君お留守番の結末に！魏と接触するのはまだ先にする予定です。焦らして焦らして、自分の妄想を爆発させる予定です。にしても、最近糖分が足りない気が・・・

さて、夕里が仲間になった事ですし、ここで李通と夕里の特徴を書いていこうと思います。

姓：李 名：通 字：文達 真名：柎ひょうめ

武器：竜殺し 双剣>蒼天・晴嵐<

身長約195cmの黒髪黒眼です。

歳は20歳ですが、記憶を引き継いでいる為一部の人達を除き、精神年齢が高めです。

性格は温厚で世話好き。季衣や流琉の面倒を見ていた為、二人に兄貴分となっています。

姓：徐 名：庶 字：元直 真名：夕里（夕里）

背は朱里>夕里>雛里

胸は夕里 朱里 雛里です。

口癖は>ふわわ< 朱里と雛里より少しと年上なので、二人よりも落ち着いてはいるが、男性と触れ合った事が少ない為、パニックを起こしてふわふわ言う事もしばしば。

トレードマークの帽子は、両サイドに耳のように垂れ下がった帽子です。かぶる部分で、顔の三分の一を覆っています。イメージ的には、ぱすてるチャイムのルーシーを。

三人目の義妹

夕里 side

私は今、董卓さん・・・月さんの所で軍師をしています。詠さんや音々さん、霞さんに恋さん華雄さん、そして柊様と一緒に毎日頑張っているのですが・・・。

「・・・・・・・・（ビクビク）」

「なあ・・・？」

「は、はい！ なんでひよ・・・痛い・・・」

ふわわ・・・また噛んじゃった・・・。うう・・・男の人が近くに
いるなんて初めてだから、どうしたら良いのか分かんないよ～～～
・・・。

「その・・・なんだ。夕里ちゃんは俺が苦手なのかい？」

「い、いえそうではないんです。私、水鏡先生の私塾に居たんです
けど、その頃から男の人と触れ合う機会が無くてですね・・・」

「緊張してるだけだと？」

「お、お恥ずかしながら・・・。あ、軍議等でしたら大丈夫なので、
ご心配なく!」

「いや心配だよ、主に君の将来が。そんなんじゃ、恋人を作るのも一苦労だろうに」

こ、恋人！？わ、私に！？だったら・・・頼れる人が良いなあ、背も高くて優しくくて・・・でも、偶に甘えてきてくれて、膝枕もしてあげてたり・・・もし柊様が恋人だったら・・・ふわわわわ！

「ポ~~~~・・・」

「夕里ちゃん？お〜い、夕里ちゃん。・・・夕里？」

そうそう、こんな感じで呼び捨てで呼んでくれて・・・って！

「ふわわわわわ・・・！！」

「ようやく気が付いてくれたか。大丈夫か？」

「ダイジョブです！問題ないです！異常なしです！」

「まあ・・・それならいいけど。じゃ、俺達が受け持つ部隊とやらに行こうか」

そうでした。柊様は今日から部隊長をされるのです。

「は、はい。あの、柊様はご自分の部隊をどのように鍛えるのですか？」

「そうだねえ・・・今の軍には機動・突撃・殲滅と攻撃重視なのが
多いから、俺は防衛を主とする部隊にするつもりなんだが」

「防衛……ですか？」

「そ。撤退戦の殿、拠点防衛の戦い、策までの時間稼ぎとかを行う部隊。普段は街の警邏をさせて、自分達が街を守ってるって意識を持たせれば、それが戦いの中でも生きてくる。華雄だったら、そんな部隊、戦では邪魔になる！って言うかも知れんがな」

柊様はそう言っただけで笑った。でも、私はこの人は本当にすごいと思う。自軍に足りない物をしっかりと見極め、自分の部隊の意識まで考える、そしてそれを他の事に繋げる。相当な観察眼が無いと、ここまですぐに気がつく事は出来ないのに……。

「柊様は……どこかにお仕えしてた経験があるのですか？」

「いや？ ここに来るまでは、ずっと旅をしてたんだ。それと、様付けは止めて貰えるかい？こう……恥ずかしくてね。夕里ちゃん呼びやすい呼び方で呼んでくれると助かる」

「呼びやすい……で、でしたらですね！あの……その……」

うう……恥ずかしいけど、折角柊様がこう言っただけだから……

「お……お兄ちゃんって、呼んでいいですか？」

／／／／／／あああ……！！何言ってるの私は……お兄ちゃん……柊様だって困って

「お兄ちゃんか……それが良いなら、それでいいよ」

「ふえ？」

「いやな、俺の村にも妹みたいなのが居てね、そう言う風に呼ばれるのは慣れてるんだよ。しかし・・・何でお兄ちゃんなんだ？」

「えとですね、私朱里ちゃんと雛里ちゃん・・・あ、二人は諸葛亮と？統つて言うんですけど、その二人のお姉ちゃんだったので・・・その・・・自分より年上のお兄ちゃんが欲しいなあって・・・／／／」

それなのに私塾には男の人が居なくて・・・うう、こんな事だったら朱里ちゃん達の持つてる本、貸してもらえば良かったかなあ。

「よく分かった。これからは遠慮なく呼んでくれ、夕里ちゃん」

「あのですね・・・よろしければ柵様も、私の事を呼び捨てで呼んで下さいませんか？」

「呼び捨てで？」

こうなったらもう自棄です！ささささあ、ど、どんと来て下さいです！

「ふむ・・・うん、じゃこれからよろしくな、夕里」

「は、はい。お兄ちゃん／／／／／」

ふあ~~~~／／／何だかこう・・・胸がポカポカしてきましたよ。

「お、お兄ちゃん」

「どうした、夕里？」

「お兄ちゃん・・・」

「夕里？」

「お兄ちゃん」

「どうしたんだよ、夕里？」

こ、これは癖になってしまっそうです／＼／＼お兄ちゃん・・・お兄ちゃん

今私は、お兄ちゃんの部隊にいます。数は500人位かな、初めての部隊にしては結構数が多い気がするけど、それだけお兄ちゃんが期待されてるって事だよな。

「さて、皆聞いてると思うが、今日からこの部隊の隊長を務める事になった、李通だ。軍に来て日も浅く、俺の事を知らない奴もいると思うが、これからよろしく頼む。さて、早速だが、皆には守る兵になってもらう」

「隊長、質問なのですが守る兵と言うのは一体？」

「うん。俺は皆に、一人で五十人を倒せとは言わない。だが、防衛において真価を発揮できる兵になって貰いたい」

お兄ちゃんの言葉にどよめく兵の皆さん。まあ戦わず、初めから守りを考えるなんて、普通じゃないですからね。

「……………」

「酔狂な奴等め……じゃ、改めてよろしく頼む」

「……………ハツ！！！！」

「凄い……もう兵達の心を掴んでる。本当にお兄ちゃんは、どこにも仕えた事無いのかな？ でも……ふあ、あんなお兄ちゃんもカッコいいなあ……」

「ああそうだ、この子も紹介しなきゃな。夕里」

「はい！えと……姓は徐 名は庶 字は元直と言います。軍に入つて日も浅く、若輩者ですが、お兄ちゃん共々よろしくお願いします！」

「やった、一度も噛まないで言えた けど……なんで静かなんだろ？も、もう顔あげても大丈夫だよ……ね？ でも、顔を上げたからお兄ちゃんが……」

「……………」

額に指をつけて困った顔をしてました。あ、あれ？何か間違えちゃった？

「お兄ちゃん？」

「妹さん？」

「でも姓が違っし……」

「訳有りなのかな？」

「可愛いなあの子」

「呼ばせてるのが、お兄ちゃんって?」

「え、隊長変態?」

「変態?」

「……………(隊長は変態なのか?)」「……………」

「よしお前ら、これから鬼ごっこをしよう。なに、ずっと俺が鬼で構わん。ただし捕まったら……………どうなるか分かってるよな?」

そう言った瞬間、兵の皆さんは凄腕で逃げてちゃいました。お兄ちゃんは……………あのおつきい剣を振ってます。ふわわ……………、これはやっぱり私が原因なんでしょうか?

「さて、始めようか。これも皆との親睦を深めるためだ。さあ……………
・カクゴシロヨテメラ?」

「ふわわ……………す、すみません皆さん……………」

夕里 side out

三人目の義妹（後書き）

はいどうもこんにちは、ダルマで御座います^^

今回はずつと夕里視点で話を進めてみましたが・・・いやぁ楽しい！心情が書けるので、もう途中でニヤニヤしながら書いてました。

さて、後1、2話行ってから連合編に突入しようと思います。
ではそれまで

ノシ

朝、それは一日の始まりであり、新しい希望に満ちた素晴らしいものである。そして、その寝起きが良ければ良いほど一日の幸せも高くなっていくのではないだろうか？ 例えば、可愛い女の子に優しく起こしてもらおう等すれば、もう最高である。

ユサユサ……

(なんだ、この心地いい揺れは。ああ、もうしばらく揺れてくれ、そうすればとても良い状態で起きれると思うから……)

ユサユサユサ……

(揺れが止まった……仕方ない。良いとは言えないけど、中々の状態で起きれそうだ)

……ズドオオオオオンッ!!

まあそんな夢の様な展開等有る筈もなく、現実には常に無常である。

「……起きた？」

起こしてくれたのは実に可愛い女の子、恋ちゃん。でも起こした方は、机を李通の腹の上に落とすという過激なやり方。李通は意図せず、二度寝に入る事になった。

「起きてる柸？今日はアンタの言った区画整理を……って何

やっつてんのよ恋!..!」

「?ひーらぎ起こしてる」

「永眠しそうになってるわよ!とつとつと机を退けてやんなさい!..!」

「そういえば、何で恋はこいつを起こしに来たのよ?」

机を退けた後すぐに李通は眼を醒ましたが、顔は些か疲れている様に見える。

「.....手合わせ」

「手合わせ?」

「.....約束した」

実は恋ちゃん、李通が自分と手合わせをしてくれるのを楽しみにしていたのだ。しかし、霞の後にやろうとしたら詠に止められ、次は華雄に先を越され、拳句の果てには李通が自分の部隊をもったので、その調練と詠や音々の手伝いで、手合わせをする暇が無かったのである。

「.....ずっと待ってた.....」

「えっと.....詠?」

「分かってるわよ……。ただし、アンタは区画整理の案を夜までに纏めておくように!」

「了解だ。そんじゃあ恋ちゃん、手合わせ……。しよっか?」

「……………ホント?」

眼をキラキラさせながら聞いてくる恋ちゃん。これだけで、どれだけ李通との手合わせを楽しみにしていたのか、良く分かるものである。

「ホントです。恋ちゃんは準備は良いのかい?」

「……………(グウウウウウウ)」

「んじゃ朝御飯を食べたら、中庭に集合な」

「(パアアアアツ)んっんっ!」コクコク

大きく眼を開き、何度も力強く頷く。その隣で詠は、ため息をつきながらもその可愛い姿に、頬を軽く赤に染めていた。

朝食を取り終えた後、どこから聞いたのか霞と華雄、そして音々が中庭に集まっていた。

「んじゃ、二人とも準備はええか?」

「大丈夫だ、問題ない」「ん・・・」

「恋殿ー！そんな奴、けちよんけちよんのギツタンギツタンにしてやるのですー！！！」

「恋と柊か・・・どうなるか分からん戦いだな」

「そんじゃ・・・始めえい！！！」

「「フツ！」」

仕掛けたのは同時、しかし李通は双剣と恋ちゃんは方天画戟では、リーチの差があり過ぎる。加えて・・・

「ヤッ！！！」

「クウツ！」

（パターンが読めん！一撃の戻りが速い！！間合いを詰めるのが、敵しすぎる！！なんだこのチート！！！！）

お前が言うな。

時に払い、時に突く、型の無いその戦い方は、霞や華雄とは全く違う戦闘スタイルである。更に一撃一撃が早く重い。更に間合いを詰めようとすると、容赦なく蹴りや拳が飛んでくる始末である。

（武器のリーチはどうしようもない、このままこっちが受けに回ったらジリ貧・・・）

「お」「む」

「ハアアアアア!!」

李通は恋ちゃんの攻撃を受け止めるのを止め、打ち落としていくのに変えた。その選択は正しかったらしく、少しづつだが間合いを詰めていく事が出来た。

「ツク！」

「おお!?!」

飛んでくる攻撃を打ち落とそうとしていた李通は、突如下がった恋ちゃんに対応できず、攻撃は空振りに終わった。

「ひーらぎ………強い」

「あながと。恋ちゃんも強いね」

「強い……だから……本気でいく」

瞬間、恋ちゃんの雰囲気が変わり、濃密な殺気に包まれる。まるで、巨大な猛獣にでも睨まれているかの様な錯覚まで起こしてる。

「恋の本気が……久しぶりに見るなあ」

「これが……恋の本気……」

(さて……ここまで来ると、打ち落とすも捌くのも難しくなってくるねえ……。であれば……)

李通は深呼吸を一回だけすると、蒼天と晴嵐を一つに繋ぎ合わせた。

「嘘お!?!」「なに!?!」

忘れていかもしれないが、この双剣は二刀一刃が可能な武器なのである。双剣の時は神速の連撃を、一刃の時は予測不能の攻撃が可能となる。一刀を交わしたとして、もう一刀がすぐさま襲いかかってくる。突きと見せかけて払い、一刀の攻撃と見せかけて二刀目の攻撃と、双剣の時以上のトリッキーな攻撃を得意とする。

「さて……いくぞお、恋ちゃん!」

先に仕掛けたのは李通。霞の時以上の速さで間合いを詰め、攻撃の主導権を握るのが目的である。

「させない……!」

恋ちゃんは詰められるのを防ぐ為、方天画戟のリーチを生かし、李通の攻撃範囲可能外から攻撃を仕掛けるが……

ガシッ!

「!?!」

画戟の柄の部分をつまみ、強引に自分の間合いを確保したのだ。霞と華雄の眼には、李通が冷静に捕えたかのように見えるが

(いってええええええ!!!! 手が痺れる!てか危ねえ、もうちつとで切られるとこだったぞ!!!)

内心ヒヤヒヤだったりしている。

「そらあー！」

片手で一刀を振るう李通。一方の恋ちゃんは、画戟を掴まれているので回避する事しか出来ないでいた。しかし李通も、片手を抑えるのに使っているので満足に一刀を扱えていないのが現状である。

「……………じゃま……………」

二刀目の攻撃の合間を縫って、恋ちゃんは李通に肘打ちをかましてきた。李通は避けるのに意識がいつてしまい、掴んでいる手を一瞬緩めてしまった。そんな隙を見逃す恋ちゃんではなく、強引に引っ張り、方天画戟を取り戻すのに成功した。

「……………」

再び間合いを取り、相手の出方を見る両名。

しかし、戦いの最後は呆気ない形で訪れる事となった。

グウウウウウウ……………

「……………／／／／」カアアツ

「れ〜ん〜ん〜ん？」

恋ちゃんのお腹から聞こえてきたのは、空腹を知らせるお腹の虫だった。ってというか貴女、さっき朝御飯食べたばっかでしょうが。

「たくさん動くと・・・たくさんお腹空く・・・」

「結構燃費悪いのね、君の体」

「えっと・・・どないするん、二人とも？」

本来であれば、腹が減ろうが何だろうが続行何だけど・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・（グウウウウ）」

あんな顔されちゃ、続ける気なんて起きねえですよ。

「引き分けて事にしといてくれ。俺もちと疲れたしな」

「あんだけやつといて少しかい・・・まあええわ。んじゃ、この勝負、引き分けとする！！！」

李通との手合わせを終えた恋ちゃんは、ホクホク顔で音々と一緒に厨房へ向かって行った。李通はと言うと、木陰でボーっとしていた。

「それにしても、あの双剣あんな事まで出来たんやなあ・・・」

「双剣自体、一対一か、周りに味方が居る場合の一対多の時位しか使わないからなあ」

「前に柎の持っとなつた・・・竜殺しやつたつけか？あれ持とうとしたんやけど、えらい重くて持ち上がらんかったわ」

「あつちはなあ・・・切る！じゃなくて、ぶつた切る！って感じの武器だからなあ。重さを利用して、潰したり叩き割ったり・・・」

「ほお、中々爽快な武器ではないか」

これを爽快と言えるアンタは凄いと思う。冗談抜きで。

「あゝ・・・すまんが俺はこのまま寝るとするわ。今朝の目覚めが最悪だったから、もう眠い眠い」

「あいよゝ。んじゃ、こちらは部隊の鍛錬に行くとしようや」

「そうだな。しかし、あいつらにはもっと変わった鍛錬をさせてみたいのだが・・・」

「だったら俺の部隊と一緒に鍛錬させてくれ・・・防衛の部隊だから・・・いい・・・鍛錬・・・になる・・・zzzz」

「もう寝よつた・・・」

「そう言えば柎の部隊は、防衛が主だったな・・・なるほど、これは面白い鍛錬になりそうだ」

その後、華雄の部隊に扱かれた李通の部隊は、その防御力を大幅にUPさせる事に成功したそうな。

一方、その部隊長たる李通は、あのまま夜まで寝てしまい、区画整

理の案を大急ぎで出す事となった。

「やっぱり寝どめが悪いと、一日が不幸になるのは本当なのかねえ・・・」

ただの自業自得である。

反董卓連合結成

「皆、集まってるわね」

少し疲れた顔をした曹操が、玉座の間に集まった臣下達を見まわした。その隣では、桂花様が疲れた顔を・・・しかし凄く嬉しそうな顔をしていた。肌をツヤツヤさせて。

「どうかなさったのですか、華琳様？」

そう尋ねるのは秋蘭こと夏侯淵將軍。現在の曹操軍の中において、数少ないストツパーの一人である。

「つい先程、袁紹から檄文が届いたわ。内容は・・・要約すると、皆で洛陽にいる董卓を討て、との事よ」

「華琳様、その董卓とやらは何をやったのですか？」

「そうね。桂花、説明して頂戴」

「はい、華琳様。まず、靈帝が没したのは知ってるわね？ その際、宦官と軍部の方で自分達の皇太子を即位させようとしたのよ。即位したのは少帝弁だったのだけど、これに対し十常侍が何進を暗殺。その部下も十常侍を暗殺しようとしたのだけど・・・一部の十常侍が、少帝弁と劉協と共に都を離れ、董卓軍と合流し洛陽に向かったの。けど、その最中董卓が十常侍を殺し、劉協を皇帝として即位させ、暴政を働いてるそうよ・・・って聞いているの、春蘭？」

「む……うむ？」

「はぁ……姉者には後で私から話しておこう」

「まったく……これだから筋肉馬鹿は……」

「なんだとお!!！」

これもまた普段の光景である。にらみ合っている二人だが、曹操から諫められ、引き下がっていた。

「さて、この連合にだけど、無論私達は参加するわよ。その董卓とやらが只巻き込まれただけ、というのを知っているけど、この乱世で降りかかる火の粉を振り払えなかった。董卓には悪いけど、私達はこれを利用して、名声を広めさせてもらおうわ」

「……はっ!!」「……」

「さて、連れていく面子だけど……桂花」

「はい。まず春蘭と秋蘭、凧と真桜、沙和の五人がよろしいかと」

それを聞いて、えく、と声を漏らしたのは季衣こと許緒。夏侯惇と同じく、突撃大好きっ子な訳だから、当然と言えば当然である。

「もう季衣つたら……それで桂花様？私達は陳留の防衛……と
言う事でしょうか？」

「そんな所ね。流石に全員連れていく訳には行かないから、今回は諦めて頂戴、季衣」

「ちえく、分かりました」

流琉 side

反董卓連合への参加が決まり華琳様達はその準備で忙しい中、私と季衣は華琳様達が居ない間にやっておく事を纏めてただけ……

「ねえ流琉、兄ちゃん今何処にいるんだろうね……」

「季衣……」

私達の兄様……10年前から旅に出て、今まで何の連絡も無く、どこかで活躍しているという話も聞いていない。

「黄巾党の時に会えるかなって思ってたんだけど、結局どこの軍にも所属してなかったし、もしかしたら兄ちゃん……」

「季衣!!」

思わず大きな声を出してしまった……。私は慌てて季衣に謝る。でも……私だってその可能性を考えてない訳じゃない。あの大きな乱で、見つからなかったのだ。季衣の言う通りかもしれない……。けど、兄様が死んだって分かった訳じゃない。

「どうしたのだ流琉、そんなに大きな声を出して」

そう言って来てくれたのは秋蘭様だった。

「す、すみません秋蘭様！」

「謝ってほしい訳ではないよ。それで、一体どうしたのだ？」

「確か反董卓連合では、黄巾の乱以上に諸侯が集まる……だったら・

「秋蘭様には、私達に兄様が居るといふ事話しましたか？」

「いや初耳だな。それがどうかしたのか？」

「兄様は、私達が華琳様にお仕えする前から旅に出ていたんです。それで……黄巾の乱の時も見つからなくて……うぐつ……」

「ダメ……泣きそうになっちゃう……。季衣はもう泣いてるけど・
・私まで泣いちゃったら
・」

「なるほど、二人にとってその者はとても大切な人物なのだな」

「（ゴシゴシ）……はい、僕達の事を小さい時から面倒を見てくれて、それにとっても強いんです！」

「ほお……ならば心配ないだろう。二人が強いと認めた人物なのだ、そうそうにやられたりはせんさ」

「は、はい！」

「ふふ……ところで、その者の名は何と言うのだ？今回の連合で、

もしかしたら会えるやもしれん」

「えっと、柊・・・あ、いえ！李通と言う名前です。特徴が・・・黒い髪に黒い目で、とても大きい剣を持っています」

「李通か・・・分かった、見かけたら二人が心配していたと伝えておこつ」

「ありがとうございます、秋蘭様！！」

本当だったら、私達も行つて探したいけど・・・でも、今の私達は陳留を守らなくちゃいけない。だから・・・会える日を楽しみにしてます、兄様！

流琉 side out

「申し訳ありません、皆さん・・・」

開口一番、出てきたのは月ちゃんの謝罪だった。

「そんな！月が謝る事なんてない！」

「そうですね。どれもこれも、全て欲深な袁紹がやってる事ですぞ！」

少帝弁と劉協の保護、そこまでは良かったのだが、その事を知った袁紹が俺達が暴政を働いているという虚言を流し、反董卓連合を組んだ。

「まあ、起きちまつた事を悔やんでも仕方ないだろ。問題はこれから俺達がどうするか、だ」

「そう・・・ね。僕達の居る洛陽に来るには、？水函と虎狼関の二つを抜ける必要があるわ。そして、僕達の持っている兵力では連合を崩す事は出来ない」

「じゃあどないするん？」

「簡単な事です。結局の所連合は、私利私欲の集まった連中なので。利で集まる連中には、仲間意識が希薄なのです。なので・・・」

「敵が勝手に自滅するのを待つか」

そう言ったのは、なんと華雄だった。これには皆驚き、一斉に華雄の顔を見た。

「な、なんだ。私の顔を見て・・・」

「ねえ・・・アンタ本当に華雄！？妖か何かが化けてたりしてない？」

「な、何か悪い物でも食べたのですか！？音々が良い医者を紹介してやるのです！」

「自分・・・どっかぶつけた？」

「ど、ど、ど・・・どういう意味だ、貴様らーーーー！！！！！」

うがー、と声を荒げる華雄。しょうがないだろ、華雄を知ってる人

間だったら、当然の反応だ。恋ちゃんを見てみる、眼を丸くして驚いてるから。

「まあまあ……。とにかく俺達は、敵の自滅を待つてれば良いんだな？」

「そうよ。配置は……。？水函に華雄・霞・夕里・柊、虎狼関には恋・音々・僕がつくわ」

そして、軍議は滞りなく終わり、各々来るべき大戦に向けて準備を始めた。

「ああ、いたいた詠」

「？どうしたのよ柊。何か聞きたい事でもあるの？」

自分の部隊に向かう前に、俺は詠の元へと向かった。軍議の最中からずっと気になっていた事……。それを聞く為に。

「単刀直入に聞くぞ、俺達は本当にこの戦に勝つていいのか？」

「!!!・・・何馬鹿な事言ってるのよ、負けていい戦なんて有る訳ないでしょ」

まったくこのメガネっ子は、ポーカーフェイスが苦手なのか？顔にしっかりと>>ダメくって書いてあんど。

「じゃあお前が気づいてないと仮定して話そうか。俺達がこの戦いに勝つ意味はない、むしろ勝っちゃいけない。理由は、これからも続くであろう諸侯の嫉妬。そして……」

「それによる月暗殺の危険性……でしょ」

「やっぱり気付いてんじゃねえか」

そう、この戦は俺達に何のメリットも無い。檄文の通り董卓が暴政を働いてるならば、劉協が弁を使って反旗を翻した諸侯を、思い通りにすればいい。それほどの力が帝というのには宿っている。

だがあの優^月しい子はそんな事をしない。自分よりも他人を優先してしまう、でも施政者としての厳しさを併せ持つあの子はそんな事を望んでいない。

「勝っても負けても、月に危険が残る……こんな戦、仕掛けられた時点で詰んでるのよ!!」

悔しそうに……それ以上に悲しそうに叫ぶ詠。自分の大切な友人を助けたい。でも、助ける術が自分には見つからない。それが一層詠の心を蝕んでいた。

「僕……ね？ 月の為に一生懸命勉強したの……兵法も政も……でも……でも！そんなの覚えたって月を……大事な友達すら守れない!! ねえ……柎……僕、どうしたらいいの……?」

拳を強く握って振るわせ、目を真っ赤にして大粒の涙を流す詠。どつちに転んでもデッドエンド。救いが見えないから、どうしていいのかわからない。

ああまったく、知ってんのかこいつは。男にとって、女の涙は一番の武器だ理由って事。

「だったらさ・・・皆で考えようぜ。霞も華雄も恋ちゃんも、音々も夕里も月も一緒にさ、みーんなで考えようぜ。月が生き延びれる、良い方法」

「そんな事・・・ホントに出来るの？」

「心配すんな、俺に任せろ・・・な？」

ギョツ

泣いている詠を隠すように、俺は詠を抱きしめ、ゆっくりと頭を撫でてやる。しばらく泣いてスッキリしたのか、もう大丈夫と告げて離れる。顔が赤く見えるのは・・・多分気のせいだろう。

「恥ずかしいとこ見せちゃったわね・・・／＼／」

「気にすんな。泣いてる詠なんて、滅多に見られんからな。可愛かったぞ」

「う、うっさい!!・・・馬鹿・・・」

そして俺達は、再び皆を呼び出した。

さてさて、今回は俺も本気で頑張るとしますかね。救いの無い話は嫌いなんでね。物語をハッピーエンドにするなら、俺は何だってしてやるぞ。

反董卓連合結成（後書き）

PV30万越え・・・ユニーク5万越え・・・まだ16話しか投稿してないのに、ここまでアクセスがあるなんて、ダルマ、正直驚いています・・・。

更新速度も遅く、まだまだ未熟な私ですが、どうかこれからもよろしくお願いいたします^^

さて、遂に始まりました第二章 反董卓連合！作者はここを董卓軍側から書きたかったため、李通を董卓軍に入れたという、我儘仕様となっております。

勝てると分かっている方につくと面白くないじゃないか！！って考えだったので・・・。
月達を、どうやって内部から助けるのか、それをどうやって表現するか、ダルマはとてもwkwkいます。

それでは、第二章もごゆっくりお楽しみください^^

李通画策中

連合軍 side

「桃香様……本当にやられるおつもりですか？」

「うん。愛紗ちゃんは、やっぱり反対？」

「率直に申し上げるならば、反対です。この連合の中に居ながら、董卓を助け出す等……」

そう、私達がやるうとしてるのは、董卓さんを助け出す事。それが、どんなに危険で自分達に利益が無いのか、十分にわかってるつもりだけど。

「それでも、私は董卓さんを助けてあげたい。勝手に連合まで組まれて、それでも戦うしか無くて…それで殺されちゃうなんて、そんなの嫌だもん！」

「しかしですな、桃香様……」

「愛紗、もう諦めるのだー」

「うむ。こうなってしまった桃香様は、挺子でも動かんぞ？」

「あつう……」

わ、私そんなに頑固なのかなあ。朱里ちゃんや雛里ちゃんは、自分

の思った事を貫き通す事も上に立つ者に必要な事って言うてくれたけど…。

「でも、一体どうやって助けるのだ？」

「洛陽まで攻め込んだ時に董卓さんの身代わりを立て、その際に救出するのが一番なんです…」

「董卓軍の中に内通者がいれば、救出の動きも変わりますが、連合に見つからない様にするには、かなり難しいと思われます…」

内通者…手伝ってくれる人がいれば……

「なーにコソコソ話し合ってるのよ、桃香？」

そう話しかけてきたのは雪蓮さんだった。？水函の先鋒を任せられた時、私達に協力してくれると言ってくれた。多分私達の実力とかが知りたいんだと思うけど、それでも、私達にはそれがとても助かっていた。

「桃香の事だから、董卓の事助けたい！なぐんて考えてるんじゃないの？」

「な、なんで分かったんですか！？」

「……ちよつと関羽、貴女の所の主は隠し事が出来ない子なの？」

「返す言葉も無い……」

「はあ、まあいいわ。今うちの斥候が董卓軍に潜り込んでるから、

それを待ちましょう」

「おねーちゃん、手伝ってくれるのか？」

「そう「勝手に話を進めてもらっては困るな、伯符？」げ……」

雪蓮さんの話を遮ったのは、周榆さんだった。

「あはは……。聞いてた？」

「当然だろう。下手したら、連合の矛先が我らに向くとも限らんだぞ？」

「そうなんだけどね……。何か上手くいく気がするのよ」

「何ですか？」

「もちろん……勘よ」

「伯符……」

ため息をつく周榆さん。もしかして、いつもこんな感じなのかな？そんな時、雪蓮さんの言っていた斥候の人が戻ってきた。

「只今戻りました、雪蓮様、冥琳様！」

「お帰りなさい明命。それで？どうだったの？」

「はい！……でも、宜しいのですか？その……」

そう言つと私達の方を見てくる斥候の人。

「大丈夫よ。私達は今、劉備と協力関係にあるから。あ、紹介するわね。この子は周泰。私達の仲間の一人よ」

「そうなのですか。私は周泰と言います！よろしくお願いいたしますのですー！」

「よろしく周泰さん。私は劉備つていいいます」

自己紹介も終わつたんだけど……あの、周泰さん？い、一体どこを見てるのかな……？

「（ペタペタ）……羨ましいです……」

「はづつうう……」

「それで？董卓軍はどうだったの明命？」

「は、はい！まず？水函を守る将ですが、猛将華雄、神速の張遼、それと……」

「ん、どうしたのだ？」

「えと……李通さんが居ました……」

「」「」「」

「おー。あのお兄ちゃんなのかー」

「あ、あの…桃香様達は御存じなのですか？その李通と言う方の事」

「ふむ。私も知らぬな…どのような者なのだ？」

あ、そつか。あの時はまだ朱里ちゃんや星ちゃん達と会ってないから、知らないんだ。

「朱里や雛里達と会う前に、立ち寄った村で賊と間違えてしまったな…それで一騎打ちをしたのだが、一瞬で負けてしまった。武においては、私より上だろう」

「ほおー。愛紗にそこまで言わせるか」

……そう言えば周泰さん、李通さんって

「もしかして、雪蓮さん達も李通さんの事知ってるんですか？」

「ええ。妹が賊に襲われそうになった時、助けてもらったのよ」

「しかし、その様な方が董卓軍についたとなると、救出は更に難しくなりますね」

うう…ん、どうしたらいいんだろう……やっぱり助けるなんて、無理…なのかな。

私が助け出す方法を考えていると、周泰さんが手紙を雪蓮さんに渡していた。

「明命、これは？」

「はい！李通さんからののですー！」

え？

「李通……から？」

連合軍 side out

董卓軍 side

「とまあ、こんな感じ何だが、どうだ？」

「……確かに可能性は有るけど、成功させるには、その保護してくれるかもしれない諸侯との連携が必要よ？そんな事出来るの？」

「なあに、心配しなさんな」

そう言うと俺は竜殺しを手に持ち、ゆっくり五秒数えた後、右斜め後ろの天井に竜殺しを投げつけた。

「そおい！！！」

「はうあ！！！？」

投げつけた先からは、可愛らしい悲鳴が聞こえてきた。

「周泰ちゃん、今出てくれば、後で呂布の所の猫を抱かせてあげよう。出て来ないなら……捕まえた後簀巻きにして、その目の前で

猫と戯れてやる。悶々とした気分を味わうといい」

「あうあう……………お、お久しぶりです李通さん」

「はいお久しぶり、周泰ちゃん。元気そうで何よりだ」

天井から降りてきた周泰ちゃんに、華雄と張遼は警戒心を強めていた。が、少なくとも敵意が無い事が分かると、いくらか警戒を解いていた。

「お兄ちゃん、その…大丈夫なんですか？ 間諜の人ですよ？」

「なに大丈夫だよ。さて周泰ちゃん、悪いけどちと届け物を頼まれてくれるかい？」

「届け物ですか？」

「そそ。この手紙を孫策に渡してくれればいい。後は……………多分周楡辺りが上手くやってくれるだろうからね」

俺は懐から一つの手紙を取り出し、周泰ちゃんに預けた。周泰ちゃんとしては結構複雑なんだろうな、見つかった拳句、こんな事を頼まれているのだから。

「あの李通さん、どうして私があそこに居ると分かったのですか？」

「せや、うちや恋だつて分からんかったのに、何で分かったん？」

「なに、執務室から逃げ出そうとした時、丁度天井裏に入ろうと頑張ってる周泰ちゃんを見つけて、多分ここにもいるんだらうなあ

って思ったただけだ。んで、剣を投げる前に数を数えて、意識を俺の方に集中させて、見つけやすいようにしてた訳。ああ、その音々音。無言で助走を取るんじゃない」

あのな、部屋に入ったとたん書簡の山が部屋一杯にあつたら、流石に逃げ出すぞ。まあ後でやるつもりではいたけど。

「仕方ないでしょ、戦の所為でやる事が山の様にあるんだから。僕と月の分を四割づつ入れてあるけど」

「す、すみません、柊さん（今日のお仕事少なかったのは…もしかして……）」

「適材適所と言つやつなのです（恋殿と音々の分を入れてあるですけど）」

「お兄ちゃん、身体には気をつけてね？（うう、自分の分が終われば手伝ってあげるのに……）」

俺を思ってくれてるのが、二人だけという事実。君達が俺の心のオアシスだよ、月、夕里。

「へう／＼／／」「ふわわ……／／／」

「なんでそこで抱きついてるのよー！ー！ー！」

癒し分補給のためだ。

これで後二日は戦える。

李通画策中（後書き）

この間部屋の室温を測ってみたら、28 ありました、そろそろエアコンを点けようか迷っているダルマです。

？水関の戦い　く上々（前書き）

？水関戦が始まりました！

? 水関の戦い ㄱㄴ

さて、今俺達は？水関の中で連合軍と戦ってる真つ最中。俺達が考えた策を纏めると、

? 連合軍を？水関に足止めする

? 俺が孫策と接触し、密談（おそらくだが劉備も居る筈）

? 協力を取り付け、虎狼関を奪取された後劉備に月と詠を任せる

「今考えると、かなり大雑把な作戦だよな、これ」

「そうか？分かりやすくして良い策だと思うが」

「いやいや、まず孫策とどうやって会うつちゆうねん」

「それはな…っと、噂の孫策が出てきたみたいだな」

さつきまでは関羽がやっていたのだが、効果が無いと分かると孫策が出張ってきたようだ。確か、ここで華雄が出撃して？水関を落とされるんだっとな。

さて、杯は………ちゃんと三つあるな。

霞 side

「離せ霞！ 奴等是我々の武を侮辱しているのだぞ！！貴様はこれを見逃せというのか！！」

「あかん言ってるやる！！ここであちらが出たら、月も詠も助けられんのか！！」

「だが!」

「まったく、さっきからどうした華雄？」

「柎、貴様は悔しくないのか! 奴らは、我ら武人が磨き上げてきた武を、侮辱しているのだぞ!」

(頼むで柎、アンタまで変な気起こさんでくれよ……!)

「そんな事より、酒飲もうぜ、酒」

「は?」

ま、まったくまったく! え、なに、何で酒を飲む話になってるん! ? そりゃまあ飲みたくない訳やないけど、今は飲んどる場合やないやろ?

「巫山戯てるのか貴様!! 戦場で酒を飲むなど「なあ華雄」…?」

「今のお前は武人である前に、一軍の将なんだよ。」

その将が、侮辱されたから突撃を仕掛ける? 巫山戯てんのはどっちだてめえ!」

「!」

「あの時言っただろ、俺達はもう袋小路なんだ。だが、今少しだけ月と詠が助かる道が見えてるんだ。お前は、それさえも潰そうってのか?」

「……………そう…だったな。すまない霞、柎。頭に血が上ってい

たよつだ」

よかつた〜、柊が居てくれて助かったわ。うち一人やったら、止めきれんかったからな。

「そついや、なんで自分酒なんか持つてきてるん？」

「いやなに、連合軍を着に酒でもどうかと思つてな」

「……………」

「あれ、いらねえ？」

「ぷっ、あつはははは！ええなあ、それ！あいつら着にか！」

「ふっ、面白い！我らはその程度では動かんと言つ事、分からせてやろうではないか！」

なんちゆうおもろい事考えるんや、柊は。あああかん、なんや凄く楽しくなつてきた

霞 side out

曹操 side

「か、華琳様！あれを！！」

「見てるわよ桂花。中々面白い事をしてくれるわね……」

敵軍の眼の前で酒を飲む…ね。

「将が余裕を持っている事で、兵達にも余裕を持たせる。そして、それを私達に見せつける事で、こちらの士気を下げるのが狙いかしら」

「御意……。これで我々は、正攻法で？水関を落とすほか無いかと……」

「それに関しては、劉備と孫策に任せる事にしましょう。それより、どうかしたの秋蘭？」

「はっ、申し訳ありません華琳様……」

珍しいわね、秋蘭がここまで思い悩んでいるのは。先程も城壁を見つめていたようだし……まさか

「秋蘭。もしかしてあなた、城壁にいる男に惚れた？」

「い、いえ！違います華琳様！……実はここに来る前、流琉から一つ頼み事をされまして。もしかしたら、あの城壁にいる男が件の者ではないかと思ひまして」

「流琉から？なにを頼まれたの？」

「はっ。流琉と季衣が同じ村の生まれなのは御存知かと思いますが、実は二人には兄が一人いたらしく、二人が我々の元に来る前から旅に出ていたそうなのです」

二人に兄がいた？成程、私が誘った後少し迷っていたのはそれが理

由だったのね。

「名を李通と言い、当時の二人では、まるで齒が立たなかったそうです」

「へえ…面白いわね」

「華琳様！まさか、あの男を我が軍に入れるとおつもりでは！？」

「心配しなくてもいいわよ桂花、今の所欲しいのは張遼だけだから。でも……」

「か、華琳様？」

「その李通と言う男が使えるのであれば、入れるのもいいかもしれないわね」

私がそんな事を言うと、まるで世界が終わったかのような顔をする桂花。ふふ、この子は本当に可愛いわね。

曹操 side out

「お兄ちゃん！華雄様！霞様！い、一体何をやってるんですか！」

良い感じで酒が回ってきた時、怒りながらやって来たのは可愛い義妹の夕里だった。あ、こら。酒を取り上げるんじゃない。

「兵の皆さんが頑張ってるのに、将の皆さんがお酒を飲んでどうするんですか！」

「いやいや夕里ちゃん、これ言い出したんは柊やで?」

こっちに振んなよ。

「すまんな夕里、お前を仲間外れにしてた。俺の使ったやつで良いなら、一緒に飲むか?」

「え／＼／……って、お・に・い・ちゃ・ん?」

「分かった分かった、ちゃんと説明するから……。っと悪い、説明は後だ。連合軍が動き始めた」

左翼から劉備軍、右翼から孫策軍か。とりあえず、あの手紙通りの布陣にしてくれたたって事は、話を聞く気があるか…。

「夕里、俺の部隊を集めておいてくれ。今回は…襲牙しゅうがを全員に装備させてな」

「は、はい!」

「なんだ柊、その襲牙とは?」

「まだ試作段階だが、防衛戦用特別壁盾、通称襲牙。使用方法は…
…見れば分かるという事で」

さあて、防衛戦に特化させた部隊の真髄、とくと味あわせてやろうか。

「李通隊、揃いました!」

「おーし、一番隊から四番隊は右側、五番隊から八番隊は左側を守れ！九・十番隊はいつでも交代出来る様に備えとけ！！」

「……………はっ！！！！！！」

初めは500人だった李通隊も、今は1000人になってるからなあ。大所帯大所帯

「あの、双牙の方は使わないんですか？」

「今回は防衛だけだし、双牙自体数が有る訳でもないからな。さて、俺達はどうやって戦えば良い？夕里軍師殿？」

「ふわわ……………コホン…連合に出来る攻撃は二つ、破城鎚による城門破壊か、梯子を使って城内に進入するかのどちらかです。ですが、後者は襲牙によりほぼ不可能。なので、私達は破城鎚に気をつければ良いと思いましゅ！」

「最後噛んだから80点」

「ふぁ…頑張ります……………」

「まあそこが可愛いから良いんだけどな。

さて！軍師殿が言った通りだ！お前達は、城内進入などさせるか！？」

「……………否！！！！！！」

「ならば、一人もこの？水関に立たせる事許さん！隣の友を守れ！

「大丈夫だよ、俺はちゃんと戻ってくるから」

「ふえ……………／／／」

「でも、ホントに一人で大丈夫なんか？やっぱりうちも行った方が……」

「誰にも見つかる事無く孫策の所に行けて、何事も無く帰って来れる自信があるならいいけど？」

「……………遠慮しとくわ」

ぶつちやけ来てもらいたいよ？一人で敵陣に潜り込むとか、どこぞの蛇男じゃないんだから。

? 水関の戦い 〵上〵 (後書き)

どもどもダルマで御座います。

さて、皆さまのお陰で続いている転生兄貴ですが、そろそろ20話に届き、PV40万・ユニーク6万越えとなりました。

そこで、皆さまにアンケートをとりまして、今までに出た人物のサイドストーリーを作ろうかと思っています^^

人数としては二人〵三人と考えています。こいつの話を作ってくれ!!なのが有りましたら、感想の方をお願いいたします。

べ、別にネタが無くなったとか、そんなんじゃないんだからね!!

〵〵〵

何やってんだ、俺……ではノシ

？水関の戦い　〜中〜

「三番隊四番隊、六番隊七番隊、破城鎚を押ししている兵に向けて、弩砲発射！その他は登ってくる奴らの相手だ！」

「お兄ちゃん、劉備・孫策軍が撤退していつてます！」

「ん、ようやくどつちも引き始めたか。撃ち方止め！追撃はしなくていい！」

「なに？今が絶好の機会ではないのか？」

「劉備も孫策も、後で協力してもらおうからな。ここで痛手を与えたら、協力を取り付けられ無いかもしれないからな」

初日は劉備・孫策軍との戦闘で終わった。さて、こつから本番だな……。

連合軍 side

「キーー！まだ落とせないんですの！？」

「そりゃ無理だつて姫え。梯子で登ってたら、盾からいきなり剣が出てくるし、破城鎚持ったら、変な矢で撃たれるし」

「それをどうにかしなさいと！言ってますのよ！」

？水関を攻め始めて三日目、二日目から昼夜問わずの攻撃を仕掛けられているにも関わらず、？水関からの攻撃は衰えるどころか、激しさ

を増すばかりだった。

(このままでは内部分裂しかねない)

軍議に参加している孫策と劉備以外の者達の心中に、僅かではあるがその思いが出始めていた。

「仕方ないわね……明日は私と劉備のところで攻城させてもらうけど、良いわよね袁紹？」

あの手紙を見た孫策と劉備には、四日目に李通が自分達に接触してくるという情報があった。故に、四日目は自分達が前線に出れば、接触しやすいと考えたのだ。

「ええいいですわよ。では明日は孫策さん達に「まちなさい、麗羽」

明日の攻め込む軍が決まり、軍議が終わろうとした時(策が無いのはいつも通り)、それに待ったをかけたのは曹操だった。

「なんですの、華琳さん？」

「劉備の軍では、明日一杯攻め続けられるとは思えないのだけど？」

「なら、どうすると言っんですの？」

「私達が出るわ。少なくとも、劉備のとこよりはましだと思っわよ」?

これはまずい、これでもし孫策軍の誰かと李通が接触しているのを

見られたら、叛意有りとみなされ、この連合が自分達の敵になってしまう可能性がある。

「そうですね……では、明日は孫策さんと華琳さんに任せる事にしましょう」

だが異議を唱える事は出来ない。なぜなら、曹操の意見は至極的を得ているからだ。

（まずいわね……こうなったら李通に任せるしかないのだけど……頼むわよ、李通）

歯痒い思いを感じながら、孫策は敵方に居る男に任せる事にした。様々な思惑が入り混じりながら、三日目の軍議は終わった。

連合軍 side out

「華琳様、なぜあのような事を？」

あそこでの割り込み、そして劉備に変わっての参戦。夏侯淵はそれが疑問でならなかった。

「少しね。孫策があそこで劉備を指名したのが気になったのよ。劉備も何も言わず、賛成していたようだし」

「そういえば……そうでしたな」

「そういう事よ。さあ、明日に備えましょう秋蘭。もしかしたら…

面白い事が起きるかもしれないわ」

「御意……」

そして四日目の戦いが始まった

「どうしてこうなった」

目の前に広がるは赤と青の鎧。自分の望んでいた赤と緑では無かったのだ。

「これじゃあ孫策と接触すんのは無理やで？」

「だよなあ……どうしてこうなった？」

「二度も言わんでええっちゅうに。多分やけど、曹操がなんか感づいたんやないか？」

面倒な事になった。まったくもって面倒な事になった。

「夕里、どうすればいいと思うっ？」

「……この状況で曹操軍に気付かれず、孫策軍の誰かに接触するのは非常に難しいと思います。ですので、両軍を混乱させればいいんですが……」

混乱ねえ。あ、じゃあ丁度良いじゃねえか。

「華雄、霞、出番だ」

「なんだ、突撃でも仕掛けていいのか？」

冗談交じりと言う華雄だったが、李通はそれに親指を立てて返事をした。

「今まで防戦一方だったからな。ここで攻撃を仕掛け、引つ掻きまわして混乱させて来てくれ！」

「おっしゃあ！あいつら昼も夜も攻め続けて、こっちはろくに寝とらんのだ。憂さ晴らししたる！」

「ふふふ……ずっと我慢していたのだ。この熱、もはや止まらないぞー!!」

「……おい、混乱させるだけだぞ？ほどほどにだぞ？間違っても全滅とかさせんなよ？」

「ふふふふふ……」

心配だ。大いに心配だ。

「開門！これよりうって出るぞー!!」

「「「「「おおおおおおおー!!!!!!!!」」」」」

突然の攻撃を受け、私は自分の隊とはぐれてしまった。敵は攻撃はするのだが、我が軍と孫策軍の中を走り回り、まるで混乱が目的の様に見えた。

「ともかく、今は自分の部隊と合流しなければ…」

「あれ？」

部隊を探している時、見知らぬ男と会った。

なんだこの男は。部隊を引き連れないで……まさかこいつも部隊とはぐれたのか？こちらにはまだ気づいてない様だが…。

「まったく、混乱させすぎだろ……。まあ華雄も霞も、それだけ鬱憤が溜まってたって事か。華雄は仕方ないにしても、霞も結構溜まってたんだねえ…」

さて、今こいつは何と言った？

「貴様、董卓軍の者か!？」

「え?……ああ違いますよ。俺は只のしがない一般兵ですよ?」

「ではなぜ一般兵が、華雄の事を味方の様に喋っていたのだ?」

こいつ、もしかや?水関を守る、名が分からなかった将か?

「我が名は楽進!曹操様に仕える将だ!!答える、貴様は誰だ!!」

「……董卓軍の将、李通だ。……おいおい、やる気満々だな」

「当然だ。ここで将の一人を落としたとなれば、それだけ？水関も落とすやすくなるだろうっ！」

一気に距離を詰め、接近戦に持ち込む。こいつの武器は、沙和と同じ双剣。だが、抜かせる暇など与えん！！

「ハアッ！」

「ん〜……」

かわされた！？ しかし！

「フツ ハツ ヤアッ！！」

「……………」

「ま、真面目に戦え！さつきから避けてるだけじゃないか！」

「少し考え事をな。時に楽進ちゃん」

「ちや、ちやん付けするな！！」

「いいじゃないか楽進ちゃん。で、質問なんだが。楽進ちゃんは、どうやって蹴りや拳を出す？」

な、何を言ってるんだ、この男は？どうやってだと！？

「ぶざけているのか！この…！」

「楽進ちゃんの蹴りや拳には重さが無い。腕の力や足の力だけで攻撃している証拠だ。それを気で補ってるみたいだけどな」

「その何が悪い！」

「身体全身を使えって話だ。蹴りも拳も、軸足と腰それから肩を使わなきゃ、威力は半分以下になる」

「…軸足と腰、ですか？」

いつの間にか私は攻撃するのを止め、男の話を聞いていた。まるで、何かを教わってるかの様な、そんな空気になっていたからだ。

「そう。それらを回すっていうイメージ……感覚で、蹴りや拳を出してみな」

軸足や腰を回す…こうかな？

「フッ！」

「ちつと違うな。蹴りだったら、軸足から腰にかけての力を蹴り足に集中させて、肩を回す事で勢いをつける。力の流れを途切れさせずに、蹴りを出すんだ」

力の流れ……

「フッ！！」

！？

凄い……勢いが全然違う。キレも早さも、前とは全然違う!!

「おお、上手い上手い。後はそれを、意識しなくても出来る様にするれば完璧だな」

「は、はい！有難うございます!!」

「筋がいいねえ、楽進ちゃんは。今後が楽しみだ」

「え、えへへへ…… / / / /」

褒められた……うん、もっと頑張ろう。
……って!

「わ、私と貴方は敵同士じゃないですか!」

「おや、ようやく気付いた。気付いた所で俺は逃げさせてもらっよ!
!」ダツ!

「あ、こら!!」

うう……逃げられた。

「でも、李通さんか……また、会いたいな……」

ふ、深い意味はないぞ!ただ、こっ……

「兄さんがいたら、あんな感じなのかな……」

「で、自分は敵の将とイチャついてたと？」

「誤解です……」

「お兄ちゃん……不潔です……」

「誤解なんです……」

あの後楽進ちゃんと別れた俺は、黄蓋さんと接触。四日目の夜に陣営に向かう事を伝え、天幕に指定した目印を置いてもらう様に頼んでおいた。これで下準備は終わったんだけど……

「大体、敵の将に手ほどきするって聞いた事ないわ！」

「伸びしろのある子だったからなあ。場数を踏めば、強い武将になるだろうな」

「なんや、そんなにええ子やったんか？」

「霞も会えば気に居ると思うよ。さて、俺は準備でもしてくるかな」

そう言って、俺はこの場から離れようとしたが

「話はまだ終わってませんよ、お兄ちゃん？」

ああ、夕里。頼むからそんな笑顔で俺を見ないでくれ。

激しく怖いから……!!

その後、向こうの陣営に行くギリギリまで夕里の O H A N A
S H I を聞かされ、精神がガリガリと削られる様な思いをした李通
だった。

？水関の戦い　～中～（後書き）

襲牙についての説明をば……

大きさ1・4 mの壁盾。

中央に弩砲を撃つ為の穴が空いており、その下と盾の上方には横に長く、縦に短い穴が空いている。

上方のは前を見る為だが、下の穴は、そこから剣を出して登ってきた敵を倒す為の物である。

前回試作型と言った通り、弩砲の飛距離は弓の三分の一、まだまだ改良の余地のある代物です。

双牙に関しましては、出てきた時に説明したいと思えます。
では、感想等お待ちしています！ノシ

「こちら李通、孫策陣営に潜入した」(前書き)

上中下と続くと思ったら、間に一つ挟まりました。
自分の文章構成力の無さに泣ける・・・

「こちら李通、孫策陣営に潜入した」

こちら李通。今孫策陣営に潜入している……

蛇男ではないけどさ、やー怖い怖い、周りを見渡しても敵敵敵。バシたら一発でTHE END、発起人の俺がいつものも何だけど、なんでこんな事言いだしたんだろ……orz

「とにかく、まずは目的の天幕を見つけないとな……と、あそこにいるのは」

長い黒髪とちっちゃい身長。間違いない、周泰ちゃんだ。

「……ストーキングせざるをえない……」

後方20mをキープしつつ、見失わない様に尾行開始。更に気配もシャットダウン。

運が良ければ、天幕まで連れてつてくれるかも。

「にしても、やっぱり陣営内の空気が暗いな。俺達相手に、ここまで苦労するとは思って無かったんだろうな……」

さて、周泰ちゃんはどこに行くのかねえ。しかし、陣営の中心から結構離れてきてるけど……お、なんか小さい天幕の中に入ってた。

「なにやってんだろ？」

周りにいる兵に見つからない様、そ……と中を覗いてみる。その中で行われていたのは……！

「あうあう、モフモフ気持ちいいです」

「貴様！そこでなにをやっている！！」

「だ、誰ですか！？」

「よお甘寧さん、周泰ちゃん、久しぶり。元気そうだなによりだ」

しまった、周泰ちゃんのモフモフ姿に気を取られて、周囲の警戒を忘れてた。

「李通さん！？ ど、どうやってここに来たんですか？」

「こつ…スルスルつと。さて周泰ちゃん、猫と戯れているところ悪いが、孫策達のいる天幕まで案内してもらえるか？」

「はい！こつちです！」

「……甘寧さん、か」

「久しぶりだな、劉備ちゃん、孫策」

「お久しぶりです、李通さん」

「まったく、無理矢理にでもあの時引き止めておくべきだったわね。本当に敵になっちゃってるじゃない」

「長い人生、敵になる時だってあるさ。ところで、そちらの三人はどちら様だ？」

「我が名は趙雲と言う。話は聞いているよ、李通殿。愛紗……関羽を一瞬で倒したとか……」

うん、俺はその眼をよく知っている。その好奇心と興奮が一緒になった眼。それは手合わせしたい奴がする眼だ！！

「（スル しておこう）んでそちらの二人、もしかして諸葛亮ちゃん、鳳統ちゃんかい？」

「はわわ！どうして分かったんですか！？」

「あわわ……見抜かれちゃいました……」

ええ知ってますとも。稀代のはわわ軍師とあわわ軍師ですもの。

「夕里から色々聞いてたからな。二人の事、心配してたぞ？」

「何で夕里ちゃんの真名を？……ってもしかして！」

「そつちに…夕里ちゃんがいるんですか？」

「おう、元気にふわふわ言ってるぞ。さて、早速だが例の話と行くか。耳は？」

「心配しなくても、思春と明命が片付けてくれたわ」

「……………んで、虎牢関まで攻めてもらって、周泰ちゃんか甘寧さんに門を開けてもらった後、城に火を放つ。その後、董卓と賈馱を劉備ちゃんの所に連れていく。これがこつちの計画なんだが…」

「分かっていた事だが、やはり厳しいな……………袁紹や袁術であれば心配ないが」

「曹操さんですね…。あの人に見つからない様に事を運ぶのは、かなり厳しいと言わざるをえません」

「いつその事、曹操さんにも手伝ってもらおうか？」

「何を言ってるのですか桃香様…「いや…」」

「その案貰いだ、劉備ちゃん」

「本気で言っているのか、李通？ あの曹操が董卓を助けるとは、到底考えられんのだが？」

確かに。曹操ならむしろ、自分達が捕まえて名声を広げる為に利用するだろうな。

「別に助けてもらわなくてもいいんだよ」

軍師勢は分かったみたいだな。さて、頑張るとしますか。

「まったく……一体何の用よ孫策。今日は疲れているから、早く休みたいのだけど？」

「ちよつと紹介したい奴がいるのよ。入ってきていいわよ」

「貴女は…確か劉備だったわね。その隣の男は…？」

「初めまして、曹孟徳殿。俺の名は李通、董卓に仕えてる者だ」

「「「！！！？」「」」

おゝ驚いてる驚いてる。

つて、夏侯淵だけ落ち着いてるな。むしろ納得したって顔してるし。

「？水関を守る将の一人が、こんな所で何をしてるのかしら？」

「回りくどい話は苦手なんで、単刀直入に言わせてもらう。俺達董卓軍は、董卓と賈馱を逃がしてやりたい。その為の協力を劉備と孫策にお願いしてたところだ」

「ふうん。それで？まさか私にも協力しろと言つつもりかしら」

「いんや。曹操には、見て見ぬふりをしてもらいたいだけさ。劉備が董卓と賈馱を保護している所をな」

そう。別に協力して助けてもらう必要はない。ただ見て見ぬふりをしてもらえば良いだけの話だ。

「下らない……。悪いけど、私は董卓を捕まえるわ。そして、私の

名声を広める為の

「ムリダナ（・x・）」「!？」

「ちょっとあんた!どういう事よそれ!」

現れたな猫耳軍師。まあ当然だろうな。暴政を働いている董卓を捕まえ、処罰する。それによって名声が広まる。とても分かりやすいが……

「生憎、前提条件が間違っている。一つ、董卓は暴政を働いていない。二つ、董卓は洛陽の人達からとても好かれている。でだ、もしそんな奴を捕え処罰したとしたら、どうなると思う?」

「くっ……」

「確かに一時的になら名は上がるだろう。だが、董卓が洛陽の施政者になってから訪れる商人も人も増えた。そいつらは董卓が良い奴だと知っている。そいつらが董卓が討たれたと知れば、何をするか分からん訳でも無いだろ?お前はそいつらの口を閉ざす事が出来るのか?」

董卓は暴政なんてしていなかった。にも関わらず、董卓を捕まえ処刑した。となれば、洛陽出身の人間は必ずその事を色んな人に話すだろう。それは疑心を生み、やがては信用を無くす事にもなりかねんのだ。人の噂はとても広まるのが早い。ましてや、商人達においてはそれが顕著だ。なにせ、商人にとって噂や情報と言うのは、商売道具の一つだからな。

「でも、だからと言って、何の見返りも無しに見過ごすなんて事はしないわよ?」

「当然だな。と言う訳で、曹操には虎牢関制圧をお願いしようと思
う」

「あら、二つある関のうちの一つを私に？ だったら劉備と孫策に
はどうするのかしら？」

「心配しなくても、私には袁術ちゃんの部隊を集中的に叩いてもら
うようにしてもらったわ。名声に関しては、黄巾党の時も合わせて
結構上げたから、今回は劉備ちゃんに譲ることにしたの」

「私は？水関制圧お願いされました。今の私達には、有りがたいお
話だったので……」

孫策さんは、独立するのに邪魔な袁術の兵を減らすのを。劉備ちゃ
んは、もっと大きくなるのに必要な名声を見返りとして与える事にな
った。正直、？水関を劉備ちゃん、虎牢関を孫策さんに譲りたか
つたんだが、仕方あるまい。

「問題はどうかやって？水関・虎牢関両方を落とすかですね……」

「だったら、うちの思春と明命に手伝わせる？中に入って門を開か
せれば、簡単よ」

「だとしたら虎牢関に関しては大丈夫よ。翡翠？」

「……………ここにいます」

「徐晃、自己紹介を」

「……徐晃……よろしく」

「え、えっと……」

えらく口数の少ない子だねえ。うちの恋とどっこいじゃねえか？

「見ての通り話すのが苦手な子だけれど、優秀な子よ。私達はこの子に虎牢関の中に入って、工作をしてもらおう」

「……頑張る」

「んじゃ、？水関は明日落してもらおう事として、虎牢関は……四日目に落してもらいたいんだが、それでいいか？」

「門突破はどのようにする？」

「それは劉備ちゃん達の、門への突撃に合わせる事にしよう。周泰ちゃん、徐晃ちゃん、よろしく頼むよ？」

「はい！」

「……ねえ李通。この戦が終わったら、貴方私の元に来る気は無い？」

「華琳様!!?」

なんとというヘッドハンティング。ていうか、アンタの言葉でここの空気が一気に氷点下になったんだが、どうしてくれる？ これ俺の返答次第で、協力がパーになるんじゃないか？

「抜け駆けは見過ごせないわね、曹操？ 李通？もちろん私達のとこにだって来ていいのよ？」

「李通さん、私達と一緒にこの大陸を平和にしていきませんか？」

選り取り見取り？両手に花？ハハハ、この雰囲気合つ言葉はこれ一つだけさ。

一 触 即 発

「雪蓮、お前はこの話を無かつた事にしたいのか？李通も困ってるじゃないか」

「も、分かつてるわよ。ただの意思表示よ」

「え、そうだったんですか！？」

どうやら孫策も曹操も、いつでもオツケーですよ！を俺に教えときたかつたらしい。劉備ちゃんの本気で、ここで俺がどこかに付くのかと思つたらしい。まあ、俺もだけどな。

「そう言えば李通、お前許緒と典章の二人を覚えてるか？」

「勿論だとも。二人とも元気にしてるかい？」

「ああ。それに、二人ともお前に会えるのを楽しみにしてたぞ」

「縁が有つたら会えるだろうさ。そっか……二人とも元気にしてる

か。どうだ、二人は強くなってるか？」

それに答えてくれたのは、夏侯淵の姉、夏侯惇だった。

「無論だ。なにせ、いつも私が鍛錬してやってるのだからな！」

「そいつはどうも。みっちり鍛えといてやってくれ。さて、そろそろ俺は退散するでしょうかね。明日はよろしく頼むよ、劉備ちゃん」

「李通さん、あの、私の事は桃香って呼んでもらえませんか？」

「それは真名だろ？いいのか？」

「はい！」

「じゃあ私も預けようかしら。李通、私の真名は雪蓮よ。改めてよろしくね」

劉備ちゃん……いや、桃香ちゃんを皮切りに続々と真名を教えるもらった。約一名だけ、嫌な顔を露骨に出し、俺を睨み殺さんとはかに睨んでいたけど。

「……………」

「どづしました、思春さん？」

「…なぜ私だけさん付けで敬語なんだ？」

「いや、何故って…」

「……………」

「ああ…と……………」

「……………」

「し、思春？」

「……………」

ち、違うだと！？他の呼び方…………他の…まさか…………

「思春ちゃん？」

「！？……………」ガスッ！

これも違う！？痛い痛い！脛は本当に痛いから！

「ふん。き、気をつけて帰るんだな……………」

別に訂正されなかったって事は、アレで良かったのか？

てか、気をつける前に俺に危害が加えられたんですが。

なんか釈然としなかったので、もう一回思春ちゃんと呼んでみた。

「……………」プイッ

可愛いなあこの子。

「こちら李通、孫策陣営に潜入した」(後書き)

最近更新速度が遅くなってきてる気がする…でも、明日からは夏休みなので、少しは早くなると思います。課題？そんなもん知ったことじゃねえ！！

？水関の戦い　↓下↓

↓？水関防衛最終日↓

「さて、今日が防衛最終日な訳ですが……」

「おい柊、いつになったら奴等に攻め込むのだ!？」

「せやなあ、うちも暴れたいなあ」

華雄の突撃症候群がピークを迎えました。しかも霞まで軽く感染してるし……

「今は袁術の軍が攻めてるから、あいつらが下がり始めたら攻撃開始と言う事で」

「しかし、柊は一人で大丈夫なのか？お前の部隊は、昨日の内に虎牢関に引き上げさせたのだから？」

実は俺の部隊は夜の内に、虎牢関まで引き上げさせてあるのだ。流石にデカイ龔牙を持たせて撤退となると、速度がかなり落ちるからねえ。その時ついでに夕里ちゃんも連れて行かせたかったんだが、

「お兄ちゃんが一緒に居てくれれば大丈夫なんですけど、まだ……その、慣れていないので……」

との事で、俺達と一緒に？水関で撤退準備中。にしても、袁術も袁紹も戦い方は変わらんから楽でいいねえ。まあ張勳が働けば、かなり変わるんだろうが……

「うはは、もっと攻め込むのじゃあ！」

「流石です、お嬢様。攻城戦の基本も守らず、ただ攻め立てるだけなんて、よ！この単純娘！」

「う？…うはは、そうであるう？そうであるう！」

「働く気ゼロかよ」

「どうしたのだ、柊？」

「いや何でもない。それより、隠れてないで出てきてくれないか、明命ちゃん？」

「はうあ！また見つかってしまいました……」

うん、君は見えなかったんだけどね。君が戯れていた猫の尻尾が丸見えだったのだよ。

「紹介しよう、今回俺達に協力してくれる孫策軍の」

「周泰と言つです！よろしくお願いします！」

「うちは張遼や。よろしく頼むで」

「私は華雄だ。今回は頼んだぞ」

ん…それにしても下がる気配が無いな。いつその事、もう門開けて攻撃始めちおうかな…。

こらその霞。明命ちゃんで遊ぶんじゃない。窒息しかけてるから、周泰死亡、死因は窒息死、凶器は胸！笑えん展開だぞ？

「いや、なんか周泰ちゃん猫っぽくてなあ　つつい構いたくなるんや」

「猫っぽいと言えば霞もだろうが。猫じゃらしで遊んでやるうか？」

猫じゃらしで遊ぶ霞……うん、ありだな。

「それにしても、一向に袁術軍が下がる様子が無いぞ。どうするのだ？」

「……仕方ない、こつちから仕掛けるとしよう。霞、華雄！準備は良いな！？」

「「おう！！」」

「周泰ちゃんは俺達が出て行ったら門を閉めてくれ。袁術軍を下がらせたなら、俺達は戻る。んで、入れ替わりで桃香ちゃん達が出てくる筈だから、その時門の門を外してくれ」

「分かりましたのです！皆さん、お気をつけて！」

「お兄ちゃん……」

心配そうな顔で俺を見る夕里ちゃん。まったく、

「そんな心配そうな顔をすんなよ夕里ちゃん。大丈夫、俺はちゃんと帰ってくるから」

「でもでも、部隊の人が誰も居ないんじゃない……」

「逆だ。俺の戦い方だと、むしろ部隊の連中は邪魔になっちまうんだよ。だから、俺は一人の方が良いって訳」

竜殺しを分回しながら戦うのが基本スタイルだからな俺。さて…

「黒天！！」

名前を呼べば飛んで来てくれる、我が愛馬黒天。久方ぶりだから、思いっきり暴れるとしようか。

「じゃ行ってくる。俺達が戻ったら、すぐに撤退するからね」

夕里ちゃんの頭を撫でて、少しでも不安が無くなる様に努める。虎牢関に向かう時は、黒天に乗せて一緒に帰ろうかね。

「開門！！これよりうって出るぞ！！」

門から出た後、華雄の部隊は右に、霞の部隊は左に向かっていった。残る場所は真ん中だけ。三人一つで暴れまわった方がいいんじゃないかと思われるだろうが、霞の部隊と俺の黒天に、華雄の部隊が付いていける訳も無く。また、俺の傍にいと誤って被害を食らう可能性があるので、結果、三人別々という事になった。

「さあて、一騎駆けは孫権の時以来か。派手に行くぞ、黒天」

「ブルルウ……」

手に竜殺しを持ち、目の前の広がる銀色の鎧を着た兵士達だけでなく、この戦場にいる全ての者達に聞こえるように告げる。

「この戦場に居る全ての者達に告げる！！我が名は李通！！よく覚えておけ！これから貴様らを黄泉路に送り出す者の名だ！！」

そして俺は駆ける。敵陣の中突っ込み、竜殺しを振り回す。切られた者は即死、振った剣の風圧で飛ばされた者達もただでは済まないだろう。

「どうしたどうした！！俺は一人だぞ！止めて見せろ！！」

だが、それは無理な話だろう。左右からは華雄と霞が、そして中央からは俺が攻め込み、袁術軍は混乱の極みに達していると言っても良い。途中で黒天の足を切ろうとした奴もいたが、そいつ等は悉く黒天に踏みつぶされていった。

ジャーンジャーン！！！！

しばらく動き回っていると、袁術軍が撤退を知らせる合図を鳴らした。左右で動いていた二人も？水関へと引き返して行った。さて……

「桃香ちゃん達が攻めて来やすいように、真ん中に穴を開けないとか……」

俺は門の前で黒天から降り、竜殺しを上段に構え気を込めて行く。後で霞から聞いた話だが、この時俺の周りが歪んで見えたそうだ。

「飛んでけえ!!!!!!!!!!」

ゴオオオオオオオオ!!!!!!!!!!

竜殺しを振り下ろすと、先程まで兵士達を吹き飛ばしていた風とは比べ物にならない程の、暴風が吹き荒れた。暴風はそのまま袁術軍に向かっていき、その結果、袁術軍の中央にはポツカリと大きな通り道が出来ていた。

「桃香ちゃん達は……うん向かって来てるな。んじゃ、とつとと撤退するとしますか」

後は明命ちゃんに任せるとしよう。二人も撤退しちまってるみたいだし、俺は夕里ちゃんを迎えに行くとしますか。

「お兄ちゃん!!」

「只今、夕里ちゃん。ちゃんと無事だっただろ？」

「はい……グスッ……」

慰めるのは虎牢関に向かう途中でやるとして

「じゃあ明命ちゃん、後は頼んだよ」

「はい、お任せ下さいなのです!」

その後、劉備軍の突撃により？水関の門は突破され、制圧した劉備軍の名は連合軍の中で大きなものとなっていった。

「七乃、どういう事なのじゃ！せつかく妾達が攻めておったのに、劉備達が？水関を落としてしまったではないか！！」

「でも、あのままあそこに居たら、あの李通っていうこわい人に殺されちゃったたかもしませんよ？」

「うぐぐ……ええい！次じゃ！次の虎牢関で汚名挽回してやるのじゃ！！」

「さっすがお嬢様 都合の悪い事を見ない所か、お約束までやってくれるなんて」

「うはは〜 七乃、蜂蜜水を持つてくるのじゃ！次こそは眼にももの見せてやるのじゃ〜」

「はいはい」

（う〜ん、あそこまで力が有るにも関わらず、今まで攻めて来なかったという事は、董卓軍に勝つ気は無い。まあここで勝つてしまえば、諸侯の恨みをかって董卓が危なくなっちゃいますからねえ。と言う事は、負けてかつ董卓が生き残るには……ふむふむ、どうやら連合の中に董卓と繋がっている人達が居るみたいですねえ。可能性で言えば……劉備辺りが怪しいですねえ）

「七乃〜！蜂蜜水はどうしたのじゃ〜！」

「はい、今持ってきていきますよ〜」

（ま、そんな事はどうでもいいんですけどね ああ、それにしても、今日もお嬢様は可愛いなあ）

何気に劉備軍にとってはかなりの危機だったのだが、気付いたのが張勳だった為それが袁紹の耳に届く事は無く、劉備軍謀反の疑いは張勳の大きな胸の中で次第に消えていった。

袁術軍 side out

?水関の戦い 〓下〓 (後書き)

と言う訳で?水関編終了です。

PV50万達成しました!!ありがとうございます^^

始めた当初は、まさかここまで行くとは夢にも思っていませんでしたが、これも皆さんのお陰です!

さて、50万達成記念の話ですが…リクエストが来ないorz
もう少し待ってみて、誰からも無かったら自分でクジを作って、対象を決めたいと思います。

では、次話でお会いしましょうノシ

二人の理由

「確かに、声をかけなかった俺も悪いとは思う。でもよ……」

俺の目の前には恥ずかしさで顔を赤くしている月ちゃんと、羞恥＋怒りで顔を赤くしている詠がいる。

「呼ばれて入った先の部屋で着替えてるとは思わねえよ……」

「うつさい！この変態ノゾキ魔が！！」

「へうほう……」

？水関から戻った後、俺は侍女の人から詠が呼んでいると伝えられ、詠の部屋に向かった。そして、扉を開けた先にいたのは、黒い下着に身を包んだ詠と、白いフリルの様なもの付けた下着を身に纏った月ちゃんだった。

「うんまあなんだ、二人ともよく似合ってたぞ」

「あ、有難うございます……／＼／＼／」

「ふん！／＼／＼／」

「さて、このまま二人を弄るのも楽しいが、俺が呼ばれた理由は例の計画に関する事だな？」

月ちゃんと詠は咳払いをし、真剣な表情になる。

「その前に報告を一つ。協力者の劉備・孫策に加え、曹操に協力を取り付けといた」

「は？」

真面目な顔から一変、呆けた顔をする詠と驚いた顔をする月ちゃん。どこにそんな驚くところがあったんだ？

「アンタ、よくあの曹操を説得出来たわね…」

「説得…はしてないな。もし董卓を処刑したら、洛陽出身の奴等がどんな事を言うかな〜って言ってみただけだ」

「脅した…あの曹操を…」

「んで、詠は俺に何を話すつもりだったんだ？」

「曹操への対策を立てたかったんだけど、もうその必要も無いみたいね」

詠も曹操をどうするか考えていたらしい。でも、俺が曹操に話をつけたから憂いが無くなったそうだ。

「そんじゃ、後はどうやって虎牢関を防衛するかだな」

「守る日数は四日。その間、私達は虎牢関に立て籠もろうと考えるのだけねど？」

「いや、初日と四日目は攻めようと思っ」

「え？どうしてですか？」

「理由三つ。一つはこの戦いで袁紹の軍は殆ど無傷に近いから。二つ目は、曹操に虎牢関を落してもらわないといけない。最後は、……まあ守りだけってのは、うちの奴等には酷だから」

霞や恋ちゃん、多分華雄もなんとか我慢出来るだろうけど、それでも四日間守りっぱなしってのは結構忍耐力がいる。

「でもなんで初日と四日目なのよ？それだったら、二日続けて攻めたほうが……」

「多分初日は袁紹と袁術が出てくるからだ。？水関を劉備が落として、虎牢関を別の誰かに落とされたら、メンツが丸潰れだからな。だから初日は出て、両軍に壊滅的な被害を与えようと思う。四日目に攻めるのは、曹操に虎牢関を落とす機会をやる為だ」

「なるほどね。ああそうだ、今回はアンタの部隊は出て欲しくないんだけど……」

「なぜだ？俺の部隊が出れば防衛も簡単だろ？」

「確かにね。でも、完璧な防衛をされれば連合側の士気が下がるわ。もしそうなれば、相手は攻めるのを躊躇する事になるかもしれないの」

そうか、俺達はあくまで連合を勝たせないといけない。その為には

「ある程度攻め続けてもらうしかない……か、了解した。だが、襲牙を使わなきゃいいんだろ？俺の部隊は弓や石を使って防衛に参加さ

せるぞ?」

「そつ……ね。うん。じゃあお願い」

「あいよ。俺も色々と準備があるから、これで失礼させてもらつよ」
「ええ」

詠 side

柊が部屋から出て行った。曹操に協力を取り付けた……か。

「ありがとね……」

「嬉しそうだね、詠ちゃん?」

「な!! ななななに言ってるの月! なんで僕が、アイツの事で嬉しそつになんて!」

「ふふふ そつか、詠ちゃんは柊さんの事で嬉しそつにしてたんだ」

「ゆ〜え〜……」

「ごめんね? でも詠ちゃん、本当に嬉しそつな顔してたから」

「だ、だってしょうがないじゃない……」

アイツは、僕達を守る為に敵陣の中に潜り込んで、劉備と孫策に協

「その……見られちゃったけど、その後似合ってるって言ってくれた時、詠ちゃん本当は嬉しかったんでしょ？」

駄目だ、やっぱり月に隠し事は出来ない。うう…

「その、嬉しかった……です」

「やっぱり。詠ちゃんはなんで好きになったの？」

「初めて会った時、アイツの馬に乗った時なんか凄く安心できて、後はやっぱり……僕達を助けるって言うてくれたからかな。軍師の僕が言っちゃ駄目なんだけど、ああ大丈夫だ、って思っちゃって…ゆ、月はなんで好きになったの？／＼／＼／＼」

「い、言わなきゃ駄目？」

「ダメ」

僕だって恥ずかしかったんだからね？

「へうう。え、えつとね、前に悪い夢を見ちゃったの」

「悪い夢？」

「うん。私が軟禁されてた時の夢。それで怖くなっちゃって、眠れなかったの。詠ちゃんの部屋に行ったんだけど、詠ちゃん、まだお仕事してて大変そうだったから……」

「待って月、もしかして……」

「その……柗さんの部屋に行って、一緒に寝て貰ったの。その後……何回も一緒に……」

あ、あの月が男の部屋に行って一緒に寝る……？あ、アハハハ……

「う、嘘だよな？嘘だって言っつて、月？」

「その、怖くない様になって頭を撫でて貰ったり、だ、抱きしめてもらったり……」

……

「？ 詠ちゃんどこ行くの？」

「ダイジョウブ、チョットデカケルダケダカラ……」

柗、確かに僕はアンタの事が好き。うん、間違いない。けどね……それと同じ位月の事も好きなの。だから……

詠 side out

「うん、後は各部隊に確認をさせれば終わりだな。しかし、結局夜になっちまったな」

詠がいればもつと早く終わるはずだったんだが、こんな時にどこいったんだアイツ。

「ふあゝあ……まあいいか。とつと寝よう」

「柊……」

「詠？どこ行ってたんだ、探したんだぞ？」

「アンタ月と一緒に寝たってホント？」

「あ、ああ。怖い夢をみたから、一緒に寝て欲しいって……それがどうしたんだ？」

「ふうん……そうなんだ。僕の月と……一緒に……ねえ」

あれ詠さん？なんかどす黒いオーラが出てますよ？
どうして拳を握って振り上げてるんですか？なんで……

笑ってるのに怖いんですか？

「ちょっと、もっとそっち詰めなさいよ」

「ん、おお。スマンスマン」

詠から10連COMBをくらった後、なぜか俺と詠は一緒に寝台で寝る事になった。何故だ？

「なあ。今更だけど、なんで俺と一緒に寝てるんだ？」

「もし月が来ても、アンタが月を襲わない様に見張るためよ」

「それ、お前が月ちゃんと一緒に寝ればいいんじゃないか？」

「う、うっさい！」

怒られた。何故だ？

「一緒に寝たいからなんて…言えるわけないでしょ……（ボソリ）」

「………だったら素直にそう言ってくれ」

「き、聞こえてたの!？」

「耳は良い方なんでね、他に…ご要望は？」

「べ、別に無いわよ」

「そかそか。じゃ、明日も早い。とつとと寝るぞ?」

そう言っただけ目を閉じようとしたら、詠がこっちをチラチラと見ていたので、もう少しだけ起きる事にした。

「ねえ……」

「ん?」

「手……握ってくれる?」

「よしきた」「ギョッ」

虎牢関防衛戦 ㄱ

「おはようさんって……どうしたん柎、その顔？」

「この世は理不尽な事ばかりっていう証明だ……痛たた……。それより、準備は出来てるのか？」

「勿論や。いつでも出れるで」

「俺達は予定通り、初日と四日目に攻める。無いとは思うが、袁紹が出てこなかったら二日目に変更だからな？」

「せやけど、曹操に落としてもらっんやったら、四日目だけ攻めればええんとちやう？」

「そうなんだけど、袁紹の軍って今殆ど無傷なんだよ。流石にそれはこの先不味いから、出来るだけ被害を与えよう、ってな」

霞の言う通り四日目だけ攻めれば、こちらの被害も少なくなる。けどそうすると、無傷の袁紹軍と疲弊した諸侯の軍。どっちが有利かは目に見えて分かる。この先の戦を袁紹のワンマンゲームにしない為には、ここで損害を大きくさせる必要があるわけで。

「りょーかいや。ほんなら、華雄と恋にも伝えとくわ」

「助かる」

そんな事を話したのはいつだったか、今は虎牢関防衛の初日。うん、いつも通りのご都合主義だな。某料理番組の様に。

「でも三分クッキングでさあ、絶対三分じゃないよな。てか、用意した物がこちらですって、どんだけご都合なんだよ」

「おい柊、どうしたのだ？」

「や、なんでもない。向こうは予定通り、袁紹と袁術が先鋒をやるみたいだな」

「そのようだな。今回も前回と同じ様に、左翼右翼中央突破をするのか？」

そう言う華雄の顔は、とても輝いていた。玩具を与えられた子供：
と言える分かるだろうか。大体そんな感じの顔だ。大丈夫、今回は
もっと楽しいのをやるから。

「その通りだが、今回は兵を引き連れず、俺、華雄、霞、恋ちゃん
の四人による四騎駆けをしたいと思うんだが、どうだ？」

「賛成だ」

「賛成やな」

「……………面白そう」

皆ノリが良くて助かる。そうと決まれば、早速布陣を……

「反対よー！」

「反対なのです！」

「は、反対です！」

決めようとした時、上がった反対は軍師勢から。詠と音々は怒りを、夕里ちゃんは心配な表情で反対の声を上げていた。

「アンタ達分かってんの！？7万相手に四人だけって、死にに行くようなもんよ！！」

「そうなのです！そんな所に恋殿を向かわせる訳には行かないのです！」

「有難う詠。口調はキツイが、俺達の事を心配してくれていると分かる。それに対して音々、お前はこんな時でも恋ちゃん第一なんだな」

「当然なのです！」

威張んなし。

「まあ心配すんな。曹操や孫策が相手ならまだしも、袁紹と袁術が相手だ。それに……」

「……それに？」

「神速の張遼、猛将華雄、飛將軍呂布、んで？水関で暴れた俺。この四人が固まって襲いかかってくるんだぞ？それをまともに相手しようなんて奴が、両軍にいるとは思えん。後はまあ、部隊を出して戦うよりも被害が少なくなる。自分達の戦いに集中してればいいかな」

「確かに奇襲にはなるわね。でも、それで誰か討ち取られたらどうするの？」

「それはそいつの天命だ。何より、こんなところで死ぬ奴がこの先生に残れるとも思わねえからな。ま、誰も死なせる訳ないけどな」

「であれば、中央右にお兄ちゃん、中央左恋さん、左翼に華雄さん、右翼に霞さんの配置で突撃を仕掛ければ、勝算はあると思います」

「ちよつと夕里！……はあ、分かったわよ。ただし、危なくなったらすぐに戻ってきなさい。いいわね？」

了解。しかし、固まって動くんだったら竜殺しは使えんから、蒼天と晴嵐でいくか。何気に馬上でこの二本使うのって初めてだったり。

「そんじゃ、いつちよ行きますか！！」

連合軍 side

「諸葛亮よ、お前が相手方にいたとしたら、どのように動く？」

「そうですね……四日間守ればいいというのであれば、三日間は防衛、四日目だけ攻撃を仕掛け曹操さん達に虎牢関制圧の機会を与えらると思います」

「私と同じか……」

「気になるのは袁紹軍ですね。この戦で殆ど無傷……この連合の後攻

めてこられたら、太刀打ち出来るかどうか……」

「確かに。そうになると、四日目にどうやって奴等に痛手を与えるかが重要になってくるな……」

「いえ、その必要はないかと」

後ろから聞こえてきたのんびりした声の正体は陸遜だった。陸遜の視線の先を見てみると、馬に乗った四人の武将が門から出てくるのが見えた。

「ちよっとちよっと、柊達一体なにやるつもりよ？」

「もしかして、四人で袁紹さん達に突撃をするんじゃないですか？」

「流石にそれは無いと……」ごめん桃香、ありそうだね。先頭にいるの柊だし」

「柊さんですからね……」

「桃香様、柊さんが口上するみたいです……」

「袁紹よ！！帝に弓引く逆賊共よ！最早何も言わん！貴様らに抗う事の出来ん武というものを見せてくれよう！！我等の四騎駆け、止められるなら止めてみる……！！」

「四騎駆け……本当にやるんだ」

「柊さんですから」

色々とおかしな方向に評価された李通だった。そんな事を本人は知る由もなく、作戦通り袁紹の軍に攻撃を開始した。

連合軍 side out

「どけどけどけえ！！死にたい者から前に出るお！！！」

どうもこちら李通です。今袁紹軍の真っ只中にいます。はつきり言
つて、やる事がない。殆どの敵は恋ちゃんがなぎ払ってくれるし、
左右にいる華雄と霞が、討ち漏らした敵を撃破する。俺は向かう方
向だけ指示する。

うん、こんな所で言うのもなんだが、凄い暇だ。

「……………ひーらぎ」

「どした恋ちゃん？」

「……………疲れた」ブォン！！

「……………交代するか？」

「（コクリ）」「ヒュッ！！」

「じゃあ進む方向だけ指示してくれ。ただし、金色と銀色の兵がい
る所だけな？」

「…分かった」

「おし」

という訳で選手交代。恋ちゃんは俺達の後ろに下がった。さて、一刃にはしなくていいかな、馬上で振り回すのはやり辛そうだ。ちなみに今の配置は

柊

華 霞

恋

という形。

初めは夕里ちゃんが示してくれた配置で動いてたんだが、長物を扱うのが三人もいるので、間隔が空けやすいこの布陣に変わった。

「どうした！貴様らは四人程度も止めらねえのか！！流石は袁紹の軍だなあ！！！！」

「結構酷い事言っなあ、自分。まあ事実やからしゃあないけど」

「仕方あるまい、あの袁紹の軍だ」

「……………しよーがない？」

「……………ちくしよおおおおおおお！！！！……………」

この会話が聞こえたのか、袁紹の兵達は我武者羅になって突っ込んできた。

「まったく、そんなに突っ込んできても止められる訳ないだろうが……」

俺は双剣を持ち、向かってくる兵の首を飛ばしていった。竜殺しと違って多くの敵を敵を倒す事は出来ないが、その分多様性に優れる。飛んでくる矢を落としながら敵の相手をしたり、両側の敵を同時に相手に出来るので、自分の身を守れたり、色々と便利なのだ。

「そろそろそろそろそろそろそろそろあ……！！！！」

「……次、左」

「「了解！」「」」

縦横無尽に駆け回る俺達。袁紹・袁術の兵は最初こそかかってきたが、俺達が手に負えないと分かると、我先にと逃げ出していた。お陰で大した傷を負う事無く、両軍に大被害を与える事が出来た。途中で顔良等に会うかと思っただが、恋ちゃんが兵だけに狙いを定めて俺達を動かしていたらしい。

「さて、そろそろ戻るぞ」

「なに、もう戻るのか？」

「言ったやろ。ここで袁紹らを壊滅させたら、連合自体が撤退してしまうんや」

「……おお、そう言えばそうだったな。よし、では戻るとしよう」

来た道を戻り、悠々と虎牢関に入る。夕里ちゃんからの報告では、7万いた袁紹の軍、4万いた袁術の軍は、4万と2万5000程に減ったらしい。

トータルで4万5000、一人頭約11250人の兵を倒した計算になる。

「……………僕自身信じられないんだけど。あの大軍に飛び込んで、殆ど無傷なんて」

「途中から逃げ出してたからな、相手。案外楽だった」

「……………恋も、頑張った」

「お疲れ様、恋ちゃん。今日はゆっくり休んでくれ」

「……………(ジー)」

「?どうした?」

「……………(ジー)」

「……………ああ、お腹減ったのか?」

「……………(フルフル)」

「?????」

「……………頭」

「「頭?」

「頭、撫でて……」

あらやだ、何この子可愛い。

「ハハハ、了解了解」ワシワシ

「／／／／／」

「終、なにおもしろい事やってんねん」

「良い所に来たな霞、ちよっと来い」

「ん？なんやなんや？」スタスタスタ

俺は右手で恋ちゃんを撫でている。つまり左手が空いてるのだ。よ
つて……

「霞もお疲れ様だ」ナデリナデリ

「なあ！／／／／／」

霞も撫でる事にした。おお、サラサラのスベスベだ。

「……霞、嬉しそう」

「嬉しくないっ！／／／／／」

「イヤなら止めるぞ？」

「んんん、せつかくやから、もじちつと撫でて」

「あいよ」「ナデナデ」

「なあ詠よ」

「何よ?」

「ここは戦場で合っているよな?」

「合ってるわよ。とりあえず、元凶をどうにかしましょう」

「どうするのだ?」

「そろそろ来るわよ」

その言葉が終るや否や、あたりに響き渡る陳宮キックの声と、何かが碎ける様な音。

元凶はそのまますっ飛ばされ、地面とキスをしていた。

虎牢関防衛戦 上下 (後書き)

おそらく番外編は、反董卓連合が終わってから書くと思います

虎牢関防衛戦 中

虎牢関防衛二日目

「……………眠い」

「これが後二日か。？水関と同じく不眠不休の攻め続けだから、こつちも寝るに寝られん」

「まああん時と比べて、武将の数が多いから楽っちゃあ楽なんやけど…」

「まったく。これしきの事で音を上げるとはな」

お前はよく眠れたようだな華雄。？水関でもお前は何も変わらず寝ていたし。

「当然だ。武人たるもの、どこでも寝れる様でなくてはな」

「今はあなたの図太さが羨ましいわ……………」

「とりあえず今日は俺の担当だから、お前達は少しでも良いから寝ておけ」

「そうさせてもらつわ……………」

「……………ZZZ」

「恋殿、ここで寝てはダメですよー！」

（虎牢関防衛三日目）

「ところで、お前達はこの戦が終わったらどうするのだ？」

俺達が大広間で軍議をしてたら、突然華雄がこんな事を聞いてきた。今日の防衛担当は李儒と言う人がやっている為、軍の中枢にいる面々は全員集まっていた。

「因みに私は旅に出てみようと思う」

「うちはどないしょ。まあ、どっかに仕官するうちゅう手もあるけどな」

「……………その時に決める」

「恋殿が行く所であれば、音々もついていきますぞ！」

「私もお兄ちゃんに付いていこうと思います……………。そう言えば、お兄ちゃんはどうするんですか？」

俺はどうすっかなあ。いや、季衣や流琉に会いたくない訳じゃないんだけど、

「義妹がいるから曹操のどこに行きます……………って、な〜んか情けねえよな」

「……………え？」「……………」

どうしたお前ら。いきなりこっち向かれると、結構ビビるんだが？

「柊って、妹おったん！？しかも曹操のところに!？」

「お、おお。妹って言っても、その前に義が付くけどな。ちなみに名前は典韋と許緒、將軍をやってるらしい」

「私だけだと思ってたのに……」

「しかし、だったらどうしてそっちに行かなかったのですか？」

「んゝ…旅に出る時、次会う時までには強くなると言われてな。だからギリギリまで引き延ばしてたんだ。ま、どこに行くかはその時の気分で決めるよ」

「お前……それで良いのか？」

「いいんだよ。それより華雄、旅に出るんだったら、江夏の村に居る樊霊つて人を訪ねな。俺からの言われたって言えば、力になってくれるから」

「随分親しいのね。どんな人なの？」

「頭の中が杏仁豆腐で出来てるパープー母だ。ただし、こと武に関しては今の俺でも勝てる気がしない」

俺の双剣の連撃を剣一つで捌ききるとか、無茶苦茶にも程があんだろ。

つか、お袋様に勝てる人を見てみたい。

「柊が敵わん相手が、実の母……ふむ、面白そうだな」

「会ったらよろしく伝えといてくれ。さて……そろそろ明日の事も話すか、翡翠？」

俺達の真上を見ながら、そこにいるであろう人物に降りてこいと促す。すると観念したのか、翡翠……徐晃が出てきた。

「……気づいてた？」

「当然。寝てないから、神経が鋭敏になってな」

「……なあ柊、柊って苦手な事なにかあるん？」

苦手な事…苦手な事ねえ……

「そうだな……ん…俺にも分からん。旅してると、全部自分でやらないといけないしな。それより明日の話だろ？」

「そ、そうですね…(うう、お兄ちゃん普通に料理も出来るし、裁縫も出来るし……!)」

「……門、開ける」

「問題はいつ開けるかなのです。ここも？水関と同じようにしたら、流石に曹操が疑われるかもしれないのです」

「徐晃さん、明日は誰が攻めるか分かりますか？」

「……劉備、華琳…曹操」

「劉備さんと曹操さん。でしたら何とかなるかもしれません」

お、夕里ちゃんが何か閃いたっぽいな。

「どっつするんだ?」

「はい。まず初日と同じく皆さんに突撃を仕掛けて貰います。ですが、初日と違ってバラバラに仕掛け、その隙に曹操さんに落とすつもり、という物なんです…」

「向こうに俺達を引きつけてもらうのか。俺は良いと思うぜ?」

「むう…悪くないのです」

「では明日はその様に動けばいいのだな?」

「せやな。二つの軍なんやし2:2で行くとして、後は誰がどっちに行くかやな」

「んじゃ、公平にくじ引きと行きますか。…………おし出来た、この棒の先が赤い奴が曹操、違う奴が劉備な。一斉ので引くぞ」

「うむ」

「分かった」

「…ん」

「じゃ、せーの…………っ!」

その結果

劉備軍：華雄・恋ちゃん
曹操軍：俺・霞

「……………柎」

「ん？どうした翡翠」

「……………来る？」

「そっちに行くかって事か？」

「……………そう」

「行くところ…とは思ってる」

「……………良かった…」

「何がだ？」

「！？（ブンブンブン）」

ショートボブの髪を揺らして首を振る翡翠。うん、話してみて分かった。この子凄い面白い

「俺がそっちに行くかもって、嬉しかったのか？」

「！……！！（ブンブンブンブンブンブン）」

「じゃあ何が良かったんだ？」

「……何でも……ない」

「嘘」

「……嘘 違う」

「翡翠、話す時は相手の眼を見て話そうな」

「（チラツ……）（プイ）」

「アツハツハ！可愛いなあ、翡翠は」

「//////////」

顔を真っ赤にさせ、武器である刃旋棍を構え、俺に向かってきた。
ん、向かってきた？

「//////////」

「ま、待て翡翠！危ない、危ないからしまえそれ！おい、服が切
れてるー！！」

「づうづうづう！！//////////」

「平和やなあ……………」

「霞さん、一応外は戦場なんですけど……………」

「せやなあ……………」

「あの、どうして私を撫でてるんですか？」

「嫌？」

「嫌……………ではないです」

「ならええやんか」

「ふわわ……………／／／／」

「ん〜、ええ匂いやなあ夕里は」

「ふえ！あ、あのおの！」

「ん……………」

「ふわわ……………」

戦があってもいつもと変わらない董卓陣営でしたとさ。
ちなみにこの後、李通は混ざってきた呂布と徐晃にもみくちゃにされた揚句、陳宮キックをくらいブラックアウト。張遼は徐庶を弄っ

て遊んでましたよね。

虎牢関防衛戦 中々（後書き）

更新速度がどんどん落ちてるような気がする…これが夏休みパワーか…

ちなみに旋棍とはトンファアの事です。持ち手の外側に刃が付いてるトンファアの様なものだと思って下さい。

虎牢関防衛戦 下

華琳 side

四日目。柊が言つには今日で虎牢関を落とし、董卓と賈馱の二人を劉備に預けると言つただけれど。

「おそろく出来るのでしようね…」

「華琳様？」

「なんでも無いわ。それより、どうやって張遼を捕えるかは決まったの？」

「はい。張遼の強みは、兵との連携とその早さにあります。よって張遼を包囲し、兵を人質にとつた上で一騎打ちをするのが良いかと」

「一人を取るのに、兵を人質にしると言つのか？」

「張遼にはそれだけの価値があるのよ。張遼に勝てそうな武將は、今のところアンタだけなんだから、しっかりやりなさいよ？」

「お前に言われるまでも無い！華琳様の為、必ずや張遼を捕えてやるわ！」

確かに張遼の武とその兵。少々の汚名を被つてでも手に入れたい人物ではあるわ。

「……華琳」

「あら、戻って来てたのね翡翠」

「……バレた」

「もしかして、潜入してたのがバレたの？貴女が？」

「……柊に見つかった」

そう言えば孫策の所の周泰も、柊に見つけられたと言ってたわね。ふふふ……武に関しては文句なし。分からないのは知の方だけど…

「二手に、動く」

「劉備と私達の所に、二手に分かれて攻めてくるのね。その隙に虎牢関を落とせと。ねえ、桂花。あの男を捕えるには、どうすればいい？」

「華琳様！まさかアイツを加えるおつもりですか！？」

「ええそうよ」

まったく。男が加わるっただけで顔を青くするなんて、桂花の男嫌いも筋金入りね。

そうね、文官としても使えるなら、桂花の補佐に付かせようかしら？

「それで？私の軍師は、どんな策を出してくれるのかしら？」

「ううう……。……ですが、武を示して恭順させると言うのは無理

でしょうし、あの男が何を求めているのかも分からないのでは、手の施しようがありません」

「……来る、言ってた」

「来るって、まさか柊が？」

「……」(コクリ)

こちらには季衣せいゐと流琉りゅうがいるのだから当然と言えば当然なのかしら……あら？

「随分嬉しそうな顔をしてるじゃない、翡翠？」

「っ！？(ブンブンブン)」

まさかあの翡翠が惚れるなんて。

「何だか面白くなってきたわね。」

さて、張遼は春蘭に任せるとして、柊は……秋蘭と凧に任せましょうか」

「わ、私ですか！？」

「ええ。聞く所によると、何やらお礼もしたいそうじゃない」

どうやら？水関で柊に何かしてもらったらしい。その礼がしたいと言つ事を小耳にはさんだのだ。

「よかったなあ〜凧。これで愛しのあの人に会える訳や」

「なっ！ち、違っ！」

「あゝ！凧ちゃん顔真つ赤にして、可愛いの〜」

「真桜！沙和！」

「貴様らしい加減にせんか！！今は軍議の最中だぞ！」

春蘭の喝で静かになる三人。それにしても……ふ、ふふふふ……
…翡翠だけでなく凧まで…私だってまだ手を出していないと言っ
に……

「加わったら、一度蹴り上げところかしら？」

「いえ、切り落とすのが一番かと！」

華琳 side out

ブルルッ！！

「何だ今、凄い寒気が……」

「大丈夫か、柊？」

「俺と俺の子孫に危機が迫った気がした。そんな事より作戦の確認
をするぞ？はい、まず霞から」

「えっと、まず割り当てられた軍に突撃を仕掛ける」

「次華雄」

「あえて敵陣深くまで行き曹操に攻撃の機会を与え、虎牢関を落とさせる」

「覚えてた事に少し驚き……スマン、謝るから武器を構えるな。次、恋ちゃん！」

「……………敵を倒す」

「……まあ自由行動だからそれでも大丈夫か」

突撃を仕掛けた後は自由行動。撤退するもよし、気になる武將にアタックを仕掛けるもよしだ。ちなみに俺は洛陽に戻る。理由はもちろん、月と詠を連れ出さないといけないから。

「そんじゃ行きますか？」

門から出た俺達は、予定通り二手に……………訂正、何故か恋ちゃんが俺に付いて来てしまったので、向かう方を教えてから二手になった。

んでもって霞は向こうの方で春蘭とぶつかり、俺の方には秋蘭と楽進ちゃんが来ていた。

「久しぶりだな、柊」

「じ、こんにちは」

「はい、こんにちは。なんだ、二人して俺を捕えに来たのか？」

「ふふ。ホントは私一人だったのだが、凧がお前に会いたかったそうだ」

「おや、楽進ちゃんが？なにか用でもあるのかい？」

「はい！あの時李通さんから教えてもらった事を、見て頂きたいのです！」

「教えた事……ああ、どうやって蹴りを出す云々の事か。という事はもしかして、あの後練習してたのか楽進ちゃん。」

「柊、まさかここでイヤとは言わんだらうな？」

「そんな無粋な事は言わねえよ。了解だ楽進ちゃん、それと俺の事は柊でいい。これから一緒に戦うんだからな」

「私の真名は凧と言います！よろしくお願いします！！」

真名を交換した後、俺達は構えをとる。剣を使おうとも思ったがやりたい事もあった為、徒手空拳で相手をする事にした。凧ちゃんが気を集中させ、力を溜めてるのが分かる。

「いきます！！やあああっ！！」

一気に近づき、ミドルを放つ凧ちゃん。そこから途切れる事無く、

回し蹴り、肘打ちからの裏拳。そして右のアップパーが迫った所で、
凧ちゃんの腕に手を添えてその方向を変える。

「よっ！」

「っ！まだ！」

そこから何度も虚と実を組み合わせ、拳と蹴りを俺に浴びせてくる。

しかし……その全てに俺は手を添える事で方向を変える。俺がやっ
てるのは化勁と呼ばれる、相手の攻撃を無効化する技である。

「化勁ですか……」

「そ。まだ拳相手にしか使えないけど、色んな武器相手にやるのが
目標だな。さて、次は俺から行くぞ！」

凧ちゃんから距離を取り、飛び蹴りをかます。そのまま回転して空
中で二撃三撃と続けて蹴りを放っていく。体勢が崩れた所で懐に入
り、掌底で身体を浮かせて右ハイ、左のバックキック、最後にかか
と落として地面に叩き落とした。

「ととつ、大丈夫か？凧ちゃん？」

「大……丈夫です……」

うん、地面にへたり込んでる状態で言っても説得力無いわな。とり
あえず手を貸してあげますか。

「ほら、立てるか？」

「すみません、あ、足に力が……」

「しょうがないな………よっと!」

「え、ええ!？ひ、柊さん!」

立ち上がれないとの事なので、抱っこしてあげる事にした。
やり方？お姫様だっこ以外に何をすれば良いんだ？

「お、降ろして下さい!!」ジタバタジタバタ

「おっとと、こら暴れるな。落として怪我したらどうするんだ」

「うう………／／／／／」

おや大人しくなった。取りあえず秋蘭に渡して、後は任せるとしよう。

「流石と言うべきかな。凧が手も足も出んとは」

「まだ俺の方が経験があるからな。それでも危ないところが幾つもあったから、経験を積みば一足飛びで強くなっていくよ」

「なるほど。良かったな凧、憧れの人からのお墨付きだぞ?」

「あ、有難うございます………／／／」

あらら、うつつ向いちゃったよ。

「じゃあ秋蘭、俺はこのまま洛陽に向かう。その後合流って形で良
いか？」

「ああ。これからよろしく頼むぞ、柇」

「こちらこそ」

ほんじゃ、二人を迎えに行きますかねえ。その前に夕里ちゃんを拾
って、部隊の連中は…まあ曹操がなんとかしてくれるだろ。

「行くぞ黒天！いざ洛陽に！！」

「ヒヒーン！！」

その後、華雄と恋ちゃんは戦場から離脱、霞は華琳に仕える事にな
った。

虎牢関は予定通り華琳が落とし、計画も残すは二人の脱出のみとな
った。

虎牢関防衛戦 〓下〓 (後書き)

いよいよ連合も大詰めとなりました。

番外編のリクエストもまだまだ募集してますので、どんどんご応募
ください！^^

反董卓連合・終幕

「ん〜、やっぱり月が淹れてくれるお茶は美味しいねえ」

「ありがとうございます。おかわりはどうですか？」

「勿論頂く」

あ〜…和むねえ。このまったりとした時間に飲むお茶、

「ア・ン・タ・は！この忙しい時になにくつろいでんのよ！〜」

「おお詠。お前も飲むか？」

殴られた。何故だ。

「半日もすれば連合軍が洛陽に着くつてのに、アンタは何油売ってんの！〜」

「油は撒き終わったところだろうに。」

城に居るのは俺とお前、月に夕里ちゃんだけ。後は頃合いを見て火を放てば全部終わりだ。

のんびりして何が悪い？」

「はい、詠ちゃん、夕里ちゃん」

「ありがとう、月ちゃん」

「月まで……そうだ、他の皆はどうしたの？」

「霞は曹操のところに。華雄と恋ちゃんは、途中で抜け出したから俺にも分かんらん」

凧ちゃんと手合わせしてたら、いつの間にか居なくなってた。

夕里ちゃんは俺に付いてくるらしいけど、何で友達のところ行かないのって聞いたたら

「負けられませんから！」

朱里ちゃんと雛里ちゃんにかね？頑張って切磋琢磨してくれ。兄は応援してるぞ。

む？あれは

「連合が来たみたいだな。距離にして約七里」

「見えたんですか、柊さん？」

目が良いもので。てか、普通に眼が良い人だったら見えるぞ？
なんたって太陽の光を反射してるから、あの金色の鎧で。

「三人は最上階に居てくれ。俺は下から火を点けてくる」

「ちょっと、どうやって脱出すんの？」

「俺が三人抱えて外に飛ぶ」

三人で約1・5人分の体重だからな。ぶっちゃけ余裕です。

「改めて思うけど、アンタってホント規格外よね……」

「褒めんなよ」

「褒めてないわよ!」

という訳で俺達in炎上中の城。

周りを見ると火火火、熱過ぎんぞ、某テニス選手の様に。

「「「やり過ぎ(です)(よ!)(です)」「」」

「正直すまんかった。まさかここまで勢いよく燃えるとは思わなかった」

「でも大丈夫なんでしょうか、こんな所から脱出するなんて……」

「無問題。詠は俺の背中に乗ってくれ。月と夕里ちゃんは両脇に抱えるから」

という訳で装備完了

頭：無し

胴：詠

右手：夕里

左手：月

脚：無し

効果：月の加護（HP自動回復）

詠の加護（LUC-20 IN

T+30) 夕里の加護(回避距離UP)

「袁紹はまっすぐこっちに向かっているな。桃香達は……あぁいたい
た」

ほんじゃま行きますか。

「おおおおお………しゃあああああ………!!!!」

外に飛び出して初めに感じたのは浮遊感。

そしてすぐさま襲いかかってくる………重力。

「「「きゃあああああ………!!!!」」」

「あ、着地どうしよう?」

飛び出したのは良いけど、着地をどうするか決めてなかった。

……まぁいいか。

ズドンッ!!

「あたたたた………足がジーンってなってる。お、いてえ」

「へううう………」

「ふわわわ………」

「………(ビクビク)」

「おーい、三人とも大丈夫か?」

三者三様で目を回してやがる。流石に10階相当の建物から飛び降りるのは、キツかったらしい。

「ふむ……取りあえず桃香達を探すとするか」

「柊さんって、人……ですよね？」

あの後桃香達はすぐに見つける事が出来た。で、あの火の中どうやって脱出したかを話したら、異句同音でこんな事を言われた。そっぴや夕里ちゃんは何処行っただ？

「向こうで朱里達と話しておりますよ。ところで、柊殿はこれからどうするおつもりで？」

「華琳の所に行くつもりだ。アソコには、俺の義妹達もいる事だしな」

「一緒に来てくれないのか？」

「行けないのだ」

そんなやり取りをしてたら、三人娘の話が終わった模様。夕里ちゃんが一緒に行けない事を話していたらしく、何故か朱里ちゃんと雛里ちゃんに応援までされていた。

「ああそっぴや桃香」

「なんですか？」

「これから上を目指すだろう君に助言を一つ。

夢を叶えたいなら力を示せ。

優しさと一緒に、厳しさを持つ事を忘れるな」

「優しさと厳しさ……」

俺がいうのはこんぐらいで良いかな。

後は、周りの奴が気付かせれば大丈夫………な筈。

「それじゃあ桃香、月と詠の事、よろしく頼む」

「あ、はい！任せて下さい」

夕里ちゃんを連れて去ろうとしたら、月と詠がこっちに向かってきた。

二人の話を聞くと、どうやらお別れの挨拶がしたいらしい。

「柊さん、何かから何まで本当にありがとうございます。何もお返しできないのが心苦しいですが……」

「別に何も要らんよ。強いて言うなら、毎日を幸せに生きてくれ」

「はい。柊さんも、お気をつけて……」

「初めは何を言ってるのかと思ったけど、今ではアンタを信じて良かったって思えるわ」

「そう言ってもらえると、俺も嬉しい」

「うん……その……。あ……ありがと……ね」

「どういたしまして。お前も体に気をつけてな」

二人の体を抱きしめ、互いの無事を祈る。

あの……けっしてヤラシイ意味じゃないですよ？あくまで、「コミュニケーション的な何かという訳で……」

「それに、偶には遊びに行っただけだからさ」

「ええ、楽しみに待ってるわ」

「おう、楽しみにしてな。」

さて、俺達もそろそろ行くとしようか」

「うん。じゃあまたね、朱里ちゃん、雛里ちゃん」

「またね、夕里ちゃん」

「またね……」

「……足が痛い」

紆余曲折有ったが、只今華琳の眼の前で御座い。

そして俺は今絶賛正座中。土の上だから痛み倍プツシュ。

「そう。でもね、本当だったら首を刎ねられてもおかしくないのよ？」

「いや、あれは不幸な事故だろ？」

「事故だとしても、見たのに変わりはないでしょう？」

俺達曹操軍に到着 霞と出くわす 華琳の所に案内される 着替えをしていた華琳 それを見た俺
流れを説明するとこんな感じ。

「見るにしてももうちょっと凹凸がある方が良かった……」

「へえ……どうやら死にたいようね……！」

冗談だ冗談。イツツアブラックジョーク。

「はあ……まあいいわ。」

それじゃあ、これからよろしく頼むわね柊」

「こちらこそ。よろしく頼む、華琳。」

「そっぴや何時洛陽を出るんだ？」

「そうね、思っていた以上に洛陽の被害も少ないから、復興にも時間がかからないでしょう。」

「長くても五日逗留する事になるわ」

「りょーかい。」

じゃ、俺は部隊のとこに行ってくる。用があったら呼んでくれ

「ええ」

反董卓連合・終幕（後書き）

反董卓連合終了!!

なんだか簡潔に纏め過ぎてしまった様な気がします…

なにはともあれこれでいよいよ義妹達との話が書けます!!
ですがまずは、番外編を書こうと思います。

何をやるかはお楽しみです^^

では^^ノシ

番外編 それぞれの道

「水鏡先生!!」

「どうかしましたか、三人とも?」

私塾で先生をしている司馬徽こと水鏡先生。

その人の眼の前には、自分が教えている子の中でも特に頭の良い、諸葛亮・鳳統・徐庶の三人が

覚悟を決めた顔で、身を乗り出していた。

「私達、ここを出て行きましゅ!!」

「ええ!? な、何か嫌な事でもあつたの?」

「あわわ! 朱里ちゃん、色々省き過ぎだ思つよ?」

「まったくもう……。水鏡先生、私達旅に出ようかと思つてるんです」

三人が言うには、自分達の知識を持って、困つてる人々の役に立ちたいとの事。

「そうは言うけど、どうやって街まで行くの?」

それに、街まで行ったとしてもどうやって仕える人を探すの?」

「はわわ…そ、それは……」

「あわわ…、ゆ、夕里ちゃん……」

「え!? え、えっと、街まではここに来る物売りの人に乗せてもらつて……あとは…ふわわわ……」

どうやら街まで行った後の事までは考えてなかった御様子。

水鏡先生はそんな三人を困った顔で見つめ、やがて決心したかのよ

うに立ち上がり、箆笥の中から小さな巾着を三つ取りだし、それを三人に渡した。

「貴女達の事ですから、いつかその様な事を言うとは思っていません。

その中には貴女達が旅を出来るように路銀が入っています。

私にはこれ位しか出来ませんが、三人で力を合わせて、頑張ってください」

「……はい！」

「雛里ちゃん、忘れ物ない？」

「う、うん。大丈夫……」

「でも結構大荷物なっちゃったね」

「本とか地図とか、色々入れたから……」

「二人は違うのも入れてたでしょ？」

「はわわ！？変な物なんて入れてないよ、夕里ちゃん？」

「！！！！（コクコク）」

慌てた様子で否定する諸葛亮と鳳統の二人。

しかし徐庶には関係なかった。なぜなら、二人が何を入れているのか既に分かっているからだ。

「二人の荷物が一番下に入ってる艶本は、変なものじゃないの？」

「何で知ってるの夕里ちゃん!？」

「昨日朱里ちゃんと雛里ちゃんが二人で何かやってたから、そんなんじゃないかなって」

「あわわ……／＼／＼／＼」

「そういう夕里も、何か大切そうに入れていたようだけど？」

「す、水鏡先生！／＼／」

二人の前でお姉さんをしている徐庶も、色んな事が気になるお年頃という事らしい。

「朱里、雛里、夕里。貴女達は私の自慢の生徒です。

ここで学んだ事を生かし、多くの人を救って下さい」

「行つてきます、水鏡先生！」

そして三人は旅立った。

涙を見せない。

またいつか会える事が分かっているから、笑顔で別れる事を決めたのだ。

「そういえば、明日からの家事……どうしましょう……？」

家事に関しては今旅立った三人に任せていた水鏡先生。

さっきまでの事がもう台無しである。

「治安って意味なら曹操って人のところが一番だな」

「いやいや、あそこは厳しすぎるんだよ。」

俺が行ったのは公孫贇つて人のとこなんだが…まあ良くも悪くも無い、普通つて感じだったな」

「公孫贇つていやあ、最近義勇軍が出入りしてるそうじゃねえか。率いてるのは確か…劉備だったかな。噂じゃ結構人気あるみたいだぜ？」

「人気といやあ董卓さんが凄かったぞ。なんせ、街の奴等の殆どが支持してたからなあ」

三人が街に着いて初めにやったのは、今有名なのは誰か、どんな人が率いてるのかを知る為の情報収集だった。

それによると、曹操や劉備、袁紹に馬騰といった面々が今力をつけているらしい。

「私は公孫贇さんの所にいる、劉備さんが気になるかなあ」

「うん…。今少しずつだけど力もつけてるし、ここから近いしね。」

夕里ちゃんは？

「うーん、私は董卓さんが劉備さんかな」

「じゃあまずは、劉備さんの所に行ってみよっか」

行き先が決まった三人は、乗せてもらえる荷馬車を探し馬主と交渉していたが、今の所その全ての答えを簡潔に纏めると

だが断る

の四文字で終わった。

理由としては最近黄巾党の襲撃が多く、危険すぎるとの事。

「あわわ、どうしよう……」

「どうしようって言われても、誰も行きたくないって言うんじゃないあ

……」

「……ねえ雛里ちゃん、夕里ちゃん」

「どうしたの、朱里ちゃん？」

「積み荷に隠れるっていうのは……どう？」

親友の一人から出た策は、とても魅力的で、でも失敗すればとても危ない策だった。

しかし、他の二人にそれ以上の策を出す事は出来ず、結局幽州まで行く荷馬車を見つけ、それに隠れて乗り込むという策を実行する事になった。

「さて、そろそろ出発するとするかねえ」

……」

「あいよ。幽州の公孫贇だっけか？」

！」「」

「おう。近くに官軍が出てきているから

大丈夫だろうさ」

ゴソゴソ……

「お前ら、よくこの危ない時期に行こう
と思っただな？」

「それじゃあ

……」「うん、また後で……」

「博打をしないで商売が出来るかってんだ」

ギシギシ……

「???なんか揺れた様な……」

「……」

……」

「気の所為だろ。じゃ行くぞ」

「……」

……ホッ」「」

さて分かった方もいる方もいるだろうが、ここで説明を。

三人の商人の話聞いていた諸葛亮達は、策を実行。結果無事に乗る事が出来た訳だ。

どんな感じだったのかというと

人人人

馬 馬 馬

荷荷荷 荷荷荷 荷荷荷

荷荷荷 荷荷荷 荷荷荷

荷荷荷 荷荷荷 荷荷荷

夕 雛 朱

こんな感じ。

空いてるスペースが三台とも殆ど無かったので、バラバラに乗る事にしたのだ。

「そついやお前どこ行くんだっけ？」

「涼州の董卓つて人のとこ。」

なんか最近近くの賊が根こそぎ潰されて、誰も近づかないから、それなりに安全なんだと

「なにそれ怖い」

誰がどの荷馬車に乗ったのかは、もはや言つまでもないだろう。

（幽州）

「どどどどど、どうしよう朱里ちゃん!？」

「はわわわわ……お、おおおお落ち着いて雛里ちゃん」

無事幽州の公孫贇が治めている街に着いた二人……そう二人である。諸葛亮と鳳統は、荷馬車が街に着いたのを確認すると静かに荷台から降り、友人を探し始めたのだ。

だが、もう一人の友人徐庶がどこを探しても見つからない。

「も、もしかして、夕里ちゃんの荷馬車だけ違う所に行っちゃたんじゃ……」

「あわわ……」

「はわわ!？ひ、雛里ちゃん、しっかりして〜!」

「あ、あの一?」

てんぱっている二人に声をかけたのは、優しそうな眼と豊かなオツパイと、ほわわんとしたオーラを出し、豊かなオツパイを持った人物……劉備だった。

「どうかしましたか?」

「はわ……えつと、友達が何処にも居なくて……」

「友達を探してるの?じゃあ、一緒に探してあげる」

「い、いえ!お手を煩わせる訳には「桃香様!」」

「あ、愛紗ちゃん」

「まったく、一体何をしておられるのですか。今は警邏中ですよ」

「でもでも、困ってる人を助けるのも、お仕事の一つだと思っよ?」

「困ってる人?もしや、その者達ですか?」

諸葛亮と鳳統は、すこし躊躇いながら自分達がどこやってここまで来たのか。
そして、居なくなった友人が、もしかしたらこの街にはいないかもしれないという事を伝えた。

「ほえ、二人とも凄いな〜」

「感心する所では御座いませんよ、桃香様。

しかしこの後貴女方はどうするのですか？」

「実は私達、ここにいらつしやる劉備という方に仕える為に来たん
です」

「え、私に!？」

「あわ、も、もしかして、貴女が劉備様…ですか？」

「うん」

その後城に招かれた諸葛亮と鳳統の二人は、劉備の配下という形になり、戦乱の世にその身を投じる事になった。

〈幽州 o u t〉

余談ではあるが、その夜、公孫賛の部屋から、

「何で私のとこじゃないんだ……」

という声と、泣き声がしたらしい。

〈涼州〉

「あのあの、ここは一体どこなのでしょう？」

「ここかい？ここは、涼州の董卓様が治めてる街さ」

「……え？」

ようやく二人とは別の方向に向かっていた事を知った徐庶は、どうやって幽州に行くのかと同時に、この街で情報をあつめる事にした。その小さい胸の中に、寂しさと一人の怖さを押し込めて……。

「……で、盗みをする奴は金が無い。金が無いのは仕事が無いから。だったら仕事を与えれば、再犯

する可能性だって低くなる訳さ」

そんな時、面白い考えが耳に飛び込んできた。

この人と話したい。そんな思いが胸に溢れ、寂しさも忘れて、徐庶はその人物に声をかけた。

「あ、あのー！」

「ん？ どうした嬢ちゃん。迷子かい？」

そして、あの時の話に繋がっていく。

〈涼州 side out〉

番外編 それぞれの道（後書き）

交信が遅くなってしまい、申し訳ありません。ダルマです。
今回は前から言っていました番外編を作ってみました。

リクエストを書いて下さった、楽毅様、ぽ。様、ありがとうございます
ました^^

さて、遅くなってしまった言い訳ですが…ちょっと有明で行われているイベントに参加した為、遅くなりました^^;

次回から魏編が始まるので、これからもよろしくお願いいたします。

義兄妹感動の再会 修羅場添え

（流琉 side）

華琳様達が反董卓連合との戦いを終え、帰ってきました。

伝令さんからの話では、虎牢関を落とし、神速で名高い張遼を配下にしたそうです。

他にも何人が配下にしたそうですが、伝令さんはそちらの名前は聞いていないようでした……

兄様……

「待たせたわね、二人とも」

「お帰りなさい（ませ）、華琳様！」

「本来であれば、私達が留守中に起きた事を報告をしてもらうのだが、新しく加わった者達もいるから、その紹介を先にさせてもらうわね」

華琳様がそう言うと、女性が二人、男の人が一人玉座の間に入ってきた。

「じゃ、まずはうちからやな。

姓は張 名は遼 字は文遠 真名は霞や。これからよろしゅうたのむわ」

「えっと、姓は徐 名は庶 字は元直で、真名は夕里と言います。よ、よろしゅうお願いしましゅ！……ふわわ……」

女性二人の自己紹介が終わり、一番気になっていた男の人の番となった。

失礼かもしれないけど、あの華琳様が男の人を配下に加えるなんて想像していなかった。

「……………」

「ちよつと、貴方の番よ？」

華琳様がそう促しても、男の人は一言喋らない。というか、ジツ…と私と季衣の方を見ている。

季衣に知り合いかどうか確認の為見てみると、首を振って知らないとしていた。

すると、黙っていた男の人がようやくその口を開いた。

「よし華琳。俺ここ辞めるわ」

と思つたら、出てきた言葉は考えの斜め上をいくものだった。

〈流琉 side out〉

〈時間は遡り、玉座の間に行く前の華琳の部屋〉

「さて、これから玉座の間に行って二人に貴方達を紹介する訳なんだけど、

柊、貴方が加わった事はまだ伝えてないわ」

「ふむ…………つまりアレか、二人の驚く顔が見たいと？」

「あら、良く分かったわね。

そう言う事だから、貴方は霞と夕里の後。二人もそれで良いわね？」

「うちはかまへんよ」

「分かりました」

反董卓連合も終わり、俺は華琳達が治める陳留にいる。

この後留守番をしていた、季衣と流琉に俺達を紹介するみたいなんだが、

もしかして兄様（兄ちゃん）！？ 久しぶりだな二人とも！ 感動の再会！！

という流れをしたらしく、まだ俺の事を伝えてないらしい。

「だって、その方が面白いじゃない」

「ん、それには激しく同意だな」

という訳で俺in玉座の間。そして今俺は涙線の決壊を必死で止めている最中。

いやねえ、目の前に十年会って無い義妹達がいるんですよ、元気な姿で！

これに感動せずに何に感動すればいいのかと！

にも関わらず二人の反応が無いのは何故に？

「……………」

二人を見つめてると、流琉が季衣にアイコンタクト。しかし季衣は首を振る。

つまりあれか、俺だと、義兄だと気づいていないと？

……………決壊する理由が感動から悲哀にシフトチェンジしますた……………

「ちよつと、貴方の番よ？」

華琳が何か言っているが、そんな事はどうでもいい。

なぜなら想像を絶する悲しみが俺を襲っているからだ。

義妹が覚えていない。去る理由にはこれで十分だ。

「よし華琳。俺ここ辞めるわ」

「な！？ 何言ってるの貴方は！！」

「馬鹿野郎。確かに十年ぶりだが、まったく反応が無いんだぞ？」

よし。諸々終わるまで、山の中でひっそりと暮らす事にしよう

「十年ぶり……………！？ る、流琉…もしかして……………」

「に、兄様…？」

む、ようやく分かったのか。まあ、十年間会ってないから分からないのも無理はない……………かな？

「思い出したようなので居残り決定。

姓は李 名は通 字は文達、真名は柊だ。

これからよ「兄様！」「兄ちゃん！！」ガフウツ！！」

俺の胸に飛び込んでくる二人。比喻でも何でもなく、本当に飛び込んでくる。

何とか踏みとどまり、抱きかかえた二人をゆっくりと地面に下ろす。

「兄ちゃん今迄どこ居たんだよ！！」

僕……ずっとずっと心配してたんだよ!!?」

「そうです!!探しても探しても居なくて……
死んでしまったのかと……私……!」

わんわんと大粒の涙を流す二人を見つめる俺。

ここまで心配してもらってるのは、兄冥利に尽きるというもの。
まあとりあえず……

「ただいま。流琉、季衣」

「「おかえりなさい、兄様（兄ちゃん）」」

うむ。これでようやく兄妹が揃った訳だ。

……ん、兄妹?……兄・妹……妹?

「お兄ちゃん?」

「「お兄ちゃん?」」

そうでした。二人の知らない所で新しい義妹が増えたんです。
てか華琳と秋蘭、笑ってんじゃねえ!

「「どついう事ですか兄様!」

お、お兄ちゃんって!?」

「あ〜……と、とりあえず落ち着け流琉」

「も、もしかして僕達の代わりに、新しい妹を!?」

「曲解し過ぎだ!」

ああつまりこれが……

修羅場ってやつですかい?

「……………で、お兄ちゃんに憧れてたから、そう呼ばせてるんだ」
「すみません…差し出がましい真似をしてしまって……………」
「い、いえ！」
「こちらこそ、勝手に誤解してしまって……………」
「ごめんなさい……………」

何とか誤解は解けた様で、三人ともまだきこちないが仲良くしている。

「それで？私はいつまで待ってればいいのかしら？」
「……………」
「あ……………」

割と本気で忘れてた。そういやここ玉座の間だったね。
それでもあんまり怒ってない様子の華琳様。

「感動の再会に水を差す程、無粋な事はしないわよ」

さよで。

「でもそろそろ先に進めさせてもらつわよ。
続きは後でやって頂戴。桂花」
「は！」

まず三人についてですが、霞は騎馬部隊の指揮を、夕里は私の補佐を。

残りですが……………アンタ何が出来るの？」

「董卓軍に居た時は街の警備隊を指揮してた。
書類仕事は………普通の文官と同じと思ってくれ」

え、何で嘘なんて吐くのかって？

ハハハ。これで常人の四倍なんて言ったら、ボロ雑巾の様に扱われるのが眼に見えてるからな。

嘘も方便と奴ですよ。

「ふうん……。つまり、脳筋ってこと」

「いやいや、んな訳ないやん」

オイ馬鹿止めろ。

「あつちに居た時は、詠と音々………ああ、賈馱と陳宮が束になっても、柘の仕事の速さには敵わん

かったんやで？」

「は？」

「それに、洛陽の発展ぶりは見たやろ？あないまで大きくなったのも、柘が色々頑張ったからなんや」

猫耳軍師よ、信じられないだつて？俺だつて信じられんさ、まさか仲間から裏切りを受けるとは……。

これで俺の日々穏々穏々計画が丸潰れじゃねえか。

「じゃあ柘には、文武官として働いてもらいましょうか。

それと警備隊の隊長として」

「お待ち下さい華琳様！」

こんな男にそこまでの能力があるとは思えません！」

そこ、勝手にフラグを立てるんじゃない。

「なら、柊と勝負しなさい。

貴女が勝つたら、煮るなり焼くなり好きにするといいわ」

「俺が勝つたら？」

「そうね……桂花を好きにしていいいわ」

「か、華琳様!？」

「だが断る。俺は百合っ子に何ぞ興味はない」

「ちよつと！百合っ子ってなによ!！」

つづか俺が勝った時のメリットが無さ過ぎね？

ああ、わざと負ければいいのか。ならば早速……訂正、そういや煮るなり焼くなり言ってたな。

アイツは実際に煮る焼くしかねん。

「あゝ……じゃあ研究室みたいなの貰っていいか？

作ったのが役に立てば費用と報酬は国が持つ。立たなかったら自腹で」

「それだと、兄様に利が無いのでは？」

「いいんだよ、俺は何か作るのが好きただけだから」

「なんやゝ。兄さんとは気が合いそうな気がするわゝ」

「なら決まりね。」

用意させるから、少し待ってなさい」

そんな訳で始まった俺の能力審査。

目の前にはこんもりと盛られた書簡の山が鎮座している。

もしかして、体良く仕事押しつけられただけじゃねえの？

「そんな事はないわよ？」

「俺の心を読むな。とりあえず……霞」

「ほいほい」

ついて行って……って違う。

取りあえず霞から渡された硯と筆を左手側に置き、書簡の山を二つに分ける。

「おい柊、硯と筆ならもう有るではないか」

「まさかお主、両手を使うのか？」

「そう言う事。」

おし、こつちはいつでもいいぞ

「私もです」

「では……初め！」

開始の合図と共に二つの山に手をかける。どうしようかと思ったが、月の所に居た時とあまり変わらない様な内容なので、それ程難しくはない。

正直、国柄土地柄の内容だったら、かなり時間がかかるが、これから早めに終わりそうだ。

「ほえ、お兄さん凄いの」

「霞様、どうして柊様はあんな事が出来るのですか？」

「聞いた話やと、双剣つこうとるから、両手で別々の動きが出来る様になったらしいで？」

「うう…沙和にはそんなの無理なの……」

「沙和はまず、書簡を溜めない様にするのが先だろ」

「耳が痛いの……」

・
・
・
・
・

「終わったぞ〜」

「その様ね……。間違った所も無いようだし…

勝者 柊!!」

あ〜、ようやく終わった。

やってて気付いたけど、やっぱりこれ仕事押しつけられたただけだな。書簡の殆どが意見書や要望書ばかりだった訳だし。

「そ、そんな……」

百合っ子は今三分の一が終わったようで、恨みがましい眼で睨んできやがる。

……………こ、怖くなんて無いんだからね!

「んじゃ研究室の件よろしくな」

「ええ、楽しみにしてなさい」

「ところで華琳よ。負けた奴には罰が必要だと思わんか?」

俺の言葉に桂花の体がビクッてしたのが見えた。

お〜お〜、顔がどんどん青くなっていきやがる。

「ええ。それが戦の常であり、習わしてもあるわね」

「だが俺もこの百合っ子も、お前の配下だ。」

つまり罰は俺が下すのではなく、お前が下した方が適切な訳だ」

「勝者である貴方がそれでいいなら構わないわよ。

そう言う訳だから桂花、今晚私の部屋に来なさい。

たっぷりと…………お仕置きしてあげるから…」

「華琳様…………／／／／」

ん、アフターケアはこれで良いかな。

この先桂花にも世話になるから、少しでも心象は良くしておかんな…………

主に俺の心の為に…！

「では今日はこれで解散よ。

皆、ゆっくりと休みなさい」

「季衣そんなに引つ付くな」

「えへへ〜 兄ちゃんの匂いだ〜」

「もう、季衣つたら」

夜になって寝ようとしたら、いつのまにか俺の寝台に流琉と季衣が潜り込んでいた。

季衣曰く

「久しぶりに会えたんだから、昔みたいに一緒に寝たい！」

流琉曰く

「兄様と会えなかった分、少しでも埋めていきたいんです！
との事。」

「そっぴや夕里はどうしたんだ？」

「今日は一人で寝ると仰ってました。

その……久しぶりなんだから、たくさん甘えて来なさいと……／／
／」

「なるほど……。それで？流琉は甘えないのか？」

「ほら、流琉も一緒にくつつこつよ」

「ふええ！？え、ええと………で、では失礼します……」

ギョツ

右側から季衣の体温が、左側からは流琉の体温が伝わってくる
布団とはまた違うホツと出来る温かさ。

「そつだ、明日手合わせするか。

前からの約束だしな」

「ホント！？」

「おう。二人がどれだけ強くなったか、見せてもらつぞ」

「流琉！」

「うん！明日は覚悟して下さいね、兄様！」

その夜は遅くなるまで三人で話に花を咲かした。

気がつくと、流琉も季衣も瞼を閉じて寝息をたてていたので、布団
をかけ直し、俺も寝る事にした。

義兄妹感動の再会 修羅場添え（後書き）

流琉と季衣キタ

（ 。 。 ）

！！！！

ようちやく……ようちやく！書けました！

この先をどのようにしていこうか、今からw k t k が止まりません

^^

約束の手合わせ

翌朝

目が覚めると……

「知らない天井だ……」

知らないというより、見慣れないの方が正しいけどな。

両脇に居る季衣と流琉はまだ夢の中らしく、可愛い寝息を立てている。

「このまま二度寝をしたいとのだが、下のダムが決壊寸前。

二人には悪いが、ちと抜けさせてもらおう」

「ふい〜、すつきりした」

二人を離すのに苦労したが、トイレには何とか間に合った。さて、部屋に戻って寝なおそうか、城の中を散策しようか……と思ったら、何やら厨房が騒がしい。

「あ！そのアンタ、丁度良いとこに来た！」

「何か用ですか？」

「実は、調理番の奴らが病気で寝込んでしまっただね。

ハッキリ言っちゃまうと、人手不足なのさ」

「なので手伝えと。」

まあやる事も無いですし、良いですよ」

そして連れて行かれる俺。

この事華琳にバレたらどうなんだろう？

厨房はまさしく戦場となっていた。

飛び交う声と、油の弾ける音。

まさしく方向性は違うが、一つの戦場がそこにあった。

「早速だけど、アンタはこの芋と人参の皮むき。

終わったら適当な大きさに切つとくれ！」

そして現れる、一抱えもある籠に入った山盛りのジャガイモと人参。
ふ……心配するな、貴様ら全員もれなく裸に引ん剥いてやるからよ

……

シヨリシヨリシヨリシヨリ……

トントントントントン……

「終わりましたよ」

「は！？も、もうかい！！？」

「この手の事は慣れてる物で。」

さて次は……」

・
・
・
・

「で、人手不足だからと言うから手伝っていたと？」
「そう言う事だ。飯は美味かっただろ？」

あの後、中華鍋を振っていた俺だが、季衣と流琉が起きたら俺が居なかったので、探し回っていたらしく、俺を見つけたのは厨房が一段落してからだった。

俺が新しく加わった將軍の一人だと分かると、もう……ね？厨房に居た人達一斉に土下座ですよ？

俺を連れてきた人なんて、顔を蒼くしながら震えてたもの。

「ああそうだ華琳、暇だったら、後で中庭に来るといい。

季衣と流琉の二人と、手合わせをする予定だからな」

「そう。なら、楽しみにさせてもらおうわ」

「楽しみにしてくれ。」

それと、厨房の人達に罰とかは無しの方向で頼む」

「言われなくてもそのつもりよ。」

今回は伝えてなかった、こちらの手違いなのだし」

「そいつは良かった」

「まあその事を言わなかった貴方には、罰は与えるけどね」

何という理不尽。この世に神は……いるな、そういえば。

(呼ばれた気がして)

(俺は自称神様は呼んでいない)

(うう……まだ自称を外してもらえないんですね、私は……)

中庭なう。

二人と手合わせする為に来たのだが、何故だかギャラリーがわんさか。

そんな二人はストレッチの様な事をし終わり、始まるのを今か今かと待っている。

「取りあえず秋蘭、お前の横でヤル気十分な姉を止めてくれ」

「承知した」

「頼んだぞ。」

さて流琉、季衣。準備は良いな？」

「勿論！いつでも良いよ」

「よろしく願います、兄様」

互いに獲物を構え、開始の合図を待つ。

そして

「始め！！！！」

合図と共にハンマーとヨーヨーが迫る。

流石に双剣では武器が持たないので、今回は竜殺しをチョイス。

「ほっ」

その攻撃をバックステップで避け、距離を取る。

かわされたと知ると二人は左右に分かれ、俺を挟撃する形を取った。

「てやああああ！！」

「はあああああ！！」

ブオン！ ブオン！

「よっ はっ！」

ハンマーも巨大ヨーヨーも、投げ飛ばして粉碎するのが主な使い道。しかも俺の間合いの外からの攻撃なので、こちらはかわす事しかできない。

（かと言って、まともに打ち合えば竜殺しが持たんだろうなあ…）

一方と距離を詰めようとするれば、もう一方から攻撃が飛んでくる。そちらを止めようとすれば、必然少しだが動きが止まり、その間に攻撃が飛んで来るだろう。

というか……完璧に俺の間合いを把握してるよな…これ？

「この日の為に、季衣と一緒に毎日考えた兄様対策です!!」

「と言う事は毎日俺の事を考えてくれた訳か。

……何気に照れるな」

「そ、そっという意味じゃ無いです!!」

それはちと残念。さて……

「そろそろ……こちらからも行かせてもらおう!!」

範囲外から二つの攻撃。確かに脅威だろう。

こちらの攻撃は届かず、一方的な攻撃をされては体力を消耗するだけだ。

ならどうすればいい？

「うりゃあ!!」

季衣の投げたハンマーが竜殺しに巻きつき、思う様に動かせなくなる。

「季衣！そのまま押さえてて！」

「まあこうなるわな」

俺に出来た決定的な隙を見逃すはずもなく、流琉の放ったヨーヨーが迫ってくる。

ところで先程の問いだが、近づく事が出来なければどうすればいい？

「答えは簡単。

向こうから近付いてもらえばいい」

「へ？ うわぁー！！」

力技で竜殺しを振りかぶり、後ろから飛んできたヨーヨーをたたき落とす。

しかも、ハンマーが巻きついていたので、その持ち主の季衣は武器を離す事が出来ず、空を飛ぶ羽目となった。

「ちよっ、ちよっと季衣！こっち来ないでえー！！」

「無理だよー！！」ドシヤ

飛んで行った季衣は、見事流琉と正面衝突。

流琉のヨーヨーは地面に埋まり、季衣はぶつかった衝撃で動けないでいる。

「つまり、これで俺の勝ちという事だ」

竜殺しを二人の目の前に突きつけ、勝利宣言をする。

「「参りました……」」
「はい、お疲れ様」

竜殺しを地面に突き刺し、座り込んでいる二人に近づく。
どこも怪我していないようなので、良かった良かった。

「もー、兄ちゃん無茶苦茶だよ……」
「ハッハッハッ！ 俺とて、無為に十年を過ごしてた訳じゃないからな」

「でも兄様、あそこで季衣のハンマーが巻きついてなかったら、どうしてたんですか？」

「そうだな…… 竜殺しを投げつけて、防御している間に距離を詰めて無力化するって手もあつたんだが、危ないからそれは最後の手段にした。

ちなみに、巻きついたのは俺が意志的にやった事だから、なかったらは無いんだ」

「そっかあ…… 兄ちゃんはまだまだ遠いなあ」
「私達ももつと頑張らないと」

三人で反省会をしていると、ギャラリイの中から華琳が出て来た。
すぐさま二人は立ち上がり、姿勢を正した。

あ、俺？俺はいつも通り、ボヘ〜と突っ立ってますよ。

「お疲れ様、三人とも。」

それで？久しぶりの兄妹の睦み合いはどうだったの？」

「僕は…… やっぱり悔しかったです……」

「私も、まだまだと感じました」

「なら、その悔しさを糧に頑張りなさい。」

今日は特別に湯を沸かしてあるから、入ってくるといいわ」

「やったー！」

兄ちゃん、流琉早く行こう！」

「自然に俺も入ってるが、俺は二人の後に入らせてもらおうよ」

「え〜、一緒に入ろうよ〜」

「き、季衣！」

そ、それじゃあ兄様、お先に失礼します!!」

季衣の手を引つ張り、少し顔を赤くした流琉は足早に去っていった。
ん〜、残念のような……助かった様な……

「さて、俺はどこかで時間を潰すとしますか」

「待ちなさい、貴方は中庭の修理よ？」

そして華琳の指差す先には、多数のクレーターでボコボコになった
姿の中庭があった。

なんと惨い……

「て、もしかして俺一人でやれと？」

「あら、可愛い義妹達にもやらせるといつの？」

「……もしかして、これが罰だ!とか言うわねえよな？」

「分かってるじゃない。」

「じゃ、頼んだわよ」

畜生、神も仏も無い……

（呼んだか？）

（ああ神様、この憐れな子羊をお助け下さい……）

（神つてのはなあ、乗り越えられる試練は与えるが、助けはしない
んだよ。

最後まで足掻いてこそ人間ってもんだろ？）

(成程……流石神様、どこかの自称神様とは違いますね！)
(……まあアイツも色々頑張ってるんだがなあ)

それでもアイツは自称神様。

さて、とにかく文字通り穴埋め作業と行きますか……。

S M A L L & B I G

「あゝ、隊長ここに居たの〜」

「なにやっとなるん、隊長？」

「小遣い稼ぎ。」

俺の作ったのが有益だったら、費用と報酬が貰えるからな」

「ええなあ隊長。うちも、そうしてもらおうかな……」

「真桜は殆どが趣味だろうに」

「それで、隊長は一体何を作っておられるんですか？」

「創作菓子をね。そろそろ焼けたかな……」

竈から取り出した鉄板の上には、膨れた塊……まあシュー生地ですな。

それが全部で10個程乗っている。

「わー！可愛いのー」

「これがその菓子なんか？」

「いや、これは菓子の生地。」

で、これがその中に入れる物の材料だ」

器の中には、卵黄と砂糖、バターと牛乳等が入っている。

バターが何であるのかって？無論自作ですがな。

シャカシャカシャカ……

「隊長〜、これ触っても良い？」

「潰したりしなければ良いぞ〜」

「じゃあ……って何これ〜！すっごく軽いの〜！」

「ホンマや！うち、ちゃんと持つとるよな？」
「まるで羽の様ですね……」

泡立て器でしばらくかき混ぜてると、次第に固まり、カスタードクリームが出来上がった。

後は、前に作っておいたホイップクリームとカスタードを……

「この生地の中に入れて、と。

ほい出来上がり」

「ほえ、隊長こんな事まで出来るんやなあ」

「ねえねえ隊長！これ食べても良いの？」

「食べさせてやりたいんだが、まずは華琳に持っていけないといけないんでな。

試食はその後だ」

「う、……なら仕方ないの……」

「しかし、その華琳はどこにいるんだ？」

「華琳様でしたら、玉座の間におられると思いますが」

「お、そうかい。ありがとな、凧」

厨房を片づけた後、レツツラ玉座の間。

はて、何か大切な事を忘れてるような気が……

「おーい華琳、居るか？」

「柎？……ええいるわよ、入りなさい」

ほだらば失礼して。

「あ……ああ……！」
「……………」

玉座の間に居たのは下着姿の華琳と、スツパの桂花でしたとき。
まだお天道様も登ってるのに、お盛んだね！

「あう、か、華琳様……」

「あら、誰が止めて良いと言ったの？」

「で、ですが！」

「続けなさい」

続けんなよ。

「それで、どうかしたの？」

「創作菓子を作ってみた。」

食べたら感想なり何なりよろしく」

「ちょうど良かったわ。今桂花にも、あの時の罰を与えてたのよ」

「どうみても褒美にしか見えない件について」

「私が罰と思えば、それが罰なのよ」

そういうもんかね。

「ところで……貴方よく平然としてられるわね？」

「なにがだ？」

「裸の女性が二人。普通男だったら目を逸らすか、釘づけになるか、どちらかだと思っただけど？」

「ハッハッハ！　せめて春蘭秋蘭位の凹凸をつけてから言ってくれ」

む、部屋の中だと言うのに風が……そして頬に流れるへモグロビン。

後ろの壁に突き刺さっている絶。玉座で体をプルプル振るわせている華琳。

「なにか……言ったかしら……？」

「憤ましい胸だと！」

「良く言った。では死ね！！」

「風になれ！俺！」

脱兎の如く逃走開始。てか華琳さんや、アンタいつのまに着替えなされた。

「ステンバイイ……ステンバイイ……」

どうも、李通です。只今茂みの中に隠れています。

どうも、李通です。只今武将全員に追われています。

どうも、李通です。只今思案中です。

「どうやってあの憤ましい胸の華琳を宥めようか……」

「……憤ましい？」

「おや翡翠、周囲はどうだった？」

「城に春蘭と秋蘭。街に警備隊の三人。華琳と桂花と夕里は玉座」

え、なんで翡翠が協力してるのかって？

かくれんぼは良い訓練になるから、自主的に味方になってくれました。サンクス！

「慎ましい……」

「そこは気にしなくていいから。」

さて、どうやってほとぼりが冷めるまで待とうかねえ」

「……逃げる？」

「いや、ここはあえて相手の懐に飛び込もう。」

てな訳で、玉座の間に行くぞ」

「……本気？」

「本気と書いてマジと読む。」

見つかったら見つかったで面白いしな」

「……変態？」

だまらっしゃい。

とりあえずは玉座の間の天井にでも隠れるとしますか。
ではあの姉妹に見つからない様に、スニークキング開始。

華琳 side

「柊はまだ見つからないの？」

「今春蘭や凧達を使って探させてるのですが、未だ……」

「それと、どうやら翡翠さんがお兄ちゃんに協力している様です……」

まったく……よりもよって慎ましい？

これでも色々努力はしたのよ……自分で揉んだり……とか

「華琳様？」

「どうしたの、夕里」

「その卓の上にあるのは何ですか？」

卓の上？ああそう言えば柊が、創作菓子を作ったとか言ってたわね。

「柊が作った菓子だそうよ。」

「せっかくだし、食べてみましょう」

「いけません華琳様！あんな奴が作った物を食べたら、妊娠してしまいす！」

「け、桂花さん、食べ物で妊娠は……」

「いーえするわ！しかもアイツが作ったのならば間違いなく！！」

「作った者に罪は有っても、作った物に罪はないわ。」

さて……」

それにしても、不思議な形をした菓子ね。まるで雲を焼いた様な……これといった装飾もしてないし、もしかして、只の試作品なんて事はないでしょうね。

モグモグモグ

「これは……」

「ど、どうかなさいましたか華琳様！？ やはり体に不調が！？」

「いえそれは無いけど……とりあえず、二人とも食べてみなさい」

「は、はい。では頂きます」

「う……うぐぐぐ……」

モグモグモグモグ……

「ど……ど……」

「こ、これ凄い美味しいです！」

外も中もふわふわで、口の中に入れたら、ふわふわがトロトロに変わって！」

「た、確かに……美味しいと……言わざるを得ません。口惜しいですが……」

「試作品ではなく、完成品の様ね……もう一つ貰っておこうかしら」

この中に入ってる二色の餡？が、くどくない甘さを作ってるのね。
ん、美味しい

「でもお兄ちゃん、どこに居るんでしょうか」モグモグ

「これだけ探しても居ないとなると……まさか街の外に？」モグモグ
グモグ

「……そういえば、まだ探してない場所があったわね」

私とした事が……こんな簡単な事を見落としてたなんて……

「いるんでしょう、柊、翡翠」

シュタツ！

「シュークリームは好評の様で何よりだ」

「……美味しいそう」

「うむ、後でまた作ってあげよう」

やっぱりここに隠れてたのね……

「それで？何か言う事はないの？」

「胸だけが女の魅力ではない。」

小さくても大きくても、どちらにも魅力は有る。

大切なのは、それをどのように生かすかだ」

「へえ……じゃあ貴方が思う私の魅力って何なのよ？」

「ふむ……まずはその身長だな。小さいと、男は守ってやりたいと思う。」

後はその性格かね。俺的には、頑張ってる奴は支えたくない」

「そ、そう。ありがとう……／＼／＼」

な、なんでこうも恥ずかしげもなく言えるのよこいつは！

「……大きい」

「翡翠……それは私に対する嫌味かしら？」

「う、羨ましいです……」

「んじゃ、俺は他の奴等に食わせる分作ってくるわ。」

翡翠、鬼ごっこ終了の連絡頼んだ」

「……ん」

柊が来てからというものの、何だか毎日が騒がしいわね。

まあ騒がしいのは嫌いではないし、気分転換にもなるから、良しとしましよう。

S M A L L & B I G (後書き)

いつのまにか100万PV突破!!

そろそろ夏休みも終わり……課題が……課題ががががが

諸君、私は防衛戦が好きだ。(前書き)

更新がだんだん遅れ始めてる……

スランプなのかマンネリなのか……

それでも頭の中は妄想でいっぱいという今日の頃。

諸君、私は防衛戦が好きだ。

「隊長、全部隊配置完了しました」

「ご苦労さん。歓迎の用意は？」

「ギリギリですが間に合いました。いつでも持て成せます」

「重畳重畳。んじゃ、お客さんを迎えるのでしょうかね」

「は……！」

さて、ぼちぼち始めるとしますか。

く回想なうく

「袁紹が攻めてきた？」

警邏隊の詰め所に居た時すぐに集まるように言われ、そこで聞いたのは袁紹が攻めてきたという事。

確か河北四州を手に入れて、青州・并州にも手を伸ばしたんだっけか？

「ああ。兵はおよそ五万。速度は遅いが、いまなお進軍しているぞうだ」

「五万だと!？」

わーお……。流石に最初の連合の時よりは減ってるが、とんでもね

え数だな。

「桂花、今すぐ動かせる兵はどのくらいいる？」

「相手が動くのが速かったため、今は五千。明日の昼過ぎになれば、
凧や真桜達も帰ってくるので、

三万は動かせるかと」

「報告のあった城には何人いるのだ？」

「約八百といったところだ。とてもではないが、相手にならんだろ
う」

「むしろ相手にしないだろ」

「どういう事？」

あの袁紹が少ない手勢の所を攻めて、喜ぶような奴とは思えんから
な。

「確かに、袁紹ならそんな所には目もくれず、こちらを目指すでし
ようね。

となると、後は凧達が帰ってくるまでどうやって時間を稼ぐかね」

「だが、ただか五千では半日も持たんぞ？」

「ただの五千の兵で有ればね……。でも……。その五千は柁の部隊な
のよ」

「柁の？」

なんとというご都合展開。

まあ、うちの部隊は防衛が基本だから、ここ守備が仕事なんだけ
どね。

「どのくらい稼げる？」

「そこさな……。平地であれば二日。城であれば五日は持たせられる
ぞ」

「「「」……「「「」」

「こつち見んな」

照れんだろ。

「だが持たせられるとしても、袁紹がお前の方に行くとは限らんだろっ?」

「俺が元董卓軍で、あいつに大打撃を与えたのを忘れたか?」

「袁紹が放っておくはずはない、か。」

しかし、それは囿になると言ってるのと同じだぞ?」

「どのみち、誰かがやらなくちゃいけないんだ。」

だったら、守備専門の俺達がやった方がいいだろ」

「……分かったわ。欲しいものがあれば遠慮なく言いなさい」

「それじゃあ……」

〈回想終了〉

「しっかし、お前らもよく付いてくる気になったよな」

「あの時言った様に、皆酔狂なんですよ。」

それに……これもあの時仰った様に、自分達の十倍の数ですし」

「隊長、客さん方が見えましたぜ」

おし、んじゃ防衛部隊の真価を見せてやるとしますか。

「おーほっほっほー！さあ皆さん！雄々しく、華麗に攻めるのですわ
！！！」

袁紹軍一行は軍を分ける事も無く、五万の兵を李通のいる城に向け、その首を上げようとしていた。

「うう、こんな所で時間をかけてちゃダメなのに……」

「大丈夫だって斗詩。だったら時間をかけないで落とせばいいんだよ」

「そうは言っても、相手はあの李通さんだよ？」

「？水関と虎牢関で殆ど被害も無く守って、連合軍に大打撃を与えた……」

「それにアタイと同じ大剣使いだしなあ！ああ早く戦いたいぜー！」
「文ちゃんつたら……」

先行して部隊を引き連れているのは、袁家二枚看板の文醜と顔良。顔良はいつも通り、戦の常識を（悪い意味で）覆す二人に疲れたため息をこぼし、早く李通と戦いたい文醜はウズウズしていた。

「も、申し上げます！」

「どうかしましたか？」

「敵城から小さな壺が大量に投げ込まれています。中身はおそらく酒かと思われます！」

「酒？」

「なんだよ勿体無い事しやがって。捨てる位なら飲ませろってんだ！」

「でもどうしてお酒なんて……あれ？」

顔良が見上げた先には、蒼天の空には似合わない点々とした赤。

てもらったんだけどな。

度数の高い酒は揮発して火に触れると発火する……仕組みの知らない奴にとっちゃあ妖術だわな。

「ですが、些か壺が多すぎるのでは？その特殊な酒とやらは、もう有りませんか？」

「残りの壺は牽制用さ。まだあるよ〜まだあるよ〜って見せとけば、向こうの足は止まってくれる」

「あ〜！我らは時間を稼げば良い訳ですから、有難いという訳ですな」

「そういう事

さて、射撃が終わったら双牙隊にも出してもらおうとするか。

明日の後続の為に、少しでも敵兵を減らしておかなきゃな」

「隊長はどういたしますか？」

「無論出るよ。双牙の実戦投入はこれが初めてだから、働きぶりも見たいし」

「了解しました」

・
・
・
・
・
・

「それで、部隊の被害は？」

「重軽症者合わせて四百八十七名。死者は無し」

「……アンタ、一体何やったのよ」

いつも通りの時間稼ぎですがそれが何か？

「あのねえ、只の時間稼ぎで……………何で袁紹軍が半壊してんのよ！！」

「俺ら超頑張った。」

「それより桂花、俺結構頑張ったのに、労いの言葉も無いのか？」

「死ねばいいのに」

「でも、そのお陰で労せずして河北四州を手に入れる事が出来たわ。その立役者の柎には、褒美を与えなければならぬのだけれど…
…何が欲しい？」

「欲しいもの…ねえ。衣食住全部揃ってるこの状況で、欲しいものなんて…あ。」

「じゃあ休みくれ休み。大体四日位」

「四日…だとしたら、ある程度は仕事を終わらせてちょうだい。それなら許可するわ」

「了解」

話してるうちに追撃に出てた春蘭達が帰ってきた。
兵達には殆ど怪我も無く、本当にただの追撃戦だったようだ。

「只今戻りました、華琳様」

「御苦労さま春蘭。それで袁紹は？」

「は…：…申し訳ありません、混乱に乗じて逃げたらしく、討ち損じました…：…」

「そう…：…。でも、構う事はないわ。」

「ここまでの被害が出れば、いくら袁紹でも再起は無理でしょう」

俺的には復興よりも、なんで今迄持っていたのかが不思議でしょうがない。

あれですか、苦勞人顔良が頑張ってたんですか。

「城に戻るわよ。」

春蘭と凧、真桜、沙和、柊は部隊の纏め、後報告を。

桂花、夕里、秋蘭、柊は事後処理をして頂戴」

「……俺がどつちにも入ってるんだが？」

「やる事は山積みよ。皆の奮闘に期待するわ」

「……御意！！！！！！！！！！」

「無視すんなし」

城に帰ってから？

まるでわんこ蕎麦の様に出てくる書簡を、半ば気を失いながら片付けましたとさ。

諸君、私は防衛戦が好きだ。（後書き）

双牙について。

両刃の刀身を腕にくっ付け、肩の方にいくほど幅が広がっている
剣。

普通の剣よりも芯を強くしている為、折れにくい仕様だが、その分
重量がある。

両腕にとりつける為、盾と剣、剣と剣、盾と盾といった使い道があ
る。

イメージとしては、鋼の錬金術師のエドが練成する剣を、肩の方
ま
で伸ばした様なイメージです。

目指すは怠惰な日々（前書き）

今回の作品は、原作崩壊から、性格崩壊まで起こしています。

なんといつかもつ……本当にすみません……

目指すは怠情な日々

「む……もう朝か……」

窓から入ってくる朝日に気がつく俺。

でも気付いたのは寝台の上では無く、部屋の机という有難くない状況。

どうも李通です。襲いかかってくる書簡の山を一晚で片付けてました。

「眠気が疲れてマツハな感じだな…。

取りあえず顔でも洗ってくるかね……」

「ふう………」

賢者タイムでは無いのであしからず。

井戸の水で顔を洗って、さっぱりした描写です。

て、おやアレは……

「なんだ、今起きたのか風？」

フラフラと近づいてきたのは、程？こと風でした。

「いえいえ、凜ちゃんやタ里ちゃん達と一緒にお仕事してましたよ」

「……本格的に寝始めた風を、凜か桂花が顔を洗ってこいと言ったのかな」

「おお、良く分かりましたね」

そりゃ分かりますがな。

「頬に墨がついてるからな」

「のわっ！」

「こらこら、袖で拭こうとするんじゃない……ん、おちたぞ」

濡らした布で顔を拭いてやり、墨を取る。

あれ、どうせ顔洗うんだから意味なくね？

「いえいえ、そんな事はないですよ」。

お陰でバツチリ目が覚めましたから」

「心を読むなし。」

「んで？ 仕事は終わったのか？」

「……………」

「さて、俺も部屋で寝るとするか」

ガシッ

「何故服を掴む」

「お兄さんは、困っている人を見捨てる様な鬼畜なのですか？」

「質問の意図が分からない」

「要約すると、手伝ってほしいのですよ」

あのですね風さん、私貴女方と同量の仕事を終わらせてきたんですよ。

ここで更に倍プッシュとか、それなんて舞い降りた天才？

「さあ。書簡の山が、風達を待ってるのですよ」
「オワタ」

スラスラスラハイスラスラ……

「今さらだが、何で六割が俺なの？」

「……適材よ適所（）（）（）なのですよ」「」「」

俺は今……泣いて良い！！

「そついや軍師勢が勢揃いしてるから聞いてみたいんだが、華琳の目指してるのって霸道だよな？」

「ええ、そうですが……それがどうかしましたか？」

「なんで態々霸道なん？ 一番面倒臭えのに」

「……今の漢王朝に力が無いのは知ってるでしょう？」

その所為で諸侯が好き勝手やって、民が迷惑してるのよ。

だから華琳様が武で全ての国を一つにし、知で民を導くする道が
霸道という訳よ。

そんな事も知らなかったの？」

「なんともまあ……つまらん国が出来上がりそうだな」

「……つまらない？」「」「」

つまらんと言うと、四人の顔が俺を見る。

「人は他の奴と競う事で高みに登る。」

国も同じでね。競う相手がなくなると、段々と衰退していくのさ」

「じゃあ、お兄ちゃんは何が一番良いと思うんですか？」

「無論、天下三分」

「三分……と言いますと？」

「今の候補と言えば、華琳様に孫策さん、劉備さんに馬騰さんくらいですか？」

「俺的には、華琳・雪蓮・桃香ちゃんの三人だけだな」

むしろこの三人以外に居るなら教えてくれ。馬騰さんには会った事無いから分らんけど。

そしてそこ！ 眼鏡軍師と百合軍師、あからさまにため息を吐くんじゃない。

「当たり前でしょ！ そんな夢物語な事、出来ると思ってるわけ？」

「桂花殿の言う通りです。それに、万が一出来たとしても、どれかが裏切るとも限らないでしょう」

「裏切らんよ」

「その根拠は？」

「裏切ったとしても利が無い。

その他大勢の諸侯ならまだしも、アイツらは自国の発展か、大陸の平和が目的だからな」

自国の発展が目的なら、態々戦を起こす必要が無い。

大陸の平和が目的なら、話を持ちかければ同意してくれる………筈

「「甘い（わね）（ですね）」

「んじゃ無理だと思う根拠を」

「さっきも言ったけど、裏切りの可能性ね。

懷まで入られてる状態で裏切られたら、被害は甚大。国としては

「終わりよ」

「私は朝廷ですね。」

いくら力を失ってるとは言え、その権力は絶大。一国なら付け入る隙は少ないですが、三国ともなると、綻びが生じやすいと思われるます」

「桂花の根拠についてだが、解決策はある」

「解決策？」

と言う訳で説明したのは、萌将伝で登場した、新しい都を作り、そこに魏呉蜀の三国の大使館的館の建設。そして外交官等を配置。悪く言ってしまうと、人質を各国共通で出して、互いを牽制する。表向きは外交目的として。

これには二人も啞然とした様で、桂花は穴が無いか必死に考えている。

何か小声で、「あんな男に論破される訳には……！」って言うってるけど。

「では朝廷に関しては何？」

「もう腐ってるんだから、いつその事潰しちまおう」

「そ、それって、漢王朝を滅ぼすって意味ですか!？」

「そういう事。そうすりゃあ権力云々は意味をなさん」

「で、でもそんな事したら反発する諸侯や、豪族が……」

まあいるわな。今迄甘い蜜を吸ってきた連中が、その元を壊される訳にはいかんからな。

でも……

「夕里、今迄甘い蜜を吸ってきた様な連中に、俺達が負けると思っか？」

「それは……」

「お兄さんは、何で天下三分をしたいのですか？」
「働きたくないでござる！ 絶対に働きたくないでござる！..!」

こんな話をしても、俺の手は休む事無く動き続けている。
量は三分の二に減っているが、それでもなお高くそびえる書簡の山。
天下統一したらおそらく、これ以上の仕事が毎日デフォルトで来る
のだろう。

そんな事..... そんな事！俺は絶対に認めない！

「.....ハア.....」

溜め息つかれた。

「とんでもない事言ってるから、どんな理由かと思えば.....」

「十分な理由だろうが。それとも桂花、お前一生を仕事で潰す気が？」

「華琳様と共に居られるなら構わないわ」

「仕事が増えれば、寵愛を受ける時間も減るぞ？」

「!..!..!」

俺も俺だが、お前もそんな理由で納得すんなよ。

「働きたく無いのも理由の一つだが、俺は義妹達と過ごす時間が減るのも嫌なんだよ。」

ただでさえ、盗賊やら豪族との戦いであんまり会えてないからさ

「お兄さんらしい考えですね」

「お、お兄ちゃんノノノ」

「んじゃ華琳に言ってくるわ」

「い、今からですか!？」

「孫子も言ってるだろ。長期戦より短期戦の方が良いって。動くな

「早い方が良い」

「柘殿、行く前にその書簡は片付けて下さい」

ウボア……

「へえ……そんな事を話してたの」

「華琳はどう思うよ」

「却下よ。そんな事をすれば、今迄私の覇道の為に死んでいった兵や将の魂を穢す事になるわ」

「それは思い上がりじゃねえか？」

「……どういう意味よ」

「兵はお前の覇道ではなく、国と家族の平和、己の欲の為に戦ったにすぎん。」

それに、民は天下統一なんぞ望んじやいねえよ」

ちよつと待て、なんで絶を構える？

待て待て首に突き付けるな、ヘモグロビンが出てる。

「本気で言ってるのね」

「本気じゃなきゃこんな事言わん。てか地味に痛い」

「一つ……条件があるわ」

「条件？」

「今日春蘭と風に涼州に行つて、馬騰を下してくるように令を出すつもりだったのだけど、貴方が行つてきなさい」

意味が分かりますん。

え、なに。もしかして俺が馬騰を仲間にしたら、乗ってやるってか？

「そういうことよ」

「俺馬騰と交渉できる官位持つてん」貴方董卓軍にいた時、帝から官位を頂いたそうね」霞え……………」

ええ貰いましたよ。貰いましたとも！

畜生、まさかフラグが立っていたとは……………華琳さん、やっぱり三国統一の話は無しの方向で……………ダメ？なぜ？Why？

「私だって、別に好きで戦を起こしてる訳じゃないもの。早期に終わるならよし。」

でも、漢の中でも特に馬騰は忠誠を誓ってるわ。それを説得する事が出来れば、

それは天が貴方を必要としてるのでしょ」

「既に失敗する臭いがプンプンしてるのは気の所為だと思いたい」

むしろ無理ゲー？原作でも馬騰の交渉は失敗してるし。

「準備が出来次第出立しなさい。それと……………私の顔に泥を塗ったら…分かるわね？」

「きめ細かい泥は、美肌効果があると言う……………分かった、分かったから絶を引こうとするな。引けば俺の胴体が一人歩きするぞ」

「なにそれ怖い」

目指すは怠情な日々（後書き）

申し訳ありません……！

これ以外言うべき言葉が見つかりません……

性格崩壊から、話の迷走まで謝罪するほかありません……

それでも、作者の自己満足に付き合っ頂けるならば幸いです。

ではまた次回まで ノシ

いざ涼州へ

「兄様、馬騰さんの所にはどのくらい滞在するんですか？」

「二日……長くて三日だな」

「美味しいものあるといいなあ」

「遊びに行く訳ではないぞ季衣？ 下手すると、戦が終わるかもしれない分かれ道だ」

どうも皆さん、最近人権ってなんだろうと本気で考え始めた季通です。

文官の仕事＋警邏隊の仕事＋部隊の訓練＋e t c

最後に寝た日を思い出せなくなった時は、サボり死神の元に逝く直前でした。

さて、なんでここに季衣と流琉の二人が居るのか、不思議に思ってる人もいるでしょう（自分含めて）

簡単に説明すると、華琳が二人の見聞を広める為に一緒に行くように言ったそうだ。

夕里はどうしたのかって？ 俺と風が離れ、更に夕里まで行くと仕事が大変な事になるそうで、なんとか説得してお留守番してもらってます。

「こうやって見ると、お兄さんがどれだけ幼女趣味なのが分かりますね」

「その定義の中に自分も入ってる事をお忘れなく。」

む、左斜めに砂塵……数は……20ぐらいか」

「兄様、見えてるんですか？」

「兄に不可能はない」

旗は馬……馬騰って事はないな。だとしたら、馬超か馬岱のどっちかか。

「どうしますか、お兄さん」

「警戒しつつ前進。馬旗だし、いきなり攻撃される事はないだろう」
「御意、なのですよ」

「え〜と……お兄さん達、こんな所でなにやってるの？」

「ちよつくら馬騰さんの所に行こうかとね。ああ、俺は李通と言つんだが、お嬢ちゃんは？」

「たんぽぽはねえ、馬岱っていうんだよ　よろしくー」

「おう！　よろしくな馬岱。で、後ろにいるこいつらは……」

「風は程？と言つのですよ」

「私は典韋といます」

「僕は許緒だよ」

「うん、よろしくー」

「……って、あれ？李通って……もしかして、魏武の双剣の一人の……？」

え、なにその厨二的名前。

「兄ちゃん知らないの？　春蘭様がねえ、「奴も私と同じ大剣を使ってるのだから、奴と私で魏武の双剣だな！！」って言ってたんだけど」

「春蘭様、最近名乗りの時よく言ってましたから……」

「本人が知らないという驚愕の事実。帰ったら問い詰めてやる……」
「うわ〜どうしよう……と、とりあえず双剣さん、おば様になにか
ご用ですか？」

双剣言つんじやねえ。

とりあえず、馬騰に面会して、魏に協力して欲しいとの旨を伝える。

「うう〜……たんぼぼこういう事苦手なんだけどなあ……」
とりあえず、おば様に会ってもらって事で良い？」
「むしろ手っ取り早くて助かる」

馬岱に案内されて、俺達は馬騰が治める街に着いた。

街を見た感想としては、活気はあるが、物流がそれほどないのか店
先に並ぶ商品が少ないように思える。
やっぱり土地が細い所為なのか？

「それじゃあおば様のところに行くから、馬預かってといていいかな
？」

「はい。では、お願いしますね」

「あ、ちつと待て……」

そして、馬の世話役と思われる人が馬を連れて行こうと黒天を引
いた時、黒天はその身を振るわせ、嫌がるそぶりをした。

「すまん、そいつは自分が認めた奴にしか従わないんだ。

風、スマンが先に行ってくれ。俺はこいつ繋いでくるから」

「では先に行ってるのですよ」

馬超 side

「よし、どうどう。今日はお疲れ様、黄鵬」

五胡を警戒するためとはいえ、やっぱり見回りは面倒なんだよなあ……。
それにしても、蒲公英のやつ途中でいなくなってたし……今日のあいつの鍛錬厳しくやってやるかな。

「午後は蒲公英の相手だけだし、帰ってくるまで何してよっかな……って、なんだこれ!？」

デ、デカい馬が小屋に繋がれてた……麒麟や紫燕より二回り位デカい……。

「あ、お帰りなさいませ、お嬢様」

「お嬢様は止めてくれって言ってるだろ。」

それより、なんだあのデカい馬。誰が乗るんだ?」

「あれですかい? あれは今、魏から来てる客人が乗ってきたんでさあ」

魏から!? 魏の連中がなんで西涼に……もしかして、自分達に加われって言いに来たのか?

「そいつらは今どこに?」

「はあ、おそらく馬騰様と会ってる筈ですが……」

「分かった、ありがと!」

「では、こちらで少々お待ち下さい」

侍女の人に案内され、玉座の間の様な場所で待つように言われた。

「兄ちゃん、僕なんか緊張してきたよ……」

「華琳から見聞を広める様に言われたんだろ。」

それに、今回交渉するのは俺と風だから、二人はそこまで緊張しなくていいよ」

「う……うん……」

「兄様はそれほど緊張してませんか？」

「踏んできた場数が違うからな」

二人の緊張をほぐす為話していると、奥の扉が開き、中から馬騰と思われる人が出てきた。

むう………デカイ………主に揺れる二つの果実が………

「兄様？」「兄ちゃん？」

「なにも見てませんよ？」

「その時点で、何か見たと言ってるようなものなのですよ」

嵌められた。しょうがないじゃない、男の子だものby李通

「待たせた様で済まないね、あたしが西涼を束ねている、馬騰だ」

「お目通り頂き、感謝いたします。私は曹操に仕えている、李通と

せていただきます。

「母様が親として失格だと!? 取り消せえ!!!」

「失格だろうが。子が道を外れて進んでると言うのに、殴って子を正そうともせず、説教もしないで只見てるだけ。そんな奴は親とは呼ばねえよ」

「私は道を外れてなんか無い!」

「誰がお前の事だと言ったよ」

「あたしは馬騰の娘、馬超だ!」

「知ってるわ!」

ん、ちよいまで。

なんか話が噛み合っていない様な気が…。

おい馬岱、お前何扉の影で笑ってんだよ。お前の姉だろ? 止めてくれよ

「やめな、翠!」

「でも母様!」

「やめなと言ってるんだ!」

馬騰に言われ、渋々槍を下げる馬超。

まあ眼はしっかりと俺を睨んでますけどね。何故だ?

「親失格か……そうだろうね。」

漢が腐っている事には気づいていたさ。でも、あたしは何もしてなかった。そう言われても仕方ないか

「俺だつて小さい頃馬鹿やった時は、お袋や親父によく叱られてたしな。」

でも、今となつちゃあそれが本当に有難く感じてる」

「それが親として正しい姿なんだろうね」

「あ、あの……」
「どうかしたのかい、翠？」
「そいつは、母様の事を親失格って言ったんじゃ……」
「ああ。漢はあたしにとつて子供みたいなもんだからね、それがこんな事になつてちゃあ、親失格と言われても仕方ないだろう？」
「え？」
「え？」

致命的な見解の相違があつたようです。
おい馬岱、なにお前腹抑えてんだ。肩がプルプルしてんぞ。

いざ涼州へ（後書き）

（9／19）

馬岱の馬超に対する呼び方と、馬超の一人称を修正しました。

さあして、ここが分水路だ。馬騰さんが協力してくれるなら、一番の難関はクリア。

もし断られたら……戦だろうなあ……賭けは俺の負けだから、三国統一を進めるんだよなあ……。

「まったく……使者が説教するなんて、聞いた事も無いよ」

「お兄さんは変態ですから」

「せめて変人と言ってくれ」

「変人でいいんですか……兄様……」

変態よりはよっぽどマシだと思う。

「ふむ、度胸も腕っ節もある。それに、頭も中々回る様だね……。

よし決めた！ 涼州はこれよりアンタに付いて行く。ただ……」

「ただ？」

「他の連中をどうやって説得しようかね……。

あたしが盟主って形にしてるけど、涼州は元々多くの諸侯が連なる連合だからね。

気に入ったから付いて行くなんて理由じゃあ、皆首を縦に振らないのさ」

「そこは母様の腕次第じゃないのか？」

「馬鹿だねえ、そんな口八丁で丸め込めるんだったら、涼州はとっくの昔に無くなってよ」

「つまり、私達に付くのに納得できる理由が必要、と言う事ですか？」

「そう言う事さ。良く分かったね、お嬢ちゃん」

そりゃそうだろうな。涼州の諸侯は天子……つまりは皇帝に忠誠を誓ってる訳だから、それを裏切るのに十分な理由が無ければ、不忠者として扱われる事になる。

「納得できる理由か………あ」

「何か思いつきましたか？」

「思いついたというか、発想を変えてみる事にした。付くのに納得できる理由じゃなくて、付いていきたいと思わせればいいんじゃない？」

「具体的に言いますと？」

つまりは、実績をたてれば良いという訳だ。

そこで俺が提示したのは、涼州の土地改善。涼州の土地は痩せている為、作物が育ちにくく食糧の殆どを他から輸入して補っている。だが物流の便が悪く五胡襲撃の可能性もあるので、普通よりも割高で買わなければならない。

その土地が改善されるとなれば、諸侯も付いて来てくれる………と思う………多分………メイビー………。

「だがどうするってんだい。あたしらだって何もしなかった訳じゃない。お偉いさんと呼んで、どうにかしてもらえないか聞いてみたが、口を揃えて難しいと言ってたんだよ」

「心配しなさんな馬騰さん、この問題は………十年程前に解決済みだ！………！」

「集まって下さってありがとうございます。それではこれより、堆肥制作を始めたいと思います！」

シー………

「んん！ 先ずは堆肥というものについて説明しましょう。」

堆肥とは簡単に言うと、土にとっての栄養を大量に含んだ土の事です」

堆肥がどういう物が説明した後、作り方を教える。

干し草と馬糞、土と適量の水をかけながら重ねて、二週間に一回上と下の土を返す作業をし、三十日程置いておくと堆肥が出来る。この時、水の量が多かったり、返すのが不十分だと良い堆肥は出来ない。

「これは俺の村で使われてる方法で、実際前年に比べ約三倍近くの量が収穫できました」

ザワザワザワ……………！！！！

「聞いての通りだ！もしこれが成功すれば、涼州の大地は大きく変わる！嬉しい事に、材料は文字通り腐るほどある！ さあ、分かつたら始めな！」

馬騰さんの声と共に動き始める兵と民の皆さん。

生ゴミを利用するって事は有つたらしいけど、それだと分解されるまで時間がかかるし、乾燥させないで使うと、土自体が悪くなってしまうので、安全にかつ有益に使うには堆肥が一番と言う訳だ。

「しっかし、こんなのが使われてるなんて、アンタどこの村に居ただんだ？」

「江夏にある小さい村ですよ」

「へえ江夏に。そういやあたしの知り合いも江夏に住んでるんだけど、元気にしてるかねえ」

その知り合いとやらは漢と一緒に働いていたが、結婚を機に軍を辞めて江夏で暮らし始めたそうだ。
いやねえ……そんな偶然があるとは考えたくないが。

「昔は鬼なんて呼ばれてて、アイツが全盛期だったら、呂布にも勝てると思うね」

「それは多分樊霊という名前の筈。うちのお袋がお世話になりました」

「アンタなんで樊霊の名前を！？　つてか、母親あ！！？」

そりゃ驚きますわな。その息子も大変驚いています。

「樊霊の息子だったのかい、通りで強い筈だよ」

「でも今のお袋を見たら、なんで俺みたいなのが生まれたのか疑問になりますよ。」

普段のお袋は、只のぱ〜ぷ〜ですから

「ぱ、ぱ〜ぷ〜？」

「人の前でいきなり惚気出すわ、頻繁に飯と言つ名の炭を出すわ、頭の中が杏仁豆腐で出来てるとしか思えない。」

あ、でも武の方は健在ですよ。今の俺でも勝てる気がしませんか
「ら

俺一応武力チート貰ってる筈だよな？　にも関わらず、その俺に勝つて……あれか、経験の差か？

それとも、チートを産んだら、その母親もチートになるのか？

「おお、そこにいましたか〜」

トテトテと歩いてきた風の手には、何枚かの紙が握られていた。

話を聞くと、他の文官の人達と同盟についての話をしていたらしい。

「二人は風と一緒に行ったのか」

「少しでも学んでおこうと思ったので。ですが……」

「……………」

「煙を出してやがる。難しすぎたんだ」

眼を虚ろにしてフラフラとしているのは季衣。

城に戻ったら、少しづつでもいいから勉強させなければ……。

「それで馬騰さん、改めて、これが魏との同盟の内容になります」

「ん？ いや、あたしは魏とは同盟を結ばんよ」

……………はい？

「ちゃんと言っただろう。涼州はアンタに付いて行くって」

「もしかして、兄様個人に付いて行くって事ですか!？」

「当然。あたしは会った事も無い曹操より、実際に会った李通の方が信用できるだろ？」

それに、力もあって頭も切れる、何より良い男だしね　翠の婿
にはピッタリだ」

「ちよ、母様!？　あたしそんな事聞いてないよ!？」

「いいじゃないか。翠、アンタは良い女だ。あたしが保証する。でもね、アンタは男に慣れてない。そんなだから、いつまでたっても恋人ができないのさ」

「そんなの母様には関係が……………」

「いいやあるね。可愛い娘の晴れ姿が見れないなんて、親として不幸の極みだよ」

おかしい。同盟の話をしてきた筈なのに、いつまにか嫁と婿の話に

なつてやがる。
どうしてこうなった？

「ZZZZ」

「寝んなし」

「おお！あまりの出来事に頭が現実逃避を」

「俺がしたいわ。」

「というか馬騰さ「瑪瑙だ」……………柎です……………。それより、馬超と結婚というのは？」

「なんだい、翠じゃ不満だったのかい？ となると後は蒲公英だけど…確かに翠よりは女らしいけど、体の方がまだまだでねえ。そういう趣味だってんなら構いやしないけどさ」

「いえ、そういう事でもなく……………」

「もしかして…………ふむ、まあ旦那には先立たれてるし、初めて会った時だってアタシの胸を見てたみたいだし、どうだい？ 翠や蒲公英よりは年を食ってるが、その分……………楽しませてやれるよ」

胸を見た事ばれてるし、仕方ないじゃ（ry

ええい体をくねらせるな！胸を強調するな！色々当たってるから、主に腕に！

「兄ちゃんから離れるー！！！」

「は、離れて下さい！」

いつのまにか復活した季衣と流琉が、瑪瑙を引き剥がそうとする。頑張ってくれ二人とも、俺は今欲望と理性が戦っていて動けそうにも無い。

「ふむ、お兄さんに付くですか…。まあお兄さん自身が魏にいるので、実質涼州は魏に付いたとみていいのでしょうか……………ね」

「意外と冷静ですね、風さん」

「いえいえ、風は一流ですから、今は大人しくしておくのですよ」

「言葉に含みがあるのが怖い」

「あ、あのさ……」

そんな力オスな状況の中、助けに来てくれたのは馬超だった。

しかし、なんで顔を赤くしてる。なんでモジモジしてる？

「あたしはその……まだ嫁とか婿とか、そういう事は分かんないけど……あ、あなたの事は気に入ったから、その………あ、あたしの真名は翠だ！こ、これからよろしく頼む！！」

助けに来てくれた訳ではないらしい。

しかし、そう真つ赤な顔をして言うのは、なんだ。

「可愛いな」

「へ？」

「おや、良かったじゃないか翠、可愛いなんて言ってもらえて。

婿殿は、アンタが気に入ったみたいだよ」

「 @ !? 」

「お姉さまだけずるーい！ たんぽぽはねえ、蒲公英って言うんだよ。よろしくね」

「た、たんぽぽ！ お前どこから出てきたんだ？」

「いんじゃないそんな事。それより良かったねお姉さま。男の人に可愛いって言ってもらえて」

「っ！／／／／／」

そして更に赤くなる馬超……いや翠か。ふむ、やっぱり弄りがいいがあるな。

「兄様……………」 「兄ちゃん……………」

「さて、落ち着け二人とも。まずはその手に持った武器を降ろすんだ」

「問答!！」

「無用です!！」

ドグシャア!!!

放たれたハンマーとヨーヨーは、きちんと俺の体にぶち当たった。

瑪瑙は当たる前にしっかりと避けていた。

しかしこれだけは言わせてもらいたい。

今回俺悪くなくね?

捏造 ダメ 絶対

翌日。

嫁婿騒動はあの後も続き、途中夜這いを成功させた奴が嫁になる等といった力オスな空気を漂わせていたが、全員にばれない様に一人隠れて寝てました。

どこで寝たかって？……………旅をしてた時は、よく黒天と一緒に寝てたんだよ……………。

「皆よく眠れたか？俺は眠れてない」

「お。起きてたのか。おはよう、柊」

「……………おはようございます、兄様」

中庭には翠とボロボロで不機嫌そうな流琉がいた。お互い獲物を持つてる事から、手合わせをしていたのだろう。

それより、何故か流琉や季衣の機嫌が昨日から悪い。俺が何をした？季衣と蒲公英の姿が見えないが……………寝てるだろうな。

「二人は朝から元気だねえ。それで、手合わせの結果は？」

「三勝一敗で、今の所私が勝ち越してるよ」

「流琉と比べると、翠の方が経験豊富だからな。その差だろうな」

常に五胡相手に、最前線で戦ってきた翠と、戦場に出てきたばかりの流琉。

どっちが勝つかと聞かれれば、誰もが翠と答えるだろう。

「だが、あの錦馬超から一本取ったとは、凄いな流琉」

「あ、ありがとうございます……………／／／」

「さて、俺も軽く体動かすとするかな」

「それじゃあ私の相手してもらっていいか？まだちょっとやり足りないからさ」

「あいよ。んじゃ自分の持ってくるから、ちっと待っていてくれ」

・
・
・
・
・
・

中庭、再び

「準備はいいか？」

「おう、いつでもいけるぞ」

「では……始め！」

右手に蒼天、左手に晴嵐を逆手に持ち、翠との距離を詰める。

翠はそんな俺を牽制するかのようになり、逆袈裟で切りかかってくる。

それを右手の蒼天でいなしながら、晴嵐で首を狙う。

「甘い！」

翠は槍を回して、石突きの部分で俺の腹を打つ。体を捻る事で何とかかわし、お返しとばかりに、左のエルボーで強引に距離をとらせ

る。
「いったあゝ……そこで肘かよお」

「人体是武器也。手刀足刀、肘も膝も立派な武器だよ」

「だな。そんじゃ今度は……こつちからだ!!」

今度は翠からの攻撃。一撃では終わらず、槍を回転させて俺に攻撃の隙を与えさせようとしなのが分かる。そして俺はその連撃を次々と撃ち落としていく。

素早く刃の部分と石突きを使って攻め立ててくるので、両手を使わないと一気に押し負ける。

「守ってばつかじゃあ勝てないぞ!!」

「なあに心配すんな。大体……覚えた

右脇腹をこうげきした後踏み込んで石突き」

「!?!」

蒼天で宣言した場所を防御すると、まるで示し合わせたかのように翠が攻撃をしてくる。

「上段から逆袈裟、石突きで喉を狙った後逆胴!!」

「な、なんで!?!」

自分が攻撃しようとしている場所を言われ、翠の動きが鈍る。そうなれば必然、俺の迎撃速度が上回るので……

「そらそらそらそらそらあ!」

「なあ!?! と、うがつ! ええ!?!」

翠が当たると思って防御する寸前で剣を退き、順手で持ってたのを途中で逆手に変えたり、その逆をやってみたり。自分の思っていたタイミングで攻撃が来ないので、翠の顔には困惑している様子がよく分かる。

「あーもう！まどろっこしい！！」

「はい隙有り」

「あ……」

一瞬の隙をついて、槍の下から晴嵐を翠の首筋に向ける。

「……………参りました」

「ふい〜……………あ〜疲れた……」

「なあ、なんで途中から私が攻撃する所が分かったんだ？」

「んあ〜……………あれか……簡単に言つと、翠の攻撃の型を覚えたからだよ」

「私の……………型を？」

翠は基本的に馬上で戦うのを常としている為、型の殆どはそれに集約される。

故に地上で戦う型は限られている訳だから、覚える事も可能と言っ訳だ。

多少の誤差や違いはあろうとも、型から派生した動きなので、よむ事も可能なのである。

「まあこれは地上に限った話だから、馬上で戦ったらどうなるかは俺にも分からんけどな。

というより、馬上で型が増えるってのがおかしいんだよ」

「私らは、生まれた時から馬と接してるからね」

互いに手合わせの感想を述べていると、侍女の人がこちらに近づいてきた。

風が俺の事を呼んでいるらしく、

「当事者のお兄さんが、報告書に携わってくれないと、無い事無い

事書いてしまつかもしれませんね」

とのこと。

無い事無い事って、それ只の捏造じゃねえか。

「流石にそんな事を書かれたら、向こうに帰った時何が待ってるか

……

ちよっくら行ってくるわ」

「とりあえず、無い事無い事ってなんだよ」

「そうですね〜……お兄さんが瑪瑙さん達から求婚されて満更でもない事や、

翠ちゃんと仲睦まじく、息を荒くしていた事等ですね」

「無い事というより、有った事を誇張表現すんのかい。捏造より性質が悪いわ。

てか息を荒くしてたってなんだよ」

「おや、中庭で流琉ちゃんがいるにも関わらず、男女の熱い戦いを繰り広げていたじゃないですか」

「素直に手合わせとかけよ。というか見てたのか」

「ZZZZ……」

よし放置しておこう。

凜や夕里ならまだしも、風の場合ホントに書きかねんから危ない。

桂花？あれは確実に書く。

あ、本当に書いてあった。

「修正修正……つと」

「ああ〜、折角書いたのに……」

「こんなもん出されたら、俺がとんでもない目に会うわ」

涼州は味方になった。

でも俺が率いる事になった。

嫁さん候補が三人になりました。

昨日から流琉と季衣の機嫌が悪いです。理由は不明。義兄的にとても心が痛いです。

うん。要約したけど、大体こんなもんだろ。

「なんで最後のが入ってるのですか。しかも書簡五つ分」

「いつのまにこんなに……まあいいか」

「華琳様からお叱りを貰えますが？」

それは勘弁。

俺は百合っ子と違うので、お仕置きで喜ぶHENTAIではないのです。

「後はまあ、細々とした同盟の内情だな。そこら辺は俺もまだ知らないな」

「風が纏めておいたので、お兄さんも後で眼を通して置いて下さいね」

「いつもすまないねえ風……」

「そういう事は言いつこなしですよ、お兄さん」

そんな漫才をしつつ、報告書を仕上げていると、なにやら外が慌ただしくなっていた。

窓から首を出して事情を聞いてみると、五胡の大軍が攻めてきているらしい。

どっからどうみても、俺らも狩りだされるフラグしか見えない。

「俺らも準備しますか、風？」

「ですな」

ハア……………季衣達には嫌われるし、五胡は攻めてくるし……………帰った
ら褒美の休暇使って、休もうかな。

捏造 ダメ 絶対（後書き）

土曜日曜と幕張メッセに行ってきたので、更新が遅れてしまいました……

10月にはインターンシップが始まり、ゲーム等のデバッグ作業をしてきます。

なので更に更新が遅れる可能性がありますが、時間を見つけて少しずつ作って行こうと思います。

義妹の心、恋心

瑪瑙 side

「もたもたするな！ 部隊長は自分の部隊纏めたら、報告をしな！」

まったく、なんだってこんな時に攻めてくるかねえ。

いやでも、好機と言えば好機だね。ここで旦那の実力を見せれば、まだ渋ってる奴等も協力するようになるだろうしね。

うん、前言撤回だ。よくぞ攻めてきてくれた五胡よ。アンタらを嘗めてる訳じゃないけど、涼州を旦那に付かせる為の生贄になつてもらうよ。

え、旦那って誰かだつて？アツハツハ、終に決まってるじゃないか。翠と蒲公英には悪いけど、あんな良い男滅多にいないからね。

あの時は冗談交じりで言っただけど、やっぱりあたしも一口乗らせてもらうよ。

「馬騰様、今動ける者達、全員集まりました！」

「御苦労。何人位だい？」

「騎馬二千 歩兵三千 弓兵二千五百です！」

「相手は一万、騎馬二千じゃあ心もとないね……。誰がある！」

「はっ！」

「悪いけど、旦那達も呼んできてくれるかい」

「旦那……あ、了解しました！」

……………アイツ、よく旦那で誰だか分かったね。

「俺達も呼ばれる気配がした。何かやる事有るか？」

「おや、今使いを送ったんだが……。まあいいや、ちょっと動かせる兵の数が心許無くてね、悪いけど手伝って貰っていいかい？」

「そう言われましても、私達が連れてきている兵は五百。双方どの位の数なのですか？」

「蒲公英に周囲の奴等も集めさせてるけど、今動けるのは約七千五百、五胡は一万で攻めてきてる。そこで……。柊に率いてもらいたいのさ」

「俺に？」

「そうさ。ここで柊があたしらを率いて五胡の連中に圧勝出来れば、他の連中も

付いてくるだろうし、あたしの旦那として認められる事になる」

「……前者はいいとして、後者は一体どういう事？」

「……良かったです兄様、綺麗な人が奥さんになって」

「頼む流琉、そんな眼で睨まんでくれ。というか、俺だってまだ困惑してんだから」

「じゃあ嬉しくないの？」

「いや、そりゃまあ嬉しいが……。ああ季衣までそんな眼で俺を見るのか……」

おや？ あのお嬢ちゃん達の反応……。ふむ……。いやはや、これは悪い事してしまったかな。

とりあえず、まずは話をしてからだね。

・
・
・
・
・

さて、五胡との戦いなる場所に行くんだけど……ちょっと気になる事が出来ちまったねえ。

「なあ許緒ちゃん、典韋ちゃん。ちょっといいかい」

「どうしましたか、馬騰さん？」

「どうしたの？」

「率直に聞くけど、二人は柁の事が好きなのかい？」

「ふえ！？」「にゃ？」

典韋ちゃんは決定。許緒ちゃんは……まだ自分でも分かって無いって感じが。

なるほど。あたしらが柁の嫁になるって言ったもんだから、ヤキモチ焼いてるって事かい。

「分かりやすい反応ありがと。それで？どうなんだい？」

「え、ええっと……その……」

「僕は兄ちゃんの事好きだよ？」

「それは兄としての好きかい？それとも、男として好きなのかい？」

「……僕はまだよく分かんないや。でも、兄ちゃんと一緒にいると、胸がポカポカしてくるんだ！」

まだ自覚出来てないけど、何となくは感じる様だね。

芽生え始めてるってのも、中々可愛いもんだね。

「それで？そつちの方はどうなんだい？」

「い、言わないと……ダメでしょうか？」

「勿論」

「ううう……わ、私は……兄様の事が……好き……です／＼／」

ハッハッハ！！まったく果報者だね柁は！　こんな可愛い娘二人に

好かれるなんてね。

当の本人は前の方に送つといたし、根掘り葉掘り聞くとするかねえ
……

瑪瑙 side out

馬騰さんが兄ちゃんを婿にするって言った時、胸の辺りがモヤモヤ
した。

うう…なんかヤダなあ……。兄ちゃんに会うと、変な態度とっちや
うし……。

流琉だったら、何か分かるかな？

コンコン

「流琉、入っていい？」

「季衣?! ちょっと、ちょっと待って!……いいわよ」

「? なにやってたの？」

「な、なんでもないから。それよりどうしたの？」

「えっとね、兄ちゃんの事なんだけど……」

「兄様の事？」

「うん。なんかね、馬騰さんが兄ちゃんを婿にするって言った時、
胸の辺りがモヤモヤしたんだ。」

それから兄ちゃんと会うと、ポカポカもするんだけど、モヤモヤ
も大きくなって、

八つ当たりして……ねえ、流琉はなんでだか知らない？
「なんでって……うー……」

流琉も知らないって言ったらどうしよう……。風ちゃんに聞く？
でも風ちゃん、最近忙しそうだしなあ……。

「ねえ季衣。季衣は兄様の事どう思ってる？」

「どう思ってるって……好きだよ？ 強いし優しいし、なんたって兄ちゃんだもん」

「えっとね、そういう事じゃなくて「許緒將軍、いらっしやいますでしょうか？」

こんな時に……はい、どうかしましたか？」

「はっ、五胡が攻めてきたので、我らも助勢する為集まるようにと、李通將軍から言伝を預かって参りました」

「分かりました。季衣……許緒もここにいるので、報告は省いて構いません」

「はっ！」

助勢するって事は、馬騰さん達と一緒に戦うって事だよな？

「そういう訳だから、この話はまた今度でいい？」

「うん……。じゃあ早く準備しよう、流琉！」

「ちよっと待って、季衣！」

・
・
・
・
・

五胡と戦いに行く途中、馬騰さんが話し掛けてきた。馬騰さんは、僕達が兄ちゃんの事を兄ちゃんとしてじゃなくて、男の人として好きなのかって聞いてきた。僕は……どうなんだろ？

「……僕はよく分かんないや。でも、兄ちゃんと一緒にいると、胸がポカポカしてくるんだ！」

そう言うと、馬騰さんはなんだか嬉しそうに笑っていた。

兄ちゃんとして好きなのか、男の人として好きなのか、かあ……。僕の好きは、どっちの好きなんだろ。兄ちゃん兄としてが好き……。うん、やっぱり胸がポカポカする。兄ちゃん男の人としてが好き……。あれ？なんか顔が熱いや。恥ずかしい……。のかな。

でも……。嫌じゃ……。ない。

季衣 side out

流琉 side

兄様が結婚する……。本当なら凄く良い事の筈なのに、どこかでそれを喜んでいない自分がある。

多分、私はヤキモチを焼いてるのだと思う

その所為で、兄様に八つ当たりしてしまってる……。はあ、やだなあ……。

寝台に寝転がり、枕に顔をうずめて足で寝台をポフポフと蹴る。なんだか子供っぽいけど……誰も見てないし、いいよね？ 私今酷い顔してるんだろ？……。

コンコン

「流流、入っていい？」

「季衣？！ ちょっと、ちょっと待って！」

寝台から飛び起きて、暗そうにしてるであろう顔を、深呼吸して元に戻す。

それにしても、どうしたんだろ季衣。もしかして、街に行きたいのかな？

「いいわよ」

「？ なにやってたの？」

「な、なんでもないから。それよりどうしたの？」

「えつとね、兄ちゃんの事なんだけど……」

「兄様の事？」

季衣も兄様が婿になると言う話を聞いてから、モヤモヤしていたらしい。

その話を聞くに、季衣もヤキモチをしていたのだが、自分ではそれがなんなのか分からないので、私の所に来たみたいだけど……うう、私だってその事で悩んでるのに……話を聞いてもらいたいのはこっちだよ……。

「ねえ季衣。季衣は兄様の事どう思ってる？」

「どう思ってるって……好きだよ？ 強いし優しいし、なんたって

兄ちゃんだもん」

「えつとね、そういう事じゃなくて、許緒將軍、いらっしやいます
でしょうか？」

「こんな時に……はい、どうかしましたか？」

「はっ、五胡が攻めてきたので、我らも助勢する為集まるようにと、
李通將軍から言伝を預かって参りました」

五胡が！？ いくらなんでもこんな時に来るなんて……。

「分かりました。季衣……許緒もここにいるので、報告は省いて構
いません」

「はっ！」

まったくもう。説明しようとした矢先に……しょうがない、話は戦
いから帰ってきてからにしよう。

「そういう訳だから、この話はまた今度でいい？」

「うん……。じゃあ早く準備しよう、流琉！」

「ちよつと待って、季衣！」

扉を勢いよく開けて走り出す季衣。まったくもう、季衣ってば、本
当に悩んでるのかな？

・
・
・
・
・

「率直に聞くけど、二人は柵の事が好きなのかい？」

「ふえ！？」「にゃ？」

五胡との戦いに行く途中、馬騰さんがこんな事を聞いてきました。も、もしかして気付いてたでしょうか？ど、どうしよう……。そんな事を考えてると、季衣が馬騰さんの問いに答えていた。その後、あの時私が聞けなかった、兄として好きなのか、男の人として好きなのかを聞いてくれたので、助かりました。

でも……。季衣が答えたって事は、私も言わないとダメなのかな……。？

「それで？そつちの方はどうなんだい？」

「い、言わないと……。ダメでしょうか？」

「勿論」

「ううう……。わ、私は……。兄様の事が……。好き……。です／＼」

無論兄としてもだけど、男性としても……。

ハア、でも兄様はどう思ってるんだろう……。私達はやっぱり、義妹として見られてるのかな？

それだったら、ちょっと悔しいなあ。た、確かに、背もむ、胸もまだただだけど……。私だって、女なんですからね、兄様？

流琉 side out

「今回俺の出番が少ない」

「僕にはそういつのまにいいのですよ。」

立ちこめる暗雲

「さて、いよいよ五胡との戦いが始まる訳だが、戦い方はどうするよ?」

「本来ならば、数で勝る敵を相手に平地で戦うのは愚策と呼べますが……ここは一つ、お兄さんに頑張ってもらおうとしましょう」

と言う訳で、風が出した策はこんな感じ。

弓三回射撃ののち、俺単騎突撃。騎馬を千、兵を半分に分け二本の槍となつて左右から攻撃。

うん、とりあえず俺が単騎で突撃するのが入ってるけど、五胡の陣計を崩す為なのだから仕方ない。

「つて言うんでも思つてんのか?」

「そう言われましても。お兄さんの戦い方ですと、敵と一緒に味方にも被害が出てしまいますので」

「いくらなんでもそれは無茶じゃないか? たった一人で一万に突撃するなんて……」

俺の味方はお前だけだよ、翠。

「でもお兄さん、流琉ちゃん達に良い所を見せる絶好の機会ではないですか?」

「ちよつくら行ってくる」

「お、おい! 柊!」

「俺の戦つてるとこ見た事が無い？」

突撃の準備をしている時、二人から聞かされた驚愕の事実。

そついやそつか。連合の時は二人はいないし、袁紹の時は俺と俺の部隊だけだったからな。

「そつか……なら、頑張らんな。義妹の前で、無様な恰好は出来ん」

「兄様気をつけて下さいね？」

「頑張つてね、兄ちゃん！」

「あいよ。ん〜じゃ、ぼちぼち行ってくるわ」

二回目の弓の正射が終わり、三回目が始まると同時に竜殺しを手に構え、黒天で駆けだす。

さあて、頑張つて良いとこ見せるとしますかね。

「お前達、準備は出来てるか？ 俺は出来てる」

なにはともあれ突貫。竜殺しを左右に回しながら振り、近づく敵をぶった切っていく。

進行方向にいる奴は、黒天が踏みつぶしてくれるので楽ちんです。

「はい、ちよつと通りますよー！！！」

結構な速さで剣をぶん回してるので、風圧で二次被害が凄い事に……。飛んでくる矢は、この風圧で殆ど落としています。

「はん〜けい〜ひやく〜にじゅっせ〜んちが〜このけんの〜と〜どくきょり〜」

あれからしばらくの間五胡兵の中を縦横無尽に駆けまわり、軽く迷子になっている李通です。
それにしても、いつになったら戻してくれるのだろうか？

「いつそのまま殲滅してみようか？ む、銅鑼の音。これでようやく帰れる」

本陣に戻る時、五胡の方を見てみた。はて、あいつらあそこまで少なかったかな？

まあいいや。後はノンベンダラリと後ろで休ませてもらおうとしよう。

「ただいま」

「……」

「お帰りなさい、なのですよ」

「おう。それよりどうした、なんで固まってるんだ？その四人は？」

「兄様……いつもあんな戦い方なんですか？」

あんなと言われても、自分では見れないからねえ。なに、そんなに
おかしい戦い方だったか？

「絶え間なく人が飛んでたら、そりゃおかしいと思うよ」

「でも兄ちゃんかつこ良かったよ！」

「ありがとよ、季衣。頑張ったかいがあるってもんだ」
「歓談の最中すみませんが、そろそろ攻撃を始めるのですよ」

そついやそんな作戦でしたな。

「も〜！せつかく蒲公英が急いで皆連れてきたのにー！」

頬を膨らましてむくれる蒲公英。その後、予定通り左右から挟撃を仕掛け、大した被害も無く五胡を殲滅する事が出来た。

だがタイミング悪く、兵を纏めて来た蒲公英が自分の見せ場が無いという事にご立腹。

そして現在に至る。

「まあそう言うなって。どのみち、兵は集めなくちゃいけなかったんだからさ」

「そういう問題じゃないの！折角お兄様に、蒲公英が頑張ってる所見てもらおうって思ってたのに〜」

「お兄様？」

「え？お姉様の旦那様だから、蒲公英のお兄様でしょ？」

「な?!なに言ってるんだ馬鹿!!」

「さあ〜て、戦後処理戦後処理……」

現実逃避位させて下さいな。

「戦後処理と言えば、瑪瑙さんはこれからどうするんです？」

「どうする、とは？」

「いやほら、流石に涼州州牧の馬騰が、魏に行く訳にもいかんでし

よ？」

「それについては心配ないよ。前も言ったが、私は只の代表だ。私以外にも優秀な奴は大勢いるからね、涼州の事はそいつらに任せる事にしたよ」

「つまり？」

「安心して、柁を籠絡出来るってことさ」

胸の下で腕を組んで下さい、色々と強調されていますから。

それに、そんな事をするとは義妹・sの機嫌が……………

「？ どうしたの兄ちゃん？」

不機嫌ではない……………だと……………!？

どうやら、不機嫌の原因を解決できたっぽい。これで俺も安心して生活できる！

「ねえ〜ねえ〜兄ちゃん」

「どうした季衣よ？」

「兄ちゃんって、僕の事好き？」

「何を当たり前のことを。勿論好きだよ」

「えへへ〜 / / / /」

「あ、あの兄様……………」

「心配しなさんな、流琉の事だっただけだよ」

「あ、ありがとうございます…………… / / / /」

一体どうしたんだ二人とも。

まあいいか。それより、戻ったら魏に帰る準備をしないと。戻ったら春蘭に呼び名の件を問い詰めて、報酬の休暇を満喫して、天下三分を進めて……………やる事が多いねえ……………。

「しかし、これで大陸を統べる奴は大体絞られてきたねえ。さあて

……あたしらはどこから攻めるんだい？」

「いや攻めないよ？」

「え？」

「なに言っただよ柊、それじゃあどうやって天下統一なんてするんだよ」

「天下統一なんてしねえよ。というか、まさか説明してなかったとか？」

そついや天下三分についての説明をしなかったような気が……

と言つ訳で説明。華琳との賭け、涼州との同盟、三国同盟の相手等諸々を説明していく。

「……」

「翠、口が空いてる」

「な、なんだよそれ！？じゃ、じゃあ、もし涼州が手を組まないって言ったら……」

「無論天下三分は白紙。華琳が涼州を攻めた後、劉備や孫策を攻めて、天下統一を目指す事になってただろうな」

「いやはや……あたしらは、とんでもない選択をしたみたいだね……」

「それでも多分戦わなくちゃいけないんだけどねえ」

「どうしてですか？ 同盟が結ばれると言つのなら、戦う必要なんて……」

納得の問題なのさ。互いが納得できなきゃ、同盟しても続く訳が無い。

だから自分達の力を見せる必要があるんだ。

「うわ、体育会系……」

「そつ言うなって。それに、一度手合わせした奴の事だったら、何

となくだが信用できるだろ？」

「そりゃあ、まったく知らない人よりは……」

「となると問題は、未だ残る諸侯と、五胡、南蛮って言った所かい」
「それらに勝った後も、各国との貿易、盗賊の討伐、法の整備、やる事は山積みなのですよ。」

まあ、その為に頑張るのはお兄さんなのですけどね」

「俺……この戦いが終わったら、村でノンビリ暮らすんだ……」

「却下、なのですよ」

カムバック マイ 安息の日々

????? side

「ねえねえまーくんまーくん、ひーくんの事聞いた!？」

「聞ってるよ。なんでも、魏の夏侯惇將軍と一緒に、魏の双剣と呼ばれてるみたいじゃないか」

「うんうん。ああ……会いたいなあ…あれから全然帰って来てくれないし……」

「会えないなら、会いに行けばいいじゃない!！」

「黄蘭?それに美徳まで、一体どうしたの?」

玄関の戸をおもいつきり開けて入ってきたのは、黄蘭と美徳の二人だった。

「実は、私達も娘に会いたいねえって話をしてね。最近軍の睨みがあるから賊も見えないし、だったらこの際、娘達に会いに行こ

うって考えてたのよ」

「どうだい樊霊、アンタも自分の息子に会いたいんじゃないのかい？」

そうねえ…ひーくんの事だから、元気にはしてると思っけど……

「なら行ってみようかしら」

「」「魏へ！」「」

「………すまん、息子。父には止められそうにもない……」

樊霊 s i d e o u t

「どうしたんだい柊、体が震えてるよ？」

「分からない…だが……今迄にない悪寒が……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1384u/>

真・恋姫†無双 ～転生して兄貴やってます～

2011年9月30日14時01分発行